北二番町　二一　木町通　二九　角五郎町　二　澱町　一
東四番町　四八　東五番町　八　東六番町　二六　末無掃部町　二
空堀町　一　花京院通　八　元寺小路　九八　名掛町　一五九
東三番町　四七　外記町　三　長町　二　大佛前　四
裏五番町　一九

第五節　殉職消防組員

身は輕き消防夫と一般より冷眼視せらるゝとも心は常に義勇奉公の念に滿ち、一旦非常召集を受けんか、挺身之れが救難に當り自己の身命を顧みずして職務に服す、これ忠心愛國の發露に非らずして何ぞや、爲めに職に殉ずるの士に對しては衷心之れが慰靈の途を盡すは吾人の義務なり、故を以て本縣消防協會に在りては昭和六年六月西公園地をトして宮城縣殉職消防組員招魂碑を建立し、毎年例祭を行へり、我が仙臺消防組員の殉職者の事蹟左の如し。

殉職消防組員事蹟概要

大正四年五月拜命　故三等消防手　紺野松吉

大正五年一月四日春季演習の際喞筒係として喞筒放水壓迫に從事中急激に活動せる爲め心臟病に冒され其の場に於て卽死したるものなり。

明治三十二年九月三等消防手拜命　故消防小頭　堀江千代治

大正八年三月二日仙臺市大火の際南町旅館芭蕉館の屋上に於て纜を把持し防火中烈風の火勢と焰々たる黑煙の爲め同所に留まり難きに至り場所を變更せんとする際高さ四丈餘の高所より纜と共に墜落し頭部其他を强打し人事不省に陷り市内立町通愛生園に入院治療を受けたるも其の効なく死亡したるものなり。

明治十五年六月三等消防手拜命　故喞筒係長　寺島豊作

大正十一年十二日仙臺消防組常備消防係長として見張警戒に服務中强度の腦溢血症にて倒れ醫療手當の効なく同月十日遂に死亡したるものなり。

尙縣下他消防組員の殉職事蹟亦左の如し。

明治二十七年八月三等消防手拜命　故高砂消防組小頭　鈴木榮五郎

明治三十八年十月十六日宮城郡高砂村中野小畑貞右衞門方火災に際し消防手を指揮し消火に從事中同人方土塀の爲め放水意の如くならざるを以て該塀の破壞に從事中土塀の下敷となり殉職せるものなり。

明治二十七年三月三等消防手拜命　故一迫消防組一等消防手　黑澤泰治

明治四十二年二月栗原郡一迫町眞坂菅原辰之丞方藁荷穗より出火の際業に先んじ一身の危きをも顧みず防火に從事中火煙に襲はれ遂に殉職したるものなり。

大正九年五月三等消防手拜命　故南方消防組三等消防手　高橋喜助

大正十三年十月五日午後八時登米郡南方村大嶽區嶽内恭善方火災に際して率先現場に駈付け拔群の働を爲して同九時三十分頃、歸宅途中より非常なる腹痛を感じ辛じて同僚に援けられ歸宅したるも腹痛益々烈しく醫師遠藤丈助、佐藤靜の熱心なる手當を受けたるも遂に其の効なく九日午前三時死亡したるものなり。

大正二年六月三等消防手拜命　故槻木消防組二等消防手　渡邊萬七

大正十四年一月三十一日午後四時頃柴田郡槻木町六字舟迫字二木板圍國道筋松並木老松木（控木根廻二丈高さ五丈餘）野火より燃へ移り折柄西風强く火勢猛烈になり該木を伐採するにあらざれば消火の途なく渡邊消防手は出場組員より選拔されて其の伐木に從事中午後五時三十分俄然倒木し其の下敷となりて悲慘の卽死を遂げたるものなり。

大正四年十月三等消防手拜命　故宮消防組二等消防手　渡邊幸治

昭和二年五月三十一日夜半隣村刈田郡圓田村赤野部落大火の際卒先腕用喞筒を擁して同僚と共に仙南溫泉軌道に據り現場赴援の途中通稱疣岩附近に於て急カーブの爲めトロ脫線顚覆に其の下敷となり悲慘なる死を遂げたるものなり。

昭和二年五月三等消防手拜命　故荒雄消防組二等消防手　伏見熊之助

昭和三年十月二十一日居村役場地内に建設しある木製火見櫓を鐵骨に改造する爲め組頭矢越亥八郎の命に依り組員十七名と共に之が取除き從事中同日午前十時頃該火見櫓の支柱線を取外す刹那支柱線の一部が高壓雷線に接觸したるため感電卽死せるものなり。

明治三十五年十一月十五日一等消防手拜命　故小野消防組小頭　福田兵治

大正元年九月鳴瀨川氾濫の際小野堤に出場し部下を指揮監督し警戒防禦に從事中同月二日午後六時頃防水に築造したる桿頭破損の刹那胸部を强打し昏倒したるを防禦に從事中の者に助けられ自宅に運搬醫療を受けたるも遂に同月二十四日午後八時死亡したるものなり。

明治三十七年三等消防手拜命　故深谷消防組三等消防手　大橋八百藏

明治二十八年十二月八日桃生郡廣淵村字町四十一番地本村八太夫方より出火大火に至りたる際消防に從事中腕用喞筒の木挺にて胴部を强打し肋骨三本を挫折し其の場に昏倒卽死したり。

第六節　消防補助機關

消防組補助機關として自警團、消防後援會、少年消防隊の設けあり、以下各項に於て之れを述ぶ。

第一項　自警團

自警團は殆ど市内各町に組織を見ざるなく、昭和九年末現在一三五團あり、主たる事業は

一、法令ノ周知實行ニ關スル事項

一、犯罪豫防ニ關スル事項
一、災害防止並ニ其救護ニ關スル事項
一、惡風陋習ノ艾除ニ關スル事項
一、衞生、交通思想ノ普及向上ニ關スル事項
一、前各項ノ外市自警團ヨリ指示セラレタル事項及分團ノ總會ニ於テ特ニ必要アリト認メタル事項

而して火災の場合非常線警戒援助、傷病者救護、其他之れが應援の目的を以て豫め各團に五名の當番委員を選定し非常の際には迅速出場應援の任に當る、其の規約左の如し。

自警當番委員出火出場心得

第一條　仙臺市内ニ火災發生シタルトキハ各町自警團ハ互ニ相應援スルモノトス
第二條　各町自警團ハ火災應援ノ爲メ當番委員五名ヲ選定シ豫メ其氏名ヲ市自警團長ニ報告シ置クモノトス
第三條　選定セラレタル當番委員ハ火災信號ト同時ニ一定ノ標章ヲ附シ急速現場ニ出場シ市自警團幹事ニ其旨申出ツヘシ
第四條　當番自警委員ノ任務ハ概ネ左ノ如シ
（一）非常線警戒援助
（二）傷病者其他救護
（三）家財道具其他搬出ノ援助
（四）搬出シタル道具類ノ盜難豫防警戒

（五）其他市自警團長ヨリ臨時指示セラレタル事項
第五條　任務中ハ責任ヲ重ジ誠實ヲ旨トシ親切叮寧事ニ當リ苟モ粗暴野卑ノ言動アルヘカラス
第六條　任務ニ就キタル當番自警委員ハ濫リニ其位置ヲ離レサルコト
第七條　警戒解除ノ通知アリタル時ハ退場ニ際シ市自警團幹事ニ名刺ヲ提出スルモノトス
第八條　近火ニ際シテハ本則第二條ノ規定ニ拘ハラス急速出場シ適當ノ處置ヲ執ルモノトス

更に各町自警團の連絡統一を圖る目的より仙臺市自警團の組織あり其の規約左の如し。

仙臺市自警團規約

第一條　本團ハ仙臺市内各自警團ヲ以テ組織シ仙臺市自警團ト稱ス
第二條　本團ノ事務所ハ仙臺警察署ニ置ク
第三條　本團ハ市内各自警團相互間ノ連絡統一ヲ圖リ且ツ關係官公署公私團體等ト連繫ヲ保チ自警團ノ主眼トスル所ヲ容易ニ達成セシムルコトヲ目的トシ之ニ必要ナル事業ヲ行フ
第四條　本團ニ左ノ役員ヲ置ク
團長　一名　幹事若干名
第五條　團長ニハ仙臺警察署長ヲ推薦ス
幹事ハ仙臺警察署市部勤務外勤巡査部長並署内警部補以上ノ幹部ヨリ團長之ヲ囑託ス
團長及幹事ノ任期ハ在署中トス
第六條　團長ハ團務ヲ統理ス

幹事ハ團長ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス團長事故テルトキハ團長ノ豫メ指定シタル順序ニ從ヒ幹事其ノ職務ヲ代理ス

第七條　仙臺市長ヲ本團ノ顧問ニ推薦ス

第八條　本團ニ代議員若干名ヲ置ク任期ハ滿二ケ年トス

第九條　代議員ハ關係方面區域內各町自警團長中ヨリ互選ヲ以テ選擧ス

方面並代議員數ハ總會ノ決議ヲ經テ之レヲ定ム

但シ任期中缺員相生シタルトキハ隨時補缺選擧ヲ行フベキモノトス

第十條　代議員ハ關係區域內自警團長ヲ代表シ團長ノ諮問ニ應ヘ又ハ自警團ニ關スル建議ヲ爲ス事ヲ得ルモノトス

第十一條　團長ハ事業施行ニ關シ臨時必要ニ應シ代議員會ノ意見ヲ聽キ施行委員ヲ囑託スルコトヲ得

章十二條　本團ノ通常總會ハ每年春季ニ之ヲ開ク　但シ團長ハ必要ニ應シ臨時總會又ハ代議員會ヲ召集シ又ハ召集ニ代ヘ文書ヲ以テ協議シ事案ヲ決定スルコトヲ得

總會ハ團長顧問及團員タル市內各自警團ノ團長ヲ以テ組織シ本團長ヲ以テ議長トス

重要案件ハ總會ノ決議ヲ經ルヲ要ス

但シ緊急ヲ要スル事項ハ團長ニ於テ代議員會ノ意見ヲ聞キ直チニ施行スルコトヲ得

第十三條　本團ノ經費ハ各町自警團ノ負擔トシ其徵收及支出ノ方法ハ總會ノ決議ニ依リ之ヲ定ム

第十四條　團員タル自警團ノ團長ハ規約ノ變更及役員ニ異動ヲ生シタルトキハ十日以內ニ屆出ツヘキモノトス

第十五條　團長ハ團ノ事業ニ關シ功勞偉績アリ若ハ一般ノ模範ト爲スニ足ルヘキ自警團又ハ篤行者アル時ハ情狀ニ依リ表彰シ又ハ其筋ニ表彰方ヲ具申スルコトヲ得

第十六條　團長ハ各自警團長在職中死亡シタルモノ及團員中殉職シタルモノアルトキハ弔詞ヲ呈シ又ハ相當ノ香華ヲ

贈與スルモノトス

第十七條　團長ハ關係團長ノ具申ニ基キ町內ノ安全ヲ害スルモノニ對シ特ニ戒飾ヲ加ヘ又指導スルコトアルヘシ

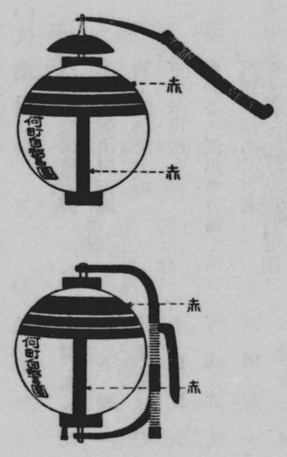
第十八條　團長ハ團ノ事業ニ關シ顧問又ハ代議員會ノ意見ヲ聽キ其ノ筋ノ諮問ニ應ヘ又ハ建議スルコトヲ得

第十九條　本規約ハ總會ヲ經ルニアラサレハ改廢スルコトヲ得ス

第二十條　此ノ規約施行ニ關シ必要ナル規程ハ團長之レヲ定ム

第二十一條　各町自警團ニ於テ使用スル提灯は爾後左ノ雛形ニ依ルモノトス

表面ニハ何町自警團長ト表記スルコト其ノ他ハ何町自警團トノミ表記ス。團長ハ鏃形ノ馬上用トス。



以上仙臺市自警團役員及各町自警團組織概要左の如し

○仙臺市自警團

團長	地方警視 仙臺警察署長	阿部三右衞門
顧問	仙臺市長	澁谷德三郎
幹事	宮城縣警部 仙臺警察署行政主任	中村千代雄
同	宮城縣巡査部長	小林喜代美
同	同	紫崎市郎兵衞
同	同	小野寺源治兵衞
同	同	相澤淺右門
同	同	菊地馨
同	同	阿部巳代治
同	同	今野長松

同　同　同　同　岡田庄治

○代議員

八幡町派出所方面　小梨文之助
木町通派出所方面　日下要一
通丁派出所方面　佐藤萬兵衛
本柳派出所方面　木村貞男
東一番丁派出所方面　宮崎武治
芭蕉辻派出所方面　大橋憲一
東三番丁上杉山通派出所方面　大野金三郎
宮町小田原派出所方面　津田久作
名掛丁派出所方面　磯部雄三
停車場前派出所方面　山田正一
新傳馬町派出所方面　一力次郎
上染師町派出所方面　板橋儀四郎
片平丁派出所方面　佐藤榮作
荒町派出所方面　森善吉
河原町派出所方面　小野寺文治
連坊小路派出所方面　芳賀長人
長町派出所方面　佐々木盛治
同　佐藤喜作
原町派出所方面　吉田二郎
同　中村友助

○各町自警團

○仙臺市八幡町自警團

設立　大正十一年十一月五日
事務所　仙臺市八幡町四八番地
區域　八幡町、山上清水、江戸町、坊主町、半子町
團員數　四五〇名
團長　小梨文之助
副團長　佐藤善五郎
顧問　天江勘兵衛
同　守口牧三郎

○ヤハタ自警團

設立　大正十一年十月五日

事務所　仙臺市十二軒町二三番地
區域　十二軒町、土橋通、伊勢堂下、覺性院町、北石町
團員數　二五〇名
團長　菅野新八
副團長　門脇養吉
顧員　庄司宏
同　小梨政之助

○仙臺市北三新坂通自警團

設立　大正十二年十一月
事務所　北三番町新坂通一六七番地
區域　新坂通、北二番町、北三番町、北四番町、北五番町ノ一部
團員數　一七九名
團長　佐藤多利治
副團長　兵藤喜吉
顧問　佐久間俊一
同　細谷眞治
同　本間亮一郎
同　櫻田富三郎
同　千葉健壽
同　吉田太理治

○澱町一心會自警團

設立　昭和九年一月廿五日
事務所　澱町五番地
區域　澱町
團員數　三二名
會長　高砂濟兵衛
副會長　大友勝太郎

○仙臺市木町通自警團

設立　大正十三年十月十日
事務所　仙臺市木町通一九二番地
區域　北三、北四、北五ノ一部

團員數　二五五名
團長　本田秀太郎
副團長　菅原清次郎
同　大坊喜七
會計　菅原清次郎
顧問　南寛壽

○仙臺市木通南部自警團

設立　大正十一年十一月十三日
事務所　仙臺市北一番町七五番地
區域　本町通北一、北二北三番町
團長　羽田國次
副團長　井村重春
同　菅原清助
會計　貝山秀種
顧問　小松八四郎
同　設樂勇雄

○仙臺市支倉町自警團

設立　大正十一年十二月一日
事務所　仙臺市支倉町九番地
區域　支倉町全町
團員數　五〇名
團長　石館幸太郎
副團長　千葉喜兵衛
顧問　氏家清吉
同　海藤靜夫

○二日町第一區自警團

設立　昭和六年六月十八日
事務所　仙臺市二日町四九番地
區域　二日町、北二番町以北三二番地、六七番地
團員數　一一一名
團長　庄司千賀治
副團長　加藤嘉藏
會計　安藤吉之助

同　岡濱彈吉

○二日町中央自警團

設立　昭和六年六月　日
事務所　仙臺市二日町二五番地
區域　二日町自一五番地至八〇番地
團員數　九五名
團長　神尾久吾
副團長　花谷傳之助
同　早坂勇
會計　加藤善次郎
顧問　及川傳三郎
同　玉村軍次郎
同　門間稻四郎

○二日町南部自警團

設立　昭和六年　月　日
事務所　仙臺二日町九六番地
區域　自二日町一番地至廿一角
團員數　一一四名
團長　吉岡吉壽
副團長　菊地長次郎
顧問　佐藤光郎

○仙臺市北鍛冶町自警團

設立　大正十一年十月九日
事務所　仙臺市北鍛冶町九九番地
區域　北鍛冶町全町
團員數　二五三名
團長　佐藤萬兵衛
副團長　相澤直助
顧問　今野喜六
同　吉岡仁右衛門
同　伊澤平太郎

○堤通自警團

設　立　大正十一年十一月三日
事務所　堤通二九番地
區　域　堤通北六番町以南北一番町迄
團員數　二八〇名
團　長　岡崎二郎
顧　問　中村梅三
同　山内誠

○堤町自警團

設　立　大正十一年五月十四日
事務所
區　域　堤町全町
團員數　八五名
團　長　菊田誠力
顧　問　大野養之進
同　栗林直松
同　宍戸惣太郎
同　鹿野忠治

○通丁親交會自警團

設　立　大正十二年五月二十二日
事務所　通町二二番地
區　域　通町全町
團員數　四七〇名
會　長　棟方爲五郎
副會長　春田勘七
顧　問　國安泰嶺
同　中西利德
同　吉本玉喜
會　計　鈴木義次

○本町通北部自警團

設　立　大正十二年八月二十六日
事務所　木町通一五九番地
區　域　木町通北七、北八、支倉通、北六
團員數　二〇〇名

團　長　日下要一
副團長　加藤善藏
同　若生丑之助
顧　問　鄉家春治
會　計　齋藤清治

○神子町會自警團

設　立　昭和五年四月十五日
事務所　神子町二六番地
區　域　神子町全町、通町木町間、北九、北十全町
團員數　五〇名
會　長　庄子勇次郎
副會長　石田佐市
會　計　庄子藤八郎

○北山町自警團

設　立　大正十一年五月　日
事務所　北山町五九番地
區　域　北山町全町
團員數　二二〇名
團　長　横田大之進
副團長　千葉茂平
會　計　高橋友左衛門

青葉莊自警團

設　立　昭和二年十二月　日
事務所　青葉莊九三番地
區　域　青葉莊全町
團員數　八五名
團　長　高城畊造
副團長　澁谷藤次郎
會　計　松本又八

○宮町自警團

設　立　大正十一年八月十六日

事務所　宮町一〇五番地
區　域　宮町全町
團員數　四三三名
團　長　津田久作
副團長　中島庄右衛門
同　鈴木憲治

○全常盤丁自警團

設　立　大正十一年六月廿五日
事務所　小田原北一番町通三三ノ三
區　域　自小田原北一二三番丁通各一部至小田原町福澤前丁ノ一部
團員數　一三〇名
團　長　安積輔
副團長　菅原直身
同　亀谷圓治
顧　問　安積和助
同　伊藤又八

○東裏丁自警團

設　立　大正十一年八月廿八日
事務所　小田原東裏町二〇番地
區　域　小田原東裏町全町、長町通、車通ノ一部
團員數　二〇四名
團　長　樋口友吉
副團長　千葉文成
顧　問　加藤清亮
同　我妻幸助
同　石垣貫治
同　樋口喜一郎

○東六番丁北部自警團

設　立　昭和八年八月二日
事務所　新名掛町二番地
區　域　東六、新名掛町ノ一部

團員數　一三〇名
團　長　安原行也
副團長　阿部助治
同　安海新治
會　計　庄司喜藏

○福澤前自警團

設　立　昭和九年三月廿一日
事務所　小田原寶藏院三番地
區　域　小田原寶藏院一部、福澤、十文字ノ一部
團員數　三〇名
團　長　山本儀藏
副團長　庄司信三
顧　問　名川德治

○原町小田原第一區自警團

設　立　大正十二年　月　日
事務所　小田原長命坂一四〇番地
區　域　向小田原西部
團員數　九六名
團　長　甲谷佐和
副團長　菅原久八
同　奥津與五郎

○國分町中央自警團

設　立　大正十年一月七日
事務所　國分町五〇番地
區　域　國分町自五〇至八〇、自一二二至一五一
團員數　三〇〇名
團　長　針生久助
副團長　菅原甚左衛門
顧　問　大泉梅次郎
同　安田恒藏

○中央自警團

設　立　大正十一年九月十五日
事務所　立町通五番地
區　域　立町通全町、五丁目新町全町
團員數　八三名
團　長　前田留吉
副團長　岩淵喜平治
同　鈴木嬰吉
同　前川眞三郎
同　栗原永之助

○元鍛冶町自警團

設　立　大正十一年七月　日
事務所　元鍛冶町二七番地
區　域　元鍛冶町全町
團員數　七〇名
團　長　木村清
副團長　中村益次郎
顧　問　久世正人

○巴自警團

設　立　大正十一年七月廿四日
事務所　定禪寺通櫓町三五番地
區　域　定禪寺櫓町、木町末無全町
團員數　三〇〇名
團　長　佐藤勘助
副團長　淺野多利治

○虎屋横町自警團

設　立　大正十二年六月廿五日
事務所　國分町四九番地
區　域　自國分町四四　至同四九
團員數　四六名
團　長　板垣金造
副團長　村上安之助

○國一自警團

設　立　大正十一年十月五日
事務所　國分町九〇番地
區　域　自國分町八二至同一二一
團員數　九五名
團　長　小西久四郎
副團長　相澤幸七
顧　問　宮澤源助
同　竹內正二

○北材木町自警團

設　立　大正十一年十月九日
事務所　北材木町五五番地
區　域　北材木町、跡付町全町
團員數　二五〇名
團　長　菊地新作
副團長　富岡虎治
副團長　阿部福三郎
顧　問　遊佐廣太

○東一北振自警團

設　立　昭和五年一月二十日
事務所　仙臺市東一番町三五番地
區　域　東一、森德横丁以北
團員數　一〇〇名
團　長　宮崎武治
副團長　木村實

○東一中央自警團

設　立　昭和五年一月日
事務所　東一番町二九番地
團員數　八〇名
團　長　小松原政治
副團長　小港清吉

○東一自警團

設　立　大正十一年七月一日
事務所　東一番町七六番地
團員數　一八五名
團　長　深堀豊治
副團長　柴田量平

○仙臺市本柳町自警團

設　立　大正十一年十一月十九日
事務所　本柳町一五番地
團員數　一八二名
團　長　菅井良助
副團長　今野悟助

○立町自警團

設　立　大正十一年十月十二日
事務所　立町一丁目七〇番地
區　域　立町一丁目、同二丁目、同三丁目
團員數　三〇〇名
團　長　工藤延次郎
副團長　亀田兵治

○仙臺市本材木町自警團

設　立　大正十一年八月八日
事務所　本材木町一〇番地
區　域　本材木町一番地同町一〇四番地迄
團員數　二〇〇名
團　長　今泉三藏
副團長　板垣玉吉
顧　問　佐藤清治
同　岩片傳六
同　伊藤惠奈太郎
同　安藤重仁郎

○川内自警團

設　立　大正十一年八月廿五日
事務所　川内大工町六二番地
區　域　川内大工町川内中瀬川内明神横町
同川前町、同元支倉通
團員數　一九〇名
團　長　小室義介
副團長　星幸平
同　鹽谷清五郎
顧　問　脇坂安二
同　石川榮五郎
同　加藤藤三郎

○仲ノ町自警團

設　立　大正十一年八月一日
事務所　仙臺市仲ノ町三三番地
區　域　仲ノ町全町
團員數　一八三名
團　長　武田清十郎
副團長　高橋友助
顧　問　大澤留平

○琵琶首花檀自警團

設　立　大正十一年十二月　日
事務所　琵琶首新町五番地
團員數　三〇〇名
團　長　木村貞男
副團長　玉川嘉三
同　芳賀喜代松

○大町聯合自警團

設　立　大正十一年一月　日
事務所　大町三丁目六三番地
區　域　大町一丁目、同町四丁目
團員數　三一五名
團　長　横山勤助
副團長　明石惣左衞門
同　竹丸鶴吉

同　八木久兵衛

○肴町自警團

設立　大正十一年六月　日
事務所　肴町三一番地
區域　肴町全町
團員數　三六〇名
團長　岩崎政治
副團長　武田文藏

○國四五丁自警團

設立　大正十一年八月廿九日
事務所　國分町一六三番地
區域　國分町四五丁目全町
團員數　一四五名
團長　伊勢齋助
副團長　山田熊治郎

○本橋町自警團

設立　大正十一年二月三日
事務所　本橋町一五番地
區域　全町
團員數　一八六名
團長　大橋憲一
副團長　石川佐吉
同　井納高三郎

○南町會自警團

設立　昭和九年一月二十日
事務所　南町六九番地
區域　南町全町
團員數　八〇名
團長　若生巳之吉
副團長　高田新兵衛
同　平磯正三

○本荒町自警團

設立　昭和二年二月二十日

事務所　本荒町二七番地
區域　本荒町全町
團員數　一一八名
團長　松井貞五郎
副團長　森松兵衛
同　丹野英男

○名掛町東部自警團

設立　大正十一年六月四日
事務所　名掛町一一一番地
區域　名掛町鐵道踏切東全町
團員數　二〇四名
團長　柴原權平
副團長　熊谷林藏
同　加藤榮之助
顧問　花岡十兵衛
同　伊藤幾三郎
同　佐々木運藏
同　山本德太郎

○二十人町榴ヶ岡自警團

設立　大正十一年五月廿二日
事務所　二十人町一八三番地
區域　二十人町東七、榴ヶ岡角以東
團員數　三〇〇名
團長　渡邊長壽
副團長　相澤新永郎
同　阿部豊之助
同　横山大三郎

○鐵砲町自警團

設立　大正十五年三月　日
事務所　鐵砲町一六六番地
區域　鐵砲町全町
團員數　五三六名
團長　梅津喜一
副團長　郡山繁治

同　荒若權七郎
同　石田伊勢治

東十番丁自警團

設　立　昭和五年一月十一日
事務所　東十番町三二番地
區　域　東十番町全町
團員數　二〇一名
團　長　行方市郎
副團長　森八郎

○東八番丁北部自警團

設　立　昭和七年十一月　日
事務所　東八番町八五番地
團員數　一二〇名
團　長　磯部雄三
副團長　渡邊俊之助
同　江戸權左衛門

○X道路自警團

設　立
團員數　九〇名
團　長　森川盛義
副團長　正田峯五郎
同　山崎源一郎

○東六番丁南部自警團

設　立　昭和八年七月七日
事務所　東六番町三〇番地
區　域　花京院以南電鐵地下以北
團　長　武藤龍俊
副團長　加藤善吉
同　金田君次郎
顧　問　礎貝辰五郎
同　郡山廣
同　遠藤長一郎
同　菅野德助

會　計　遠藤喜傳
同　渡邊俊次郎
顧　問　鴻巣善司郎
同　尾形勇作
同　加藤大治郎

○名掛丁西部自警團

設　立　大正十四年八月二十日
事務所　名掛町八八番地
區　域　名掛町鐵道踏切西全町
團員數　一七四名
團　長　渡邊藤吉
副團長　高橋松重郎
同　森豊次郎

○東七番丁北部自警團

設　立　大正十四年十一月廿五日
事務所　東七番町一二七番地
區　域　東七番町南北鐵道踏切
團員數　三六三名
團　長　馬場金次郎
副團長　高橋藤藏

○東八番丁自警團

設　立　大正十二年九月二十日
事務所　東八番町四〇番地
區　域　東八番地運坊小照鐵道踏切線路北
團員數　二三〇名
團　長　森谷松兵衛
副團長　宍戸英治
同　渡遺精次郎
顧　問　相澤政足

○仙臺驛前自警團

設　立　昭和九年二月二十日
事務所　準町通一七番地

區　域　名掛町全町、東五番町、南町通、柳町通リノ一部、裏五番町

團員數　二二五名

團　長　菊地重太郎

副團長　針生義金

同　鈴木政吉

同　菊地久米太郎

會　計　青木助三郎

顧　問　大泉林之亟

同　河合毅一

同　福中儀勝

同　佐藤文之亟

顧　問　山木政

同　中野忠治

同　目黒賢覺

○東九番丁自警團

設　立　大正十五年十一月廿四日

事務所　東八番町一五四番地

區　域

團員數　二五〇名

團　長　五十嵐富藏

副團長　濱岡文治

○元寺小路第四部自警團

設　立　大正十一年七月十日

事務所　元寺小路一八六番地

區　域　元寺小路自北側自一八〇至一九九、自南側ノ三九至五九

團員數　七〇名

團　長　菊田平藏

副團長　小川三彌

顧　問　渡邊庄次郎

同　高山松之助

同　小野寺爲治

○元寺小路昭榮自警團

設　立　大正十一年七月

事務所　元寺小路一七五番地

區　域　元寺小路北側自一六一至一七九、南側自六〇至七五

團員數　一三六名

團　長　長崎宮太

副團長　大塚小二郎

會　計　福原喜吉

○元寺小路第五部自警團

設　立　大正十二年一十月一日

事務所　元寺小路八七番地

區　域　元小路鐵道踏切東部、東六番町一部

團員數　一七〇名

團　長　畑山甚吉

副團長　柴山恭壽

同　佐藤章

顧　問　長崎德三郎

同　澤田謙助

同　佐藤文之亟

顧　問　山木政

同　中野忠治

同　目黒賢覺

○大佛前自警團

設　立　大正十一年九月五日

事務所　大佛前四番地

區　域　大佛前全町、外記町ノ一部

副團長　越後盛治

會　計　萱場一

○東三番丁自警團

設　立　大正十一年八月十日

事務所　東三番町九八番地

區　域　東三番町、新傳馬町以北全町

團員數　二二二名

團　長　大野金三郎

副團長　芹澤與三郎

同　伊藤長八

同　阿部竹藏

同　菅原惣吉

會計　伊藤東之助

○元寺小路第一部自警團

設立　昭和六年三月十六日
事務所　元寺小路一〇六番地
區域　元寺小路南側東三四間、北側東三中京院迄
團員數　一〇五名
團長　吉田孫八郎
副團長　今井繁藏
顧問　高橋登理治
同　松好亮研
會計　助川清治

○元寺小路第二部自警團

設立　大正十一年七月一日
事務所　元寺小路七六番地
區域　元寺小路自七六至八八、自一三四至一四七
團員數　八三名
團長　篠崎宏
副團長　神野孝重
顧問　岩本正樹
同　佐藤長成
同　片倉猛次郎
會計　遠藤賢治

○南光院丁自警團

設立　大正十年　月　日
事務所　南光院町六番地
區域　南光院町全町
團員數　七五名
團長　横山有悟
副團長　羽賀米三郎
會計　鹿又九萬兒

○大町五丁目自警團

設立　大正十一年九月　日

事務所　大町五丁目二番地
區域　大町五丁目全町
團員數　五三名
團長　佐々木重兵衛
副團長　鈴木英三郎
會計　今野龜治郎
同　保原千代吉

○東一親和自警團

設立　昭和三年三月廿八日
事務所　東一番町八二番地
區域　東一大町以南南町通角迄
團員數　九八名
團長　一力次郎
副團長　西内長治
同　阿部來太郎
會計　熊坂善次郎
同　鈴木善治郎

○花京院通自警團

設立　大正十四年七月七日
事務所　花京院通五七番地
區域　花京院通全町、茂市ヶ坂、末無掃部町、掃部町ノ一部
團員數　三三七名
團長　北村嘉吉
副團長　眞山佳吉
同　堀善貞吉
顧問　大石倫治
同　板橋八五郎

○東一北部自警團

設立　昭和五年一月廿六日
事務所　定禪寺通四番地
區域　定禪寺通、東一番町、勾當臺通
團員數　五〇名

團長　澤壽晴
副團長　佐藤卯三郎

○大日横丁自警團

設立　大正十二年六月十六日
事務所　柳町通一八番地
區域　教樂院町全町、柳町通自一八至二一
團員數　七五名
團長　青木博愛
副團長　村上忠兵衛
顧問　山本晃
會計　江刺槍治郎

○南町通西部青年自警團

設立　昭和五年一月　日
事務所　南町通一五番地
區域　南町通自三至一三
團員數　六九名
會長　佐藤達夫
副會長　阿部榮吉
同　遠藤貞固
會計係　伊藤菊磨呂

○多門通東部自警團

設立　昭和九年二月十四日
事務所　東三番町一五九番地
區域　東二番町角ヨリ東五番町角マデ
團員數　一〇七名
團長　齋藤一郎
副團長　坂井宏光
同　大塚大八
會計　村上新六
顧問　三浦善作
同　横山常吉
同　塚本治三郎
同　早出國衛
同　佐藤俉助

同　長島晴造

○東二番丁二交自警團

設立　昭和九年四月廿三日
事務所　東二番町六五番地
區域　東二番町多門通以北、新傳馬町以南
團員數　五〇名
團長　岡部鱗二郎
副團長　淺野文雄
會計係　渡邊七郎
顧問　佐々木榮介
同　古關泉
同　河合宇三郎
副團長　及川儀藏
同　菅原瀧之助
顧問　馬淵儀助
同　江刺運次郎
同　高木清兵衛
同　井上彦三郎
同　若生榮吉
同　木村龜藏
同　加藤喜三郎

○新傳馬丁自警團

設立　昭和九年四月十九日
團員數　一〇〇名
團長　齋藤久三郎
會計　高橋雄作

○東四番丁自警團

設立　昭和八年六月二十日
事務所　東四番町四一番地
團員數　一三〇名
團長　芳賀亮三
副團長　隱田勇
同　三浦貞輔

○上染師町自警團

設　立　大正十一年九月　日
事務所　上染師町二三番地
區　域　上染師町全町
團員數　一六三名
團　長　高橋清助
副團長　岩沼德治
顧　問　菅野常治
同　飯沼勇松
同　板橋儀四郎
會　計　飯沼勇吉

○柳町自警團

設　立　大正十一年十月十日
事務所　柳町二一番地
區　域　柳町全町
團員數　二一〇名
團　長　齋藤才次郎
副團長　日下哲雄
同　吉野金作
會　計　水野勝藏
顧　問　青野平治
同　守屋眞三郎
同　柳堅治郎

○道場小路自警團

設　立　大正十一年十月一日
事務所　道場小路一五番地
團員數　五〇名
團　長　佐藤榮作
副團長　木田勘吉
顧　問　石川源助
同　中村喜藏

○田町自警團

設　立　大正十一年六月一日
區　域　田町全町
團員數　二五〇名
團　長　高橋慶太郎
副團長　仁藤平治
同　伊勢善治
會　計　高橋軍藏
同　伊藤仁德郎
同　高橋幸次郎

○伊勢屋横丁自警團

設　立　大正十一年五月　日
區　域　伊勢屋横町全町
團員數　四八名
團　長　椎名與作
副團長　八木松兵衛
會　計　佐々木重男
顧　問　淺野眞夫

○北目町自警團

設　立　大正十一年八月一日
事務所　北目町五〇番地
團員數　二五〇名
團　長　梅田忠七
副團長　平間八郎
會　計　佐藤又行
顧　問　山口安藏
同　相崎安五郎
同　松谷菊太郎
同　御船八百重

○五ッ橋自警團

設　立　大正十二年六月廿六日
事務所　東二番町二〇番地
區　域　京二、三番町、新道以南、五ッ橋通清水小路角迄

團員數　一七四名
團　長　中川　徹
副團長　津場正吉
會　計　小野介治

○袋町自警團

設　立　大正十一年十月一日
事務所　袋町二〇番地
區　域　袋町全町
團員數　五九名
團　長　門屋直哉
副團長　小野熊治

○越路自警團

設　立　大正十一年八月廿九日
事務所　向山越路々地町
區　域　向山越路町全町
團員數　二八〇名
團　長　石崎行盛
副團長　遠藤律治
同　森　清
同　佐伯滿雄
同　早坂佐一郎

○米ヶ袋自警團

設　立　大正十一年九月　日
事務所　米ヶ袋町十二軒町一二番地
區　域　米ヶ袋全町、片平町袋町以南
團員數　五五〇名
團　長　佐藤榮作
副團長　佐藤　達
同　山田正治

○靈屋下自警團

設　立　大正十一年九月一日
事務所　靈屋下町三一番地
區　域　靈屋下全町、越路ノ一部

團員數　一八〇名
團　長　佐藤米治
副團長　加藤吉藏
顧　問　本間半兵衛
同　内藤英一
同　小野寺武夫

○土樋自警團

設　立　大正十一年十一月六日
事務所　土樋町一三〇番地
區　域　土樋町全町
團員數　五五五名
團　長　府田政之助
副團長　高橋清八
顧　問　佐藤德之助
同　大川泰二郎
同　福島與惣五郎

○荒町自警團

設　立　大正十一年七月　日
事務所　荒町五三番地
區　域　荒町全町
團員數　三〇〇名
團　長　森　善吉
副團長　鳴海孝三郎
顧　問　鈴木重兵衛
同　佐藤重兵衛
同　若林忠四郎

○石名坂自警團

設　立　大正十二年二月　日
事務所　石名坂町四九番地
區　域　石名坂全町
團員數　一四〇名
團　長　和田玄暢
副團長　佐藤新之助
會　計　櫻田齋
同　佐藤丑松

○穀町自警團

設　立　昭和七年四月　日
事務所　穀町九番地
區　域　穀町全町
團員數　九四名
團　長　江戸重兵衛
副團長　菊地喜藏

○東九畫丁親和自警團

設　立　昭和四年一月　日
事務所　東九番町五番地
區　域　東五番町親和全町
團員數　八〇名
團　長　大島榮吉
副團長　渡邊三治

○南鍛冶町自警團

設　立　大正十一年十月三日
事務所　南鍛冶町一九六番地
區　域　南鍛冶町全町
團員數　四〇〇名
團　長　中島幸次郎
副團長　鈴木孫四郎

○東七番丁南部自警團

設　立　昭和三年十二月一日
事務所　東七番町一五二番地
區　域　東七番町鐵道線路以南全町
團員數　一二〇名
團　長　木村伸太郎
副團長　古關庄五郎
顧　問　小林敬吉
同　石川惣吉
同　田中善之助
會　計　岡山外松

設　立　昭和四年二月　日
事務所　東八番町一八四番地
區　域　東八番町東南全町
團員數　一五五名
團　長　若生忠二郎
副團長　藤村均
自警部長　小野寺清次

○連坊小路西部自警團

設　立　昭和三年九月二十日
事務所　連坊小路一七二番地
區　域　連坊小路第二高女入口以西全丁東八番丁鐵道線路連坊小路間
團員數　二二〇名
團　長　今野平藏
副團長　鈴木謙吾
同　石賀儀右衛門

○三百人町自警團

設　立　大正十年九月　日
事務所　三百人町三九番地
區　域　三百人町全町
團員數　二二〇名
團　長　清野雄哉
副團長　菅原寅之助
會　計　門脇善之助
顧　問　高屋一雄
同　大友文四郎

○東南自警團

設　立　大正十二年四月一日
事務所　表柴田町八〇番地
區　域　表柴田町、裏柴田町、元茶畑各町全部
團員數　一四九名
團　長　小原德
副團長　大塚萬九郎

○國分會自警團

設　立　大正　年二月十二日

事務所　控木通一二番地
區　域　控木通、西新町、東新町、木ノ下各町
團員數　一五一名
團　長　芳賀長人
副團長　坂口彦四郎
同　目黒文吉

○新寺小路自警團

設　立　昭和七年　月　日
事務所　新寺小路五九番地
區　域　新寺小路一圓
團員數　三〇〇名
團　長　河野澄學
副團長　千葉金次郎
會　計　吉田顯敞
顧　問　白石玄淨

○連坊小路東部自警團

設　立　大正十一年十月十五日
事務所　連坊小路二九〇番地
區　域　連坊小路陸橋以東
團員數　五一五名
團　長　石田公平
副團長　熊谷武治

○河原町自警團

設　立　大正十一年二月八日
事務所　河原町七八番地
區　域　河原町、新弓ノ町全町
團員數　一二七名
團　長　豬苗代弼
副團長　後藤德三
同　津田善三郎
會　計　高橋與右衛門
相談役　遠藤仁助
顧　問　小西利兵衛
同　西村金六

同　猪苗代翁
同　武者廣志

○六十町自警團

設　立　大正十三年十一月　日
事務所　六十人町一六番地
區　域　六十人町全町
團員數　五六名
團　長　湯自儀四郎
副團長　五島榮三郎

○南染師町自警團

設　立　大正十三年一月廿六日
事務所　南染師町五五番地
區　域　南染師町、疊屋町、八軒小路全町
團員數　二〇五名
團　長　庄司惣七
副團長　高橋哲平
會　計　紺野久右衛門

○南材木町自警團

設　立　大正十一年十一月　日
事務所　南材木町二二番地
區　域　南材木町全町、南石切町、新弓ノ町ノ一部
團員數　一六〇名
團　長　小林八郎右衛門
副團長　山岸文之助
同　千葉長藏
顧　問　坂本衛吉
同　針生惣吉
會　計　針生又太郎

○杉ノ下自警團

設　立　昭和十一年十一月一日
事務所　河原町東裏町五番地
區　域　河原町、東裏町、河原町一部、新弓ノ町一部、新河原町、行人塚一部

團員數　一〇〇名
團　長　原谷喜六
副團長　增子運吉
同　森　勘左衞門
顧　問　千葉己三郎

○保春院前丁自警團

設　立　大正十一年十一月　日
事務所　保春院前町六番地
區　域　保春院前町全町
團員數　八〇名
團　長　鈴木小太郎
副團長　庄子幸吉
顧　問　松坂善之助

○新河原町自警團

設　立　大正十一年十月三日
事務所　新河原町二五番地
區　域　新河原町全町
團員數　二五〇名
團　長　小野寺文治
副團長　高橋庄左衞門

○古城町自警團

設　立　大正十一年十月六日
事務所　吾谷町三〇番地
區　域　新河原一部、吾谷一部、行人塚一部
團員數　一三四名
團　長　新河原町　吉田德五郎
副團長　佐藤伊三郎
會　計　菅野丁治

○南五十人町自警團

設　立　大正十一年九月　日
事務所　南五十人町二〇番地
團員數　一九〇名
副團長　西峰虎男
會　計　大森吉治

○船丁自警團

設　立　大正十五年四月三日
事務所　船町三番地
區　域　船町全町
團員數　八五名
團　長　森彦太郎
副團長　長井幸次郎

○小田原東部自警團

設　立　大正十三年十一月廿二日
事務所　午小屋町四番地
區　域　小田原町以東、長町通、清水沼通及午小屋町
團員數　一五〇名
團　長　三浦喜藏
副團長　菊田廣吉
顧　問　後藤橘五郎

○原町苦竹新田第四區自警團

設　立　大正十二年　月　日
事務所　苦竹新田九〇番地
區　域　苦竹新田、苦竹全部
團員數　一〇五名
團　長　高澤喜市
副團長　柴田官左衞門

○原町苦竹第一區自警團

設　立　大正十一年九月六日
事務所　原町苦竹南裏一六番地
區　域　苦竹
團員數　一八九名
團　長　平川爲助
副團長　星安吉
同　熊谷長七

○原町苦竹自警團

設　立　大正十二年月　日
事務所　原町苦竹北裏二十七番地
區　域　原町苦竹第二區
團員數　一五九名
團　長　吉田二郎
副團長　安附龜代松郎

○原町苦竹第三區自警團

設　立　大正十二年　月　日
事務所　原町苦竹字町一五八番地
區　域　苦竹三區全部
團員數　一七九名
團　長　佐藤丑藏
副團長　荒井榮七
顧　問　鳥山正三郎

○小田原中部自警團

設　立　昭和七年一月十日
事務所　原町小田原桝井
區　域
團員數　三〇名
團　長　木皿卯平治
副團長　鈴木龜鶴壽

○原町松原自警團

設　立　昭和三年二月　日
事務所　原町小田原松原九〇番地
區　域　小田原松原
團員數　七二名
團　長　尾山武
副團長　横田巳之助

○原町南目第二區自警團

設　立　大正十一正九月六日
事務所　原町字町一八番地
區　域　南目第一區內
團員數　七〇名
團　長　庄司正

副團長　齋藤常治
同　森柳三郎
會計　加藤逸郎
顧問　根本定米

○原町第二區自警團

設　立　大正十一年八月廿一日
事務所　原町字町七番地
區　域　原町第三區內
團員數　四〇〇名
團　長　中村友助
副團長　八島平五郎
同　外山孝一

○東仙臺自警團

設　立　昭和六年十一月　日
事務所　原町苦竹字案內前上三四番地
區　域　苦竹案內前上、松山下案養寺
團員數　四三名
團　長　前野善右衛門
副團長　佐藤萬治郎

○長町北部自警團

設　立　昭和二年十二月十六日
事務所　長町北町一一九番地
區　域　北町一番地ヨリ八本松二七ニ至ル
團員數　一八〇名
團　長　佐々木盛治
副團長　遠藤丑之助

○長町南區自警團

設　立　昭和二年十一月十七日
事務所　長町八七ノ一番地
區　域　自南町一至同八二
團員數　一五〇名
團　長　大宮佐吉
副團長　鈴木榮太郎
顧　問　齋藤善兵衛

同　島田卯太郎

○長町門前町自警團

設　立　昭和二年十一月十五日
事務所　門前町三一六番地
區　域　一番地ヨリ七五迄
團員數　一二〇名
團　長　八島林作
副團長　丹野忠次郎
同　佐藤太郎右衛門
顧　問　齋藤順三郎
同　島海亥太郎

○長町諏訪目自警團

設　立　大正十一年七月廿四日
事務所　長町郡山字町一一番地
區　域　諏訪一圓
團員數　八五名
團　長　佐藤喜作
副團長　芳賀新四郎

○郡山北目欠ノ上自警團

設　立　大正十一年七月三日
事務所　郡山一二一番地
區　域　北目町欠上一圓
團員數　一二〇名
團　長　安齋六兵衛
副團長　安齋春吉

○伊勢煉瓦場工場自警團

設　立　大正十一年七月廿七日
事務所　長町西臺畑一番地
區　域　工場一圓
團員數　二〇名
團　長　伊勢庄兵衛
副團長　鈴木勘彌

○長町郡山中區自警團

設　立　昭和六年十一月五日
事務所　郡山矢口宅地八番地
區　域　矢口、矢來、籠ノ瀬區一圓
團員數　八四名
團　長　小林廣助
副團長　齋藤善助
顧　問　高橋敬義

○砂押自警團

設　立　昭和六年十二月六日
事務所　長町砂押屋敷二番地
區　域　砂押一圓
團員數　三一名
團　長　大友十五郎
副團長　佐藤順治

○西多賀自警團

設　立　昭和八年三月一日
事務所　元西多賀村役場
區　域　元西多賀村全部
團員數　二四名
團　長　大宮三七
副團長　阿部熊吉
會　計　庄子一郎

○石垣町自警團

設　立　大正十一年十一月六日
事務所　石垣町一二番地
團員數　七七名
團　長　芦立菊治
副團長　菅野晋太郎
顧　問　沼倉勝彦

○堤通北部自警團

設　立　昭和九年十二月　日
事務所　北八番町二〇番地

區　域　通町一部、北六、七、八ノ一部
團員數　七三名
團　長　大槻映三郎
副團長　吉田文藏
顧　問　西　良太郎
同　渡邊瀧雄
同　盛山元吉

○小田原西部自警團
設　立　昭和九年十二月一日
事務所
團　長　名生常之允
副團長　藤崎善作
會　計　勝又晟

第二項　仙臺消防組後援會

仙臺消防組後援會は市内各町自警團及其他の團體并有志を以て主體とし、市民と消防組員の連絡を保持し組員の人格向上を圖ると共に其の慰勞同公務死傷其の他の弔慰、警火思想の普及宣傳等を目的として昭和六年十一月組織せらる、其の規定左の如し。

仙臺消防組後援會々則

第一章　總　則

第一條　本會ハ仙臺市各町自警團及其ノ他ノ團體並有志ヲ以テ組織シ仙臺消防組後援會ト稱ス

第二條　本會ハ仙臺消防組ノ後援ヲ爲スト共ニ警火思想普及發達ト會員相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ事務所ヲ仙臺警察署内ニ置ク

第二章　役　員

第四條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會　長　一名　副會長　二名
幹事長　一名　幹事　若干名
書　記　二名以内

第五條　會長副會長ハ總會ニ於テ會員之ヲ推薦シ幹事ハ各町自警團長中ヨリ會長之ヲ推擧シ幹事長ハ幹事ノ互選ニヨリ會長之ヲ定ム書記ハ會長囑任ス

第六條　會長ハ本會ヲ代表シ會務一切ヲ統裁ス副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アル時ハ其代理ヲ爲ス
幹事長ハ幹事ヲ代表シ且幹事ト共ニ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務會計其ノ他諸般ノ事務ヲ處理ス
書記ハ會長ノ指揮ヲ承ケ幹事ニ屬スル委任事務ヲ執掌ス

第七條　本會ニ顧問ヲ置キ會長之ヲ囑託ス
顧問ハ重要ノ事案ニ關シ會長ノ諮問ニ應シ且總會及幹事會ニ出席シ意見ヲ陳フルコトヲ得

第八條　本會役員ノ任期ハ二ケ年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第三章　事　業

第九條　本會ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ
一、仙臺消防組員ノ慰勞ニ關スル件
二、仙臺消防組員公務傷死其他ノ弔慰
三、警火思想ノ普及宣傳

四、會長又ハ總會ニ於テ必要ト認メタル事項

第十條　本會事業ニ關シ功勞偉績アリ一般ノ模範ト認ムル者アル時ハ其ノ事狀ニ依リ之レヲ表彰スルコトアルヘシ

第四章　會　議

第十一條　本會々議ハ總會及幹事會ノ二種トス

總會ハ毎年一回三月之レヲ開催ス　但シ必要アル時臨時總會ヲ開クコトヲ得　幹事會ハ隨事必要ニ應シ之レヲ招集ス

第十二條　總會ハ會長之ヲ招集シ且會議ノ議長トナル

議事ハ出席人員ノ過半數ヲ以テ決ス　若シ可否同數ナル場合ハ議長之ヲ決ス

第十三條　總會ハ豫算決算ノ審議認定其他提出議案ノ外議スルコトヲ得ス

第十四條　幹事會ニ於テ審議スヘキ事項左ノ如シ　但シ會長副會長ハ幹事ト同一ノ權ヲ有ス

一、總會ニ提出スル議案

二、豫算ノ流用ニ關スル事項

三、事業ノ實行方法

四、總會ニ於テ委託シタル事項

五、右ノ外會長必要ト認ムル事項及急施ヲ要スル案件

第五章　經　費

第十五條　本會ノ經費ハ會費及寄附金ヲ以テ之ヲ支辨ス

會費ハ別ニ定ムル方法ニ依リ會員之ヲ負擔ス

第十六條　寄附金ハ可成之ヲ積立本會基金ノ造成ニ充ツルモノトス

第十七條　豫算ヲ超過シ又ハ豫算外ノ支出ヲ要スル場合ハ會長ニ於テ幹事會ノ決議ニ依リ適宜ノ處置ヲ爲スコトヲ得

第十八條　本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ三月末日ヲ以テ其ノ終日トス

附　則

第十九條　本則ハ總會ノ決議ニ依ルノ外變更スルコトヲ得ス

初代後援會長は素封家貴族院議員伊澤平左衛門氏にして、昭和九年逝去の爲め副會長北村加吉氏其の後任に推され仙臺消防組改善の爲め大に努力奮勵せられあり會長以下役員氏名左の如し。

會　長　北村加吉

副會長　一力次郎

顧問　仙臺市長　澁谷德三郎

幹　事

八幡町自警團長　小梨文之助

本町通北部自警團長　日下要一

北鍛治町自警團長　佐藤萬兵衛

琵琶首花壇自警團長　木村貞男

東三番丁自警團長　大野金三郎

東一北振自警團長　宮崎武治

本檜丁自警團長　大橋憲一
米ケ袋自警團長　佐藤榮作
新河原町自警團長　小野寺文治
郡山諏訪自警團長　佐藤喜作
原町苦竹自警團長　吉田二郎
元寺小路第一部自警團長　吉田孫八郎
仲ノ町自警團長　武田清十郎
宮町自警團長　津田久作
東八北部自警團長　磯部雄三
荒町自警團長　森善吉
控木通自警團長　芳賀長人
長町北部自警團長　佐々木森次
原町南目自警團長　中村友助
大日横丁自警團長　青木博愛
虎屋横丁自警團長　板垣新藏
名掛丁東部自警團長　柴原權平
X道路自警團長　森川盛義
柳町自警團長　齋藤才次郎

驛前自警團長　菊地重太郎

第三項　少年消防隊

小學校兒童（中等學校低學年の生徒を含む）に對し、其の餘暇を利用して校外生活を指導し進んで社會生活に關する訓練を行ひ以て學校教育の補足を圖り健全なる國民善良なる公民たるの素地を養ふ見地より、當局の勸奬により昭和八年八月十八日新坂通青年義勇隊の結成を見たり、其隊則左の如し。

仙臺市新坂通青年義勇隊隊則

組織及目的

第一條　本隊ハ仙臺市新坂通青年義勇隊ト稱シ北三新坂通町內ノ青年ヲ以テ組織ス

第二條　本隊ノ事務所ヲ練武會本部ニ置ク

第三條　本隊ハ義勇奉公ノ精神ニ基キ社會公益ノ爲メ災害其ノ他ノ事變ニ際シ自警團ト連絡ヲ執リ警察署又ハ消防組ノ指揮ヲ受ケ活動スルヲ以テ目的トス

第四條　本隊ニテ實施スル業務ハ左ノ如シ

一、國防防空ニ關スル施設ヘノ努力
一、災害豫防思想ノ普及
一、武道ノ奬勵幷ニ士氣ノ振作
一、災害發生ノ際警戒線其ノ他ノ應援

一、罹災ノ救護及家財具ノ搬出看守
一、通信傳令ノ援助
一、出征軍人ノ家族戰病死者遺族ノ慰問援助
一、其ノ他必要ナル事項

第五條　本隊員ノ出動地域ハ當分第二師團長官邸ヲ中心ニ北三新坂通以内トス
但シ特命アリタル場合ハ此ノ限リニ非ラス

機　關

第六條　本隊ニ左ノ役員ヲ置ク役員ハ名譽職トス
一、隊　長　一
一、副隊長　一
一、理　事（會計庶務）三
一、班　長　三
一、副班長　三
隊長ハ顧問協議ノ上推擧ス　副長ハ隊長之ヲ囑託シ理事、班長、副班長ハ隊長之ヲ任命ス

第七條　隊長ハ隊務ヲ總理シ本隊ヲ代表シ副長ハ隊長ヲ補佐シ隊長事故アル時ハ之ヲ代理ス　理事ハ隊長ノ命ヲ受ケ會計庶務ニ從事ス　班長、副班長ハ隊長ノ命ヲ受ケ班内ノ統轄ニ任ス

第八條　本隊役員ノ任期ハ滿二ケ年トス

第九條　本隊ニ顧問又ハ相談役ヲ置ク隊長之ヲ委囑ス

第十條　本隊ヲ三班ニ分チ班ノ區域ハ役員會ニ於テ之ヲ定ム

第十一條　本隊ノ總會ハ春秋二期ニ開キ役員會ハ隊長必要ト認ムル場合ニ之ヲ開ク

經　費

第十二條　本隊ニ關スル經費ハ會費寄附補助金ヲ以テ之ニ充ツ

賞　罰

第十三條　本隊中善行其ノ他特ニ功勞アリタル者ニ對シテハ役員會ノ協議ヲ經テ之ヲ表彰ス

第十四條　本隊員タルノ名譽ヲ汚損スルカ如キ行爲アリタル者ハ役員會ノ協議ヲ經テ除名ス

第十五條　本隊員ハ別ニ定ムル隊員心得ヲ確守スヘキモノトス

隊　員　心　得

一、隊員ハ教育勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ敬神崇祖尊皇愛國ノ精神訓練ニ努ムルコト
一、隊員ハ常ニ克己質實剛健ノ氣風ヲ涵養シ品性ヲ陶冶シ規律ヲ重シ親睦ヲ圖ルコト
一、隊員ハ有事ノ場合先ツ事務所ニ集合シ所屬幹部ノ指揮命令ニ服從シ決シテ輕擧妄動ヲナササルコト

新坂通青年義勇隊役員

顧　問　仙臺警察署長　黑田正
奥海兵作
佐藤多利治
兵藤嘉吉

相談役　齋田久二郎
隊長　山田信吉
副隊長　門間正順
理事　菊地愛時
　　菊地兵吉
　　及川喪吉
班長　畑根倉造
　　門間幸雄
　　大友直治
副班長　古山一男
　　前田眞一郎
　　今野庄太郎
　　佐山劍吉
　　兵藤正治

第七節　火災豫防施設

火災警防に關しては絶えず當局より警告を發せられ又機會ある毎に之れが刺戟を與ふるも未だ以て其の減少を見ず大正八年三月二日彼の南町大火の慘狀を見たるは遺憾とするところなり、故を以て當時の慘禍を永く牢記し以て一般

市民の警火思想を鼓吹する目的を以て、毎年この大火週期に市内樞要の地域に防火宣傳を爲して警告を與ふるを例となせるが更に財團法人宮城縣消防協會及宮城縣警察部は聯合して縣下一齊一大防火運動を實施し、縣民に對し一層警火思想の普及を圖れり、今各項に就きて之れを述べん。

第一項　大火記念運動

大正八年三月二日南町大火の慘禍に鑑み市民をして永く之れを記憶せしめ以て防火思想を普及せしむべく、翌年の其の週日に消防組員は隊伍を整へて樞要の街路を巡行し防火宣傳を爲し一般に警告を與ふ爾後毎年之れを例として現今に至るも實行しつゝあり。

第二項　縣下一齊防火運動

財團法人宮城縣消防協會、宮城縣警察部は聯合して縣下一齊に一大防火運動を實施し、縣民に一層警火思想の普及徹底を圖らんと欲し、昭和六年三月管下警察署を通じ各消防組及自警團を指導して左の計畫を示したり。

第一回宮城縣防火運動計畫

一、日時　昭和六年三月十日（午前八時ヨリ）
二、範圍　宮城縣下一圓
三、主催　宮城縣及宮城縣消防協會
四、實施方法

1　新聞紙ニ依ル宣傳

縣下各新聞社及東京新聞支局ニ對シ記事ヲ掲載シテ一般縣民ニ周知方援助ヲ求ム

2　防火講演會及活動寫眞會ノ開催

（イ）事情ノ許ス限リ各署管内一ケ所以上ニ於テ警火思想普及ノ爲各署長其ノ他適當ノ講師ニ依リ防火講演會ヲ開催ス（常設興行場ノ幕合等ヲ利用スルモ可ナリ）費用ハ各支部ニ於テ支出ノコト

（ロ）前項講演會開催地以外ニ於テハ事情ノ許ス限リ婦人會女子青年團戸主會青年團等ノ會合方ヲ依頼シ警察署員、消防組頭其ノ他知名ノ士ヨリ講話ヲ爲スコト

（ハ）仙臺市ニ於テハ當日午後六時ヨリ公會堂ニ於テ宮城縣消防協會ヨリ派遣ノ講師ノ講話終テ活動寫眞ノ映寫ヲ爲ス・（映寫フキルムハ「君が代」「猛火と戰ふ」「チューイ君とヨウチユン君」等）

（ニ）講演會寫眞會周知方法

可成無料入場券ヲ消防組員、自警團員ヲシテ廣ク配布セシメ或ハ新聞紙折疊廣告ポスター立看板等ノ利用其ノ他適當ノ方法ニ依リ之カ周知ヲ期スルコト（費用ハ各支部又ハ組ニ於テ支出ノコト）

（ホ）講演資料

縣下火災統計表「火事の話」ヲ配布ス

3　屋外講演並實演

（イ）各署ニ於テハ別項記載ノ路上宣傳ノ際多衆集合ノ街頭、公園其ノ他適當ノ場所ヲ撰ビ屋外講演ヲ爲スコト

（ロ）各消防組ハ可成學校當局ト協議ノ上各小學校ニ於ケル避難演習終了直後放水演習ヲ爲シ兒童其他多衆ニ觀覽セシムルコト

4　ラヂオニ依ル宣傳

（イ）講演　宮城縣警察部長ノ放送

（ロ）演藝　防火ニ因ム演藝及仙臺消防組員ノ木遣音頭放送方交渉依頼スルコト（警察部ニ於テ）

（ハ）右放送時間決定ノ上ハ通知スルニ付各署ニ於テ周知方取計フコト

5　興行場ニ依ル宣傳

（イ）興行ノ類ニシテ防火運動ニ利用シ得ヘキ題材ノモノアラハ努メテ之カ上演方當業者ニ懇談實行セシムルコト

（ロ）防火フキルム映寫

鹽釜白石石巻古川氣仙沼ノ各署ニハ防火フキルム貸與ノ豫定ニ付適當ナル常設活動寫眞館ニ之ヲ映寫セシメ一般ニ觀覽セシムルコト　且其前後適當ナル時期ニ於テ警察官カ簡單ナル防火講演ヲ爲スコト

（ハ）防火講話

各常設興行場ノ幕合ヲ利用シ警察官又ハ消防組幹部ニテ短時間ノ防火講話ヲ爲スコト

（ニ）各警察署ハ興行場又ハ大商店ニ交渉シ「火の用心」若クハ「第一回宮城縣防火運動」ト大書シタル立看板ヲ建テ又ハ「火の用心」ト書シタル小旗ポスター、ビラ等ヲ場ノ内外ニ掲出セシムルコト

6　立看板ニ依ル宣傳

（イ）各警察署長、支部長ハ出來得ル限リ部内街頭要所ニ左ノ立看板ヲ掲出スルコト

2尺

火の用心

第一回

宮城縣防火運動

主催
宮城縣
宮城縣消防協會

9尺

（ロ）各警察署玄關ニハ「第一回宮城縣防火運動何々（警察署名）本部」ト立看板ヲ掲出スルコト

7　火ノ見櫓ニ依ル宣傳

各消防組ニ於テハ火ノ見櫓ニ「火の用心」又ハ「防火運動」等ノ文字ヲ表ハシタル旗又ハ吹流等ヲ適宜作製掲揚スルコト

8　ポスター掲示宣傳ビラノ配布

（イ）官公署學校工場同寄宿舍病院興行場湯屋理髮業者停車場電車汽船乘合自動車ノ發着待合所、銀行會社大商店等多衆ノ出入スル建物ノ内外適當ナル個所其ノ他適當ナル場所ニハ協會ヨリ送付スルポスターヲ掲出ヲ乞フコト

・（一町村平均拾枚宛各署ニ送付ス）

（ロ）火氣取扱所ノ檢査ノ際各世帶ニ警察部ヨリ送付ノ左記宣傳ビラ「火の用心」ヲ配布シ火焚場等ノ見易キ場所ニ貼付方ヲ乞フコト

（一町村平均五百枚宛配布ス）

3寸

火の用心

宮城縣

宮城縣消防協會

8寸

赤地ニ白字トス

（ハ）尙各署各支部各消防組其ノ他ニ於テ可成ポスター宣傳ビラ等ヲ作製シ利用セラレ度

9　電車及乘用自動車ニ依ル宣傳

車庫所在地所轄署長ヨリ電車及自動車運轉營業者ニ交渉シ車輛前面窓ガラス一隅ニ「防火デー」ト書シタル「マーク」ヲ貼付スルコト（右マーク」ハ警察部ヨリ送付ス）

10　路上宣傳

（イ）自轉車隊及自動車隊

各消防組中ヨリ二十名乃至三十名ノ火防宣傳自轉車隊ヲ組織シ「火の用心」ト朱書シタル白布ノ肩掛ヲ爲シ各組管内ヲ一巡スルコト（肩掛ハ各組又ハ各支部ニテ作製スルコト）

各署長ハ自動車協會支部又ハ自動車營業者ニ交渉シテ事情ノ許ス限リ防火宣傳自動車隊ヲ編成シテ適當ナル旗幟又ハ張幕ヲ用ヒ宣傳スルコト（自動車上ヨリビラヲ撒布スルコトハ禁ゼラレ度）

（ロ）消防自動車隊

A　消防自動車ニ「火の用心」ト朱書セル白布ヲ車輛ノ外側ニ繞ラシ樞要ノ路線ヲ巡行スルコト（火の用心ノ

白布ハ其ノ組又ハ支部ニ於テ作製スルコト）

B　右巡行ハ午前十時ヨリ開始スルコト

C　巡行消防車ノ速度ハ時速十三哩以下トシ交通事故防止上十分ナル注意ヲ爲スコト其ノ他ノ自動車隊ニ於テモ亦同樣トス、

D　巡行消防車ハ「サイレン」ヲ鳴動シ自動車隊ハ行進中可成行進喇叭ヲ吹鳴スルコト

E　宣傳隊行進ノ途次有効ナル場所ニ於テ停車ノ上簡單ナル防火講話ヲ爲スコト（此ノ停車ノ際ビラヲ撒布スルハ妨ナシ）

F　仙臺市消防車宣傳隊ハ當日午前十時迄縣廳警察部前ニ集合ノ上出發ノコト

（ハ）　ビラノ配布

消防組員、自警團員等ヨリ三名乃至五名ヲ一組トシ「火の用心」ト朱書セル肩掛ヲ爲シ人家稠密交通頻繁ノ場所數ケ所ヲ選ビ火防宣傳ノビラ其ノ他ヲ通行人ニ配布スルコト（肩掛ビラハ支部ニ於テ考案作製ノコト青少年團等ノ援助ヲ求メ得バ更ニ可ナリ

11　火氣取扱場所等ノ一齊視察調査

消防組員自警團員ヲシテ各世帶ニ於ケル炊事場風呂場、灰取場、煙突、電燈引込線其ノ他火災豫防上注意ヲ要スヘキ場所又ハ物件ニ付來意ヲ告ケ承諾ヲ求メタル上一齊視察調査ヲ行ヒ設備又ハ取扱上缺陷アル場合ハ懇篤說示セシムルコト

尙此ノ際防火宣傳ビラヲ配布スルコト（別項參照）縣保安課ハ「非常持出」ノ小票ヲ印刷シ廳內各課ニ配布シ重要書類箱ニ貼付セシムルコト

12　消防用機器及水利ノ一齊檢査保全

（イ）　各消防組ハ當日消防用機械器具ノ檢査手入ヲ一齊ニ施行スルコト

（ロ）　各消防組ハ貯水池消火栓等一齊視察調査ヲ遂ケ有効ニ保全シ置クコト

（縣廳構內ニ在ルモノニ對シテハ保安課ニ於テ實施スルコト）

13　警察取締營業者ノ一齊取締

各警察署ニ於テハ當日警察取締營業者ニ臨檢シ消火器非常口其ノ他消火及避難施設並火氣取扱狀況等ノ取締事項ニ關シ一齊ニ取締ヲ施行スルコト

14　特殊建物ノ消防施設避難施設等ノ一齊檢査

學校同寄宿舍常設興行場、病院、社寺、大工場同寄宿舍等特殊建物ニ付巡査部長以上ノ監督者ヲシテ防火施設避難施設ノ一齊檢査ヲ實施セシムルコト

15　學校工場ニ於ケル避難演習并防火訓話

A　小學校

イ　各小學校ニ於テハ當日學校長若クハ代理者ヨリ防火訓話ヲ爲シ事情ノ許ス限リ兒童ノ災害避難演習ヲ實施スルコト

ロ　右ハ別途學校長宛通牒シアルモ所轄警察署長ヨリ交渉シ警察署及消防組ニ於テ相當援助ヲ與ヘ演習當時ハ消防組幹部又ハ可成巡査部長以上ノ監督者ヲ派遣スルコト

ハ　講演材料并避難演習實施ニ關スル資料ハ各署ニ送付スヘキニ付直ニ之ヲ學校ニ配布スルコト（火事ノ話及縣火災統計）

ニ　尙學校ノ事情ノ許ス範圍ニ於テ「火の用心」等ト記シタル小旗ヲ作製セシメ兒童ニ旗行列ヲ爲サシムルコト（警察署、警部補派出所々在地ノ學校ニ止ムルモ可ナリ）ヲ希望ス

B　大工場、工場寄宿舍

イ　職工五十名以上使用工場及大ナル工場寄宿舍前ニ「防火デー」ト大書シタル立看板ヲ揭出シ工場主又ハ代理者ヨリ防火講話ヲ爲シ事情ノ許ス限リ從業員及寄宿者ノ避難演習ヲ實施スルコト

ロ　所轄警察署長ヨリ交渉シ演習當時ハ可成巡査部長以上ノ監督者ヲ派遣シ援助セシムルコト

ハ　演習資料ハ別途警察署ニ送付スルニ付警察署ニ於テ配布ノコト

ニ　工場、同寄宿舍等專屬ノ私設消防組アル工場ニ於テハ事情ノ許ス限リ特ニ消防演習ヲ爲スコト

ホ　作業場ニハ防火運動ニ關スル各種ノポスター、ビラ等ヲ貼付シ從業員ノ注意ヲ惹ク樣ノ趣向スルコト

ヘ　尙當日火氣使用場所消火施設避難設備ノ一齊調査ヲ行ヒ不完全ナル向ハ之ヲ整備スルコト

16　警鐘打信

各消防組ハ「防火運動デー」ナルコトヲ周知セシムル爲一齊ニ午前七時ニ三點連打ノ信號ヲ同樣打鐘スルコト

尙市町村寺院工場等ト交渉シ同時ニサイレン、梵鐘、汽笛ノ吹鳴ヲ爲サシムルコト

17　無火災祈願

午前八時ヨリ各消防組其組員ノ消防精神ノ振興ヲ計ルト共ニ無火災ヲ祈願スル爲其ノ所在地ノ神社ヘ參拜セシムルコト

18　懸賞募集

宮城縣消防協會ニ於テ各小學校兒童ヨリ防火ニ關スル「ポスター」圖案幷標語ヲ左記ノ通リ懸賞募集スルニ付周

知方取計フコト

19　其ノ他

其他各警察署、各支部各消防組ニ於テ適當ナル方法ヲ定メ施行スルコト

20　縣及協會ヨリ送付ノ印刷物類ハ本月中ニ送付ノ豫定

21　懸賞應募ニ關シ

イ　應募者ハ宮城縣下小學校生徒ニ限ル

ロ　圖案又ハ標語ハ防火ニ關スルモノニ限ル

ハ　締切期日　昭和六年三月二十日

ニ　應募者ハ宮城縣保安課宛送付ノコト（封筒表面ニ「懸賞應募」ト朱書スルコト）

ホ　審査ハ警察部長及各課長ニ於テ之ヲ決定ス

ヘ　賞品一等乃至十五等迄賞品ヲ呈シ其ノ他ノ選外佳作ニ對シテハ薄謝ヲ呈ス

以上普ク各種方面の網羅せざるなく實に曾て見ざる大規模の計畫なりき、仙臺警察署長はこれに基き消防組、自警團各小學校、各工場主、常設興業主、自動車協會仙臺支部、及仙臺市と協議を遂げ、左の計畫を樹て、協力一致之れが實行を爲せり。

第一回宮城縣防火運動仙臺警察署計畫

仙　臺　市

一、日時　昭和六年三月十日午前八時ヨリ

二、範圍　宮城縣下一圓
三、主催　宮城及宮城縣消防協會
四、實施方法
　1　防火講演會及活動寫眞會の開催
　當日午後六時より市公會堂に於て宮城縣消防協會より講師の講話終て活動寫眞で映寫を爲す（映寫フキルムは「君が代」「猛火と戰ふ」「チューイ君とヨウチユン君」等
　2　講演會、活動寫眞會周知方法公會堂に於ける宮城縣消防協會主催の活動寫眞幷に防火講話會は無料なるを以て部内住民に對し觀覽せしむる樣周知すること。
五、屋外講演幷實演別項記載の路上宣傳の際多數集合の街頭公園二ケ所以上に於て講演す。
六、ラヂオに依る宣傳
　（イ）講演宮城縣警察部長の放送（鈴木部長）
　（ロ）演藝防火に因む演藝及仙臺消防組員の木遣音頭放送
　（ハ）右放送時間決定の上は通知するに付き各受持部内に周知すること。

記

一、三月十日には午前八時直接交代とす。
二、當日各派出所員は當直番員一名を殘し非番員と共に午前九時より午後四時迄所屬派出所内自警團員消防組員と協力し部内各世帶の火氣取扱場所を檢査し結果取纏め別記樣式により報告すへし。
　此の場合設備又は取扱上缺陷ある場合は懇篤說示すること。

三、警察取締營業者の一齊取締
　各受持巡査は當日主として警察取締營業者（宿屋、下宿屋、貸座敷、料理屋、待合、湯屋等に臨檢し消火器非常口其他消火及避難施設幷に火氣取扱狀況等を調査し結果別記樣式により報告すへし。
四、當日消防組員をして其受持部内に於ける演防用水利調査消火栓檢査を行はしむるにより大正六年九月十五日訓令乙第一八五號火防用水利調査規程により指示すべし。
五、當日火の用心の宣傳ビラを送付するに付き各世帶に配布し炊事場の見易き場所に貼付せしむべし。
六、特殊建物の消防施設避難施設等の一齊檢査
　各監督巡査部長は其の受持巡査派出所各巡査を監督するは勿論自警團員消防組員を督勵して當日の宣傳幷に調査を遺憾なからしむる樣期せらるゝと共に受持派出所部内の學校同寄宿舍病院社寺等の防火施設避難施設を一齊檢査し結果書面報告のこと。
　市内既設の常設興行場の防火施設避難施設の一齊檢査は三塚巡査部長、日下巡査之れに當ること。
　市内に於ける大工場同寄宿舍等の防火施設避難施設に付ては片平巡査部長、菅原巡査部長に於て之れに當ること。

仙臺消防組當日の活動計畫

一、無火災祈願
　當日午前八時より仙臺消防組は組員の消防精神の振興を計ると共に無火災を祈願する爲め左記により神社へ參拜すること。
　仙臺消防組第一部組員は午前七時三十分まで仙臺警察署前に集合し組頭指揮の下に櫻ケ岡神社を參拜すること。

第二部組員は午前七時三十分迄原町巡査部長派出所前に集合、第二部長指揮の下に原町八幡神社に參拜すること。
第三部組員は午前七時三十分迄長町巡査部長派出所前に集合、第三部長指揮の下に長町諏訪神社に參拜すること。
此の場合喇叭手は喇叭を携帶すること。
參拜終了後各組員は別記により勤務すること。

二、警鐘打信

各部は「防火運動デー」なることを周知せしむるため一齊に既設警鐘を午前七時に三點連打の信號を同樣打信すること。

三、火氣取扱場所等の一齊視察調査

消防組員は所屬巡査派出所に午前八時迄集合巡査の指揮を受け自警團員と協力所屬派出所部内の世帶に對し火氣取扱場所の一齊視察調査に從事すべし。

四、消火栓井に水利調査

消防組員は當日午前八時三十分所屬巡査派出所に集合し其の派出所部内の消防用水利井に消火栓の檢査をなすべし此の場合派出所巡査の指揮を受くべし。

五、消防用機器の一齊手入保全

各係長は神社參拜後午前九時各消防組員を指揮監督し各係備付の消防用機械器具の檢査手入を一齊に施行し遺憾なき樣保全せられたし。

六、消防自動車隊

仙臺消防組常備班并に第二、三部の自動車喞筒には「火の用心」と朱書せる白布を車輛の外側に繞らし樞要の路線

を巡行すること。

2 右巡行は午前十時より開始す。

3 前記自動車喞筒隊は午前九時三十分迄仙臺警察署前に集合午前十時迄本縣警察部前に到着すること。

4 巡行消防車は「サイレン」を鳴動すること。

5 宣傳隊行進の途次公會堂前、停車場前、櫻ヶ岡公園に於て停車の上簡單なる防火講話をなす。

運動順路

一、縣廳前出發北一番町東進宮町に出で東六番町を經て長町通を左折して車通に出で南進鐵砲町を經て原町表通りより裏町を經て宮城野原に至る。

二、同上原を出發櫻ヶ岡公園を經て二十人町よりX道路に出で元寺小路を東三番町を經て定禪寺通より東二番町南進南町通りより東一番町へ入り北進し定禪寺通より國分町に出で左に折れ南進し本檜町を經て本材木町より立町を東進し國分町肴町を經て西公園に至り小憩。

三、西公園公會堂前を出發し大町一丁目より名掛町停車場前通、南町通りを經て東一番町に至り左に折れ柳町より北目町田町荒町を經て派出所前より石垣町堰場を經て新河原町より長町に至る正午の豫定(長町停車場前に於て休憩)

四、長町驛前出發國道筋を南鍛冶町を經て第一中學校前を經て連坊小路を經て東七番町より姉齋横町を下り土樋を西進して片平町に至り電車通りに出て左折して北三番町に出て左折して八幡町を經て瀧前町より角五郎町を經て中島町より土橋通を經て北四番町大學病院前を通り木町通りを北進北山町に至り右に折れて青葉神社下を經て通町北鍛冶町より電車通を踏切り二日町北三番町に出で左に折れて電車通を經て警察署に歸る。

七、組員配置表

出勤月日時三月十日　自午前九時　至午後四時

勤務別	勤務場所	出場人員省略
第二號	荒町	同
第一號瓦斯倫	河原町	同
第二號同	宮町	同
第九號腕用	停車場前	同
自動車附	東一番郡	同
同	新傳馬町	同
第一號腕用	東三番町	同
第二號同	名掛町	同
火防組	小田原	同
第三號同	八幡町	同
第四號同	連坊小路	同
第五號同	木町通	同
第六號同	芭蕉辻	同
火防組	片平町	同
第八號腕用	本柳町	同
第十號同	北鍛冶町	同
第十一號同	南小泉	同
第二部同	苦竹駐在所	同
同	南目	同
第三部	郡山	同
同	南部	同
同	北部	同

備考

(1) 前記配置員數ハ火氣取扱檢査ト水利調査消火栓檢査ニ充當シタルヲ以テ幹部ニ於チ適當配置スルコト。

(2) 各係長ハ前記配置員ノ外腕用喞筒四名機械喞筒五名ヲ出動セシメ機器ノ手入保全ヲナサシム。

(3) 組頭、部長、係長ハ自動車喞筒ニ乘車巡廻宣傳ニ從事スルコト。

様式

火氣取扱所臨檢結果表

派出所

町名	臨檢戸數	炊事場		煙突		風呂場		灰取場		電燈引込線		計	
		完	否	完	否	完	否	完	否	完	否	完	否

警察取締營業者臨檢結果表

住所	營業別	氏名	消火器設備ノ有無	非常口完否	消火及避難施設ノ完否	火氣取扱場所ノ完否	備考

備考欄ニ否例ヘハ消化器ノ設備ナキヲ以テ其ノ設備ヲ命ズト云フガ如ク記載スルヲ要ス。

この外東京朝日新聞社は深く本運動に贊同し當日旅客機一機を以て縣下一周參加飛行し、空中より防火宣傳ビラの撒布其の他援助を與へたり。

爾後これを例とし第二回は昭和七年十一月五日財團法人大日本消防協會主唱に依る樺太、北海道東北六縣に亘る一大防火運動と兼ねて實施し、第三回は同八年十一月十八日前例に準じてこれを實施し以て大に火防思想の鼓吹を圖れり。

第八節　防空救護團

科學の進歩と共に飛行機の急速なる發達を見非常時局に際し萬一の場合空襲に對する防衛は忽にすべからざることなるが、仙臺在住陸海軍衞生部員はこの點に着眼し、今にしてこれに對する救護方法を畫策し置かざれば他日反臍の虞なしとせずとの見地より、陸軍軍醫監木村辰治氏主唱の下に昭和八年八月廿八日仙臺市防空救護團を組織し、左の設立趣旨を發表し官民多數の贊同の下に同年九月十五日發團式を擧行、第二師團長東久邇宮殿下親しく台臨令旨を賜

はる。

設立ノ趣旨

治ニ居テ亂ヲ忘レサルハ護國ノ眞諦ナリ、抑我カ國開闢以來未タ外敵ノ侮リヲ受ケス明治聖代ニ於テ日清、日露ノ兩戰役ヲ經過セリト雖、攻勢作戰ノ結果常ニ敵ヲ異域ニ制壓シ未タ國民ヲシテ眼前ニ於テ悲慘ナル戰禍ヲ蒙ルニ至ラシメサリキ、然ルニ輓近各國共ニ空軍ノ充實ヲ企圖シ彼ノ飛行機ノ驚クヘキ進歩ハ其ノ戰慄的威力トハ慘憺タル光景ヲシテ單ニ戰場ノ一面ニ局限セシメス寧ロ策源ノ主動地タル敵國ノ都市ヲ脅威シ兵營軍需品工場其ノ他主要建物ヲ爆發シ以テ戰鬪能力ヲ滅殺スルノ策ヲ採ルニ至レリ、彼ノ歐洲大戰當時飛行機ノ性能未タ今日ノ如ク發達スルニ至ラサリシモ、尙ホ獨逸航空船カ屢々英佛二京ヲ脅カシ痛ク都民ヲ震駭セシメタルカ如キ空襲ノ威力眞ニ恐怖スヘキモノアリ、翻テ現下ノ我カ國情ヲ察スルニ國際上ノ危機未タ去ラス、前途尙ホ暗雲ノ橫ハルアリ、而カモ我仙臺市ハ兩大陸ヨリ飛來スヘキ航空路ノ要衝ニ坐シ加フルニ主要建造物亦寡カラサルヲ以テ、今ニシテ備フルトコロ無クンハ他日不測ノ危難ヲ招クニ至ルヤ知ルヘキナリ、之レ今回吾人衞生部員ノ蹶起シテ玆ニ本團ヲ設立シ、先ツ防空思想ノ喚發ニ努メ次テ消毒、救護二班ノ養成ニ着手シ其ノ演練ヲ策シ有事ノ日空襲ニ依リ被ムル慘禍ヲ除キ或ハ傷病者救護ノ任ニ當ル等萬全ノ力ヲ効シ以テ聊カ護國ノ微衷ヲ表セントスル所以ナリ。

昭和八年九月二日

仙臺市防空救護團

令　旨

仙臺市防空救護團愛國式ニ方リ玆ニ諸子ト相見ユルヲ欣フ惟フニ輓近航空機ノ發達ニ伴ヒ都市防空施設ノ喫緊缺

クヘカラサルモノアルニ際シ當市在住有志等蹶起シテ本團ヲ組織シ有事ニ備ヘントス寔ニ時宜ニ適セリト謂フヘシ
宜シク協力同心常ニ本團擴充進展ニ努メ以テ邦家ニ寄與センコトヲ望ム

昭和八年九月十五日

奉答

本日茲ニ仙臺市防空救護團發團式擧行ニ當リ畏クモ　第二師團長宮殿下ノ台臨ヲ辱フシ優渥ナル　御令旨ヲ賜ハリ恐懼感激ノ至リニ堪ヘス團員一同奮勵努力事業ノ達成ヲ圖リ以テ御令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期スル

謹ミテ奉答ス

昭和八年九月十五日

仙臺市防空救護團長　陸軍軍醫監從四位勳三等　木村辰次

稔彦王

救護團規定左の如し。

仙臺市防空救護團規定

第一章　目的

第一條　本團ハ戰時空襲ヲ受ケタル場合ニ於ル市民救護ノ方法ヲ調査研究シ諸種ノ計畫ヲ定メ萬一ニ際シ迅速ニ傷病者ノ收療ヲ圖ルヲ以テ目的トス　設立ノ趣旨――仙臺市防空救護團規定

第二章　名稱

第二條　本團ハ仙臺市防空救護團ト稱シ業務遂行上市ヲ中部及東西南北ノ五部ニ分チ分團ノ名稱ヲ附ス、本團事務所ハ當分東三番丁四十六番地ニ置ク

第三章　事業

第三條　本團ハ第一條ノ目的ヲ達スル爲概ネ左ノ事業ヲ實施ス

一、毒瓦斯ノ豫防解毒及傷病者救護ニ關スル各種ノ調査竝研究
二、救護班員ノ養成竝準備ニ關スル事項
三、救護材料ノ整備竝保管ニ關スル事項
四、防空救護ニ關スル實施計畫
五、講演講習竝映畫其ノ他防空思想ノ普及ニ關スル事項
六、救護班員ノ召集、演習參加同見學等ニ關スル事項
七、團報其他印刷物ノ刊行ニ關スル事項

第四章

第四條　本團ハ仙臺市在住ノ在鄕陸海軍衞生部員（退行者ヲ含ム）ヲ以テ團員トス

第五條　本團ニ左ノ役員ヲ置ク

團長	一名	副團長	二名
分團長	五名	副分團長	五名
理事長	一名		

理　事　若干名（内常務理事六名）

本團ニ顧問、相談役及贊助員各若干名ヲ置ク

第六條　團長ハ團務ヲ總理シ平時ニ在リテハ救護計畫ノ要綱ヲ定メ且ツ調査研究ノ方針ヲ樹テ其ノ實行ヲ企圖シ戰時ニ在リテハ衞戍司令官ノ隷下ニ屬シ他ノ團體ト協同シテ救護班ヲ指揮シ救護ノ任ニ當ラシムルモノトス

第七條　副團長ハ團長ヲ補佐シ團長事故アル際ハ其ノ職務ヲ代行ス

第八條　分團長ハ團長ノ指示ヲ受ケ分團ノ統制ヲ圖リ其ノ業務ヲ處理スルモノトス

等九條　副團長ハ分團長ヲ補佐シ分團長事故アル際ハ其ノ職務ヲ代理ス

第十條　理事長ハ團長ノ指示ヲ受ケ各分團及理事間ニ於ケル業務ノ連繫促進ヲ圖リ又外部トノ折衝ノ任ニ當ルモノトス　理事長事故アル際ハ庶務部長其ノ職務ヲ代理スルモノトス

第十一條　理事ハ團長ノ諮問ニ應シ意見ヲ開陳シ且ツ重要業務ニ參與スルモノトス

第十二條　常務理事ハ左記分擔業務ノ部長トナリ係員ヲ指導シ業務ノ進捗ヲ圖ルモノトス

一、庶務部、團員名簿ノ調製、所要ノ記註、團内各部ノ連繫、外部トノ交渉、會合、其ノ他他ノ係ニ屬セサル一般業務

二、記錄部、書類ノ發送受領、整理、保存、文書ノ起案、統計ノ作成等

三、調査部、第三條第一項ニ關スル事項

四、宣傳部、第三條第五項竝第七項ニ關スル事項

五、計畫部、第三條第二項乃至第四項ニ關スル事項

六、經理部、金品ノ出納、整理、保管、配給其ノ他經理ニ關スル事項

第五章　役員ノ選擧

第十三條　團長ハ總會ニ於テ選擧ス

第十四條　役員ハ團長之ヲ指名囑託ス

第十五條　理事長ハ理事ノ互選ニ依リテ定ム理事ノ分擔業務ハ團長之ヲ定ム

第十六條　役員ノ任期ハ二ケ年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第六章　會　議

第十七條　會議ハ總會、役員會ノ二種トス要急ノ場合臨時總會ヲ開催スルコトアルヘシ

總會ハ毎年一回四月ニ於テ開會シ左ノ諸項ヲ報告審議ス

一、庶務報告　二、會計報告　三、當年度ノ事業計畫　四、團員ノ異動

役員會ハ必要ニ應シ之ヲ開催ス

第七章　經　費

第十八條　本團ノ維持費ハ團員及贊助員ノ醵金ニ依リ支辨スルモノトス

第九節　火防上特に留意する建造物

壯絶麗絶天下に比なき彼の阿房宮も楚人の一炬に怜むべし焦土と化しぬ、恐るべきは火災なり、吾等鄉土の誇とする名勝古蹟にして一朝祝融氏の怒に觸れんか痛恨悔ゆるも及ばざるべし、故を以て是等建造物に對しては消防の職責たるよりも寧ろ鄉土愛の精神を以て防備を忘る可らず、當市に國寶として指定を受けたる建造物三、特別保護建造物の指定を受けたるもの九、其の他由緒深き神社佛閣佛堂等尠からずと雖も防火設備の完備せるものなきを遺憾とす、

左に是等建築物及諸官衙の所在を示さん。

一、國寶及特別保護建造物所在地

名稱	位置	指定年月日	記事
大崎八幡神社社殿	八幡町村社大崎八幡神社境内	明治三十六年四月	構造形式、本殿拜殿石の間を合せ所謂八棟造、屋根柿葺
藥師堂	木ノ下藥師堂境内	同 上	構造形式、桁行五間、梁間五間單層屋根入母屋造、瓦葺
木造釋迦如來立像一軀	八幡町龍寶寺	同	等級丙種類彫刻。
鍍金金剛鈴一、金剛杵一、革筒入二個	連坊小路迴照寺	明治三十八年四月	等級甲種三等種類美術工藝。
太刀（銘備州長船臣光）	川內龜岡八幡神社	大正三年四月	等級丙種種類刀劍。
伊達政宗靈廟（瑞鳳殿、唐門、透塀、南廊下、拜殿、橋御供所、祭廊下、涅槃門附玉垣）	越路瑞鳳寺前町	昭和六年十二月	
伊達忠宗靈廟感仙殿	同	同	
仙臺城大手門	川內	同	
同城隅櫓	同	同	

△大崎八幡神社は始め遠田郡八幡村（現今の田尻町字八幡）にあり（傳云大永七年膽澤郡八幡村より遷座すと）舊記（封內風土記、奥羽觀蹟聞考誌等を參照）に曰く

藩祖米澤在城の日信夫郡瀨上亭長一苞苴を携へ來り訴ふ、曰く昨夜行客あり我舍に宿す、自ら言ふ、我は奥州遠田郡八幡村八幡宮社司なり、神體を奉じて洛陽に赴くと、翌早朝倉皇出發の際、此苞苴を遺せり、必らずや八幡神體ならんと、藩祖乃ち侍臣に命して其絨を披かしむれば果して神體なり、爾來崇敬甚だ篤し、公後年大崎を併領し岩手山城に移らるゝや、小社を郭內に造りて彼の神體を安んず、慶長七年仙臺築城の後、之を城北高地に遷し、同九年秋、宮社の造營を始め同七年八月十一日落成す、綉闥彫甍、悉く富麗結構を極む、天下の彫工甚五郎（妙手左手にあり依てヒダリ甚五郎と云ふ）の妙技に成りて、其人物禽獸花草蔬果皆生意飛動の勢あり、實に一國の奇觀なり、寺を社東に建て惠澤山龍寶寺と曰ふ、此月十二日、僧實濟（龍寶寺）をして神宮を殿內に藏せしむ、往昔米澤成島龍寶寺に八幡宮あり、藩祖岩手山に遷るの日、龍寶寺實範法印之を奉持して岩手山に到る、當社造營の時、別社を設けず、同じく之を殿內に藏し稱して成島八幡と云へり、社士十二人、流鏑馬射手四人あり、祭田三十石の地を寄附す（宮社は綱村君修造の後宗村君裝飾を加へられる）寛文八年八月十五日、綱村君、石を州內東山に取り華表を建て（明治三十三年五月一日暴風樹木を倒し此華表を毀てり四十年三月有志之を再建す）儒員內藤以貫をして銘を作らしめ、虎岩道說をして之を書せしむ、其銘に曰く

嗟國之爲以有神。嗟神之爲神以有國。
惟神以敬惟國以寧。永興華表萬年無極。

△藥師堂荒廢既に久し、其特別保護建造物に指定せらるゝや、之れが大修繕を計畫し、明治三十七年國庫補助金七千八百七十七圓七十六錢四厘と有志寄附金二千四百五十八圓八十錢三厘とを以て起工し、同三十八年九月二十八日落成式を兼ね臨時祭典を行ふ、舊記（村內風土記等參照）を按するに曰く

聖武帝天平九年詔して每州に國分寺を置かる、木ノ下國分寺其一なり、文治五年の後、八月十二日兵燹に罹り、一山堂塔伽籃諸寺院悉く烏有に歸す、天正年間國分盛重舊跡を制刷し、內殿に藥師脇持菩薩及び十二神將を置く運

慶作、本尊乃ち閻浮檀金帳を以て之を蔽ひ、藩主親ら封じて秘して發かしめず、慶長十年藩祖藥師堂本堂及び一山鎭守白山神社其餘三院（學頭、別當、院主）二十二子院を再興し、同十二年竣工、八月二十四日入佛式を行ひ、永代資用四萬錢を寄附せりと云ふ。

△歴史上の證徴として國寶に指定せられたる木造釋迦如來立像に付き、龍寶寺、寺傳（明治三十四年十一月龍寶寺の書上參照）に曰く

釋尊三十七歳の時、忉利天に在して、一憂九旬の間、生母摩耶夫人報恩の爲說法の時、拔陸國主優塡王、殊に釋尊を慕ひ、赤栴檀を以て尊像を作らんとす、帝釋天其志を感じ、毘首羯摩を降して彫刻せしと云ふ、山城國嵯峨淸涼寺の靈像と同木同作にして、秀衡の盛時、栗原郡金成村炭燒藤太なるもの、七堂伽籃を建立し、福王寺と名づけ砂金四十駄を以て京師より此像を迎へ、本尊とせり、其後荒廢久し、綱村君之を福王寺より遷して龍寶寺の本尊とせらる、明治九年　天皇東巡の日、宮城博覽會に陳列し、六月二十五日　天覽に供し奉れり。

△製作の優秀を以て國寶に指定せられたる鍍金金剛鈴及び金剛杵に關する舊記

遍照寺は宥日法印の開基にして始め米澤長井の莊、宮と號するの地にありて高野山の末寺なりしが、後ち報恩院末寺となる、其什物には弘法大師が延曆二十三年、勅令により入唐し、靑龍寺惠果和尙に就て密法傳授を受くるの際、同和尙の附屬せる諸具の鈴五鈷にして、永享八年高野山宥遍法師より遍照寺開祖宥日法印に傳はる所たり、其他には藩祖寄附の高麗畫、金胎兩部曼陀羅二幅、高雄文覺上人の錫杖、及び其護持佛智證大師作の不動像ありしと云ふ。

△伊達政宗靈廟

一、瑞鳳殿は二代忠宗君が父政宗公のため建立の靈廟にして、規模壯大ならざるも其精緻意匠に見るべきものあり、涅槃門、拜殿、唐門、本殿、御供所、廻廊、玉垣よりなる一構の建築なり、涅槃門は屋根切妻造銅葺の四脚門にして、骨材の構成裝飾善美亦見るべきものあり、柱扉は悉黑漆塗にして桃山式の菊桐の金具を配し殊に桁は白檀透彫の菊唐草を張付けたり。

一、拜殿は桁行七間梁間三間正面に一間の向拜を附し四椽高欄付なり、屋根入母屋造銅板葺にて總體は和樣手法の揚蔀戸、唐戸を開き角柱に板張、壁內外共黑漆塗、長押、臺輪、桝組等胡の鮮なる雪綱彩色を施しあり。

拜殿より奥は唐門より本殿に通ず、これより一躍して唐樣建築に移る、唐門は一間白唐門にして極彩色を施し、天井を金箔張りとなせるため金唐門と稱せり、唐破風の卓拔なる形、欄間の彫刻等に見るべきものあり、本殿は瑞鳳殿の中心建築にして方三間、梁間桁行各十九尺四寸屋根は寶形造銅瓦葺にして、風變りなる露盤をのせ四隅の降棟には二頭の龍首を揃へり、粽をもつた丸柱礎盤の上にたち、壁は板張にて外は漆塗に蒔繪を施せり、正面には竹に雀と丸曜紋の伊達家紋のついたる唐戸を開き兩脇には見事なる火燈窓あり、其框格子には金蒔繪の彩畫と精縛なる金具を裝飾せり、軒廻りは尾垂をつ三手先の桝組にて軒を受け、複雜の構成を見せ至る所彫刻にて充たし彩色を施せり、內部は石敷にて二本の來迎柱たち、唐樣構築の虹梁、大瓶束などの雄渾なる手法は見逃すべからず、內壁は金地に佛畫をかいた張付にて、天井、厨子裏壁にも胡粉の佛畫を畫けり、石壇上に家形厨子を安置す、厨子は精巧を極めたるものにして、內に政宗公の木像を安置せり。

一、御供所は一名竹樓といひ桁行五間、梁間三間、向拜付のものにて屋根入母屋造銅板葺、瀟洒なる素木造にて、吹寄垂や簾欄間などに本殿拜殿と異なれる趣あり、口碑によれば此竹樓は仙臺郊外若林にありたる政宗公隱居所の書齋を是所に移建修築せりと云へり。

瑞鳳殿は寛永十四年成れる、到所に桃山式手法あり、日光廟に比し其の規模小なるも決してこれに劣らざる東北の偉觀なり。

△感仙殿は伊達騒動に有名なる四代綱村君及其側近が二代忠宗君のために建立の廟にして、形式は瑞鳳殿を模倣せるものなり、もと、拜殿、本殿、御供所等を具へありしが明治初年これを取毀して今は本殿即感仙殿のみ存せり。

△大手門　仙臺城一名青葉城は本丸二の丸三の丸より成る、本丸は伊達政宗公の創意、慶長七年落成、二の丸は二代忠宗君寛永十六年落成、降つて文化元年二の丸建物は雷火にて燒盡し文化六年再建す、明治四年頃本丸の建物を悉く取毀す、明治十五年二の丸の建物火災にて再び燒盡し今日に至る、現存せるは大手門及角櫓、巽門及倉庫なり。大手門は口碑によれば豐大閤征韓役に肥前名護屋に陣屋を築きたる時其城門を政宗公拜領し海上を仙臺に運び後二代忠宗君二の丸造營にあたり再建したるものと傳へらる、大手門は二階建桁行六十五尺梁間二十二尺三寸、二階は梁間二十六尺、桁行同、屋根入母屋造本瓦葺二階建、正面に大扉を開き左右番所をとり二階は正面格子窓に揚板庇背面二階には豐麗なる火燈窓あり、一軒、舟肘木の單純なるものなるが構築頗る雄大にして、正面柱頭、冠木桁、及入母屋破風に菊、桐、花菱の桃山式なる雄渾の木彫がつき金色さんとして輝けり。

△隅櫓　は矩形の稍歪みたるプランにて、一部は二階建、屋根入母屋造木瓦葺、出桁にて軒を支え、外部壁は白漆喰塗にて壁には砂利を塡め、格子及丸、角形の矢狹間付けり、大手門を中央にして右翼に隅櫓、左翼に土塀ありて城門の一廓を構成しあり。

二、神社所在地

社格	社號（例祭日）	祭神	所在	由諸
縣社	櫻岡大神宮（十月十七日）	天照皇大神（合祀）、豐受大神、大歲神、御歲神、事代主命、柿本人麿、若歲神、蛭子之命、大國主命、小彦名命、奥津姫神、奥津彦姫神、手置帆負神、彦佐知之神、表筒男命、中筒男命、底筒男命、保食神	本柳町	勸請年月不詳、往古神明宮ト稱シ宮城郡荒巻村ニ鎭座アリシヲ天和年間伊達綱村同村字勢伊堂山ニ遷坐シ猊神明宮ト稱ス、明治二年村社ニ列シ荒巻神明ト改稱ス、同年仙臺大町商佐藤助五郎等協力ヲ以テ此地ニ遷坐シ同八年五月縣社ニ列シ今ノ社號ニ改ム。明治四十一年七月十八日中ノ町鎭座無格社住吉神社ヲ合祀ス。明治四十五年一月二十三日櫻岡鎭座村神明社ヲ合祀ス。大正二年三月二十四日中ノ町鎭座村洲崎神社ヲ合祀ス。大正二年十九日花壇鎭座住吉神社ヲ合祀ス。
同	東照宮（四月十七日）	德川家康	北六番町	舊仙臺藩主伊達氏ノ祖從三位權中納言兼陸奥守藤原政宗ヲ祭ル、同氏累世ノ勤勞及孫政宗當時有功ノ故ヲ以テ新社創營神祭之儀伊達氏舊臣等明治六年九月願出同七年一月許可同年六月縣社ニ列ス、同十二月伊達家ヨリ靈衛ヲ遷座セリ承德三年三月伊達忠宗勸請、明治十二年五月鄕社ニ列シ大正四年十一月廿一日縣社ニ列ス。
同	青葉神社（十月九日）	武振彦命	通丁	往昔白山ノ神祠ハ國分木ノ下ノ林ノ中ニアリト、何レノ代ヨリ此地ニ祭レルカ詳ナラズ、然レドモ古宮城郡國分ノ鎭守ト遠近崇敬スト見エタリ、天平九年聖武天皇此地ニ國分寺ヲ創立シ給ヒシ十八年、伽藍ヲ安置ス、文治五年八月源頼朝奉衡征伐ノトキ兵燹ニ罹リ亡ス、其後興廢盛衰ク藤原泰衡亡ク社殿盡ク焼亡ス、管内ニ屬スルヲ以テ正年間國分彦九郎盛重食邑ノ管内ニ隨ヒ三日神事ヲ行フアレドモ舊跡ヲ就テ社殿ヲ建造シタ例ヲ崇敬ス、明治四年七月鄕社ニ列ス。
鄕社	白山神社（三月二日三日）	伊邪那岐神、伊邪那美神、菊理比咩神	木ノ下	天平九年聖武天皇國分寺御建立ノ時十八伽藍ヲ安置シ給フノ一社ナリ。

（境内三社）八幡神社　譽田別命　白山神社　境内

雷神社	大雷神		同	同前
天神社	菅原道眞		同	勸請年月日不詳、古老傳云フ、モト宮城郡小田原村ニ鎭座アリシヲ木下藥師堂境内ニ遷坐セシト然レドモ其年月日不詳明治七年三月此地ニ移轉ス。
村社 大崎八幡神社（九月十四日 十五日）	應神天皇 仲哀天皇 神功皇后	八幡町	往古陸奥國遠田郡八幡村ニ鎭座シ後此地ニ遷座アリシヲ慶長九年伊達政宗仙臺城ヲ築クノ時大崎八幡宮ト稱ス又古昔羽州玉造岩手澤米澤ニ遷リ政宗米澤奥州ヲ成島八幡宮ヲ寄持シタリシヲ此ノ時合祀シ領四百五十三石九斗四升ヲ奉持シ、維新ニ至リ沒收セラル、明治四年七月村社ニ列ス。	勸請年月不詳、文政十二年再興。
諏訪神社	健御名方神	大崎八幡境内	同	不詳。
北辰神社	天御中主神	同	同	不詳。
鹿島神社	武甕槌神	同	同	不詳。
雷神社	雷神	同	同	不詳。
清瀧神社	素盞雄尊	同	同	不詳。
熱田神社	熱田大神	同	越路町	慶長八年八月二十四日伊達政宗ノ勸請ナリ、明治四年村社ニ列ス。
村社 愛宕神社（柯遇突知命合祀）	神明社（越路）	天照皇大神、豐受大神	同	明治四十一年七月廿一日合祀。
	日吉神社（猿牽丁）	大山咋神、大巳貴命 少彦名命、遠田彦命	同	同前。
	（信夫神社）（三百八町）	伊邪那岐命 伊邪那美命	同	明治四十二年六月二十二日合祀。

村社 龜岡八幡神社（五月十五日）	應神天皇 玉依姫命 神功皇后	龜岡町内	文治五年伊達朝宗相州鎌倉鶴岡八幡宮ヲ伊達郡高子村ニ勸請、此時靈龜出現依テ龜岡ト號ス、應永三十年同郡梁川ニ遷座ス又靈龜出現ス、天文元年伊達郡西山ニ遷座ス、天文元年慶長七年宗植公當國仙臺ニ二年八月同郡梁川ニ遷座、天和三年伊達綱村ニ至リテ此地ニ遷座厚ク崇拜セリ、明治四年七月村社ニ列ス。	
高良王垂神社	武內宿禰、御年神 事代主神、宇氣持神	龜岡八幡境内	天和三年伊達綱村勸請。	
同 保食神社	保食神、大物主神、天照皇大神、月讀廼命 彦火々出見命、別雷神 八衢比女神	南小泉	永祿年中勸請、稻荷大明神ト稱セシヲ明治四年九月十八日保食神社ト改稱村社ニ列ス。	
淺間神社	木花咲郎姫命	保食神社境内	不詳。	
同 天神社（舊六月廿五日）	菅原道眞	躑躅岡	社傳ニ云、天延中平將春山城國竹之內沼崎山ヨリ岩代國宇田郡ニ移ス、又宮城郡國分小八田原村ニ勸請ス、其後轉ス、榮田郡小田地ヲ去リテ手崎ニ移ス、慶安年中東照宮元和ヲ稱ス、又古昔暫ク此地ヲ照星閣ト號スル時宇多郡八幡崎元永年中天神ノ廟ヲ東方ニ移ス、往時菅神ノ社ナリシヲ此ノ時合祀シ領四百五十三石九斗四升ヲ寄持シタリシヲ此ノ時合祀シ社ニ列ス。維新ニ至リ沒收セラル、明治四年七月村社ニ列ス。	
八幡神社	應神天皇、御年神 事代主神、豐受姫神	天神社境内	不詳ト雖モ舊來此地ニ鎭祭ノ祠ト云ヘリ、或ハ結城七郎此地ニ住居ノ時ノ氏神也ト云フ。	
初發神社	天御中主大神	同	文政二年春二月伊達氏ノ臣中井新三郎氏神尊崇ノ餘リ此境內ニ勸請スト云フ。	

村社　**無臺八幡神社**　仲哀天皇、應神天皇、神功皇后、武内宿禰

同　**八幡神社**（三月十五日、八月十五日）　應神天皇

同　**神明社**　天照皇大神、豐受比賣神

青柳神社　大年神、少彦名神

同　**諏訪神社**　天照皇大神、素戔嗚尊、健御名方命、健御賀豆智命、突知命、伊波比主命、天之子八根命、伊波比主命、健御名方命

同　**神明社**　天照皇大神

同　**熊野神社**（九月九日）　伊弉冊尊、伊弉諾尊、速玉男尊、泉津事解男尊

同　**多賀神社**（式内）　伊弉諾尊、天子八根尊、健御賀豆智命、伊波比主尊、高靈比賣神

長町字八幡　天喜年中源頼義安倍頼時ヲ征スル時河内國平岡ヨリ此地ニ遷祀、永祿年中本部山村北目城主其後祀堂衰廢ス、明治五年五月村社ニ列ス。大勝之ヲ再興スト云フ。

原町宮城野目　桓武天皇延暦十七年坂上田村麿勸請ニシテ生巣原八幡社ト稱ス、中古ヨリ宮城野八幡社ト稱ス、明治五年五月村社ニ列ス。

原町小田原神明社境内　不詳。明治五年五月村社ニ列ス。

不詳。

長町字諏訪　勸請不詳ト雖モ延慶三年ノ碑今ニ存ス、故ニ同年以後ノ創立ニ係ルヲ知ル、明治五年八月村社ニ列ス、明治四十五年四月茂ケ崎年三月神饌幣帛料供進指定セラル、明治四十五年四月村社ニ列ス。

大字長町字土手ノ内　一年十月現地ニ移轉。

荒巻神明　不詳。明治五年九月村社ニ列ス。

通丁　勸請年月ヲ知ルニ由ナシト雖モ、宮城郡荒巻村總鎮守トシテ祀ル所ナリト云フ、明治十二年六月村社ニ列ス。

西多賀富澤　社說云、當社ハ延喜式ニ載スル所ノ陸奥國一萬座ノ内ニシテ祭神伊弉諾尊ナリ、景行天皇四年八月十五日勸請ス、其後雄略天皇二年東征ヲ追討シ給フ、後安永大年中舊年仙臺藩ノ祠ヲ遷ス、其

無格社　鹽竈神社　鹽土翁　東六番丁

古傳云フ、延寶年中國主伊達綱村奥羽一宮鹽竈神社再興ノ時奉幣及ヲ供セラル、仙臺藩高福院境内ニ假宮ヲ設ケ御駐在之ヲ殿臺番丁ニ忍ビズ人民敬暫ク汚穢ナラシムルニ至リ拜殿ヲ修繕セリト、維新ノ際鹽竈大明神ト稱シ、後神佛引分ノ際鹽竈神社ト改稱、仙臺名掛丁大歲神社ニ合併、又今地ニ遷移ス。

同　四社宮　底筒男命、中筒男命、表筒男命、倉稻魂命　東八番丁

慶長七年仙臺城成リ次テ町區ヲ定ム、其時當町鐵砲組ノ者共協力之ヲ勸請シ當所ノ鎭座トシテ祭祀シ來レリト云フ。

同　金毘羅神社　大物主神　崇德天皇　東十番丁

詳ナラサリシトモ國分町ニ勸請シタルヲ此地ニ遷座セシト云フ。

同　矢先神社　天照皇大神　倉稻魂命　二十人町

其詳ナルヲ知ルニ由ナシト雖天平年中ノ勸請ニシテ此地草創ノ時ヨリ祭祀シ來レリト古老ノ口碑ニ傳フ。

同　和光神社　神武天皇　鐵砲町

元和元年伊達政宗大坂出陣ノ節當時ノ兵卒百二名鐵砲組ニ隨テ從ヒ全勝ヲ新リ向ヒ場ニ敬ヒ功アリ、藏旋ノ後協力ヲ以テ之ヲ勸請シ町内守ト崇ヒ、和光明神稱シヲ維新ニ至リ和光神社ト改稱セリ。

同　瀧澤神社　瀨織津姫神　大佛前

勸請年月及何人之ヲ祭レルカ詳ナラズ、古老傳云フ、元仙臺川内ノ龜岡八幡神社ニ鎭座セシ政宗年間長七年伊達郡梁地ノ座ニ龜岡ニ遷座スル雜新後仙臺城ヲ今築ク伊達綱村又今龜岡ノ座ニ遷座ス、天和三年伊達綱宗ヲ寄附ス、六石ヲ賜ヒ其跡ヲ遷シテ當社ヲ收セリ。

同　和靈神社　山家公頼　立町通

公頼通稱清兵衛、慶長十九年伊達黃門政宗ノ庶子伊達秀宗ヲ豫國宇和島ニ封セラル、際陪從ス後國老ノ任負擔ス忠言以爲宗諫ス、狀ヲ秀宗ニ寃死ス、後寃魂ノ祠諫ス其ヲ悟ル承應三年六月靈ヲ邸內ニ鎭位和明神稱吉田家託ト部神祇大輔ニ正一祀靈ノ神號宣勅ニ賜ル故此地ニ改メテ和靈神社ト稱ス、明治十一年七月衆庶參拜ノ許可アリ

同　天神社　菅原道眞　堤町

享保年間伊達氏ノ臣島田源之亟ナル者宮城郡荒巻村小田原村入合字臺ノ原舊天神社址ノ邊リ地中ヨリ銅ノ神像ヲ得タリ、靈驗有シヲ以テ同十八年社祠創立、爾來衆庶之ヲ尊崇セリ。

同　松尾神社　大巳貴命　少彥名命　北四番丁

延享二年三月十九日庄子傳七郎ナルモノ伊達氏ノ命ニヨリ二柱ノ神ヲ祭リ稻荷神社ト稱シ勸請セリ、安永年中ヨリ類廢ニ及ビシヲ交政五年再興同十二年伊達氏ニ於テ亦之ヲ崇敬ス天保十二年三月十九日松尾神社ト改稱ス。

同　朝日神社　神子朝日女之靈　北七番丁

神子朝日女ハ元通町鎭座熊野神社ノ神子ニシテ寛文年間此地ユ二本杉通ヲ植エテ墓誌ト稱ス、故ニ此ヨリ南達ス葬リ二本杉ノ神稼穡ル地市街ヲ今ハ木ノ脈ヲ推シアル考田川（今北六番丁）ニ勸ヲ旁ヲ田ノ櫻田川ノ溝末流ニ流シテ大ニ水ヲ梅ヲ開キ櫻田ノ小田原村ニ達ス、流ル水ヲ開キ派水ヲ流ス分ノ竹田畑利ア、其功德大ナルヲ以テ村民擧リテ崇敬スル同年間伊達氏命ヲ尊崇ス一祠ヲ建立シ神ニ祭ラシム、朝日明神ト稱シ村民之維新ニ至リ朝日神社ト改稱ス。

同　八雲神社　速須佐之男命　神日本磐餘彥命　北八番丁

慶長年中仙臺城ヲ築キ町區ヲ定ム、此際人民協力ヲ以テ之ヲ勸請シ當町ノ鎭守ト祭祀セリト云フ。

同　鹿島神社　武甕槌命　通丁

弘安二年伊達藏人大輔政依奥州伊達郡ニ之ヲ勸請セリ、伊達氏類廢ニ移リシ後伊達郡光明寺ヲ此地ニ移セシ至ラントセシヲ維新ノ際神社ト改稱シ支十七世政宗仙臺城ニ移リシ後伊達郡ニ住僧古岫和尙其際之ヲ遷祀セリト古老ノ口碑ニ傳フ轉ス、

同　磐上神社　表筒男神　中筒男神　底筒男神　（五月六日）　堤通

勸請年月知ルニ由ナシト雖モ一小祠アリ、住吉大明神ト稱セシモ廢ニ至ラントセシヲ維新ノ際神社ト改稱シ支倉町ニ鎭座アリシヲ明治三十五年九月三日堤通ニ移轉セリ。

同　羽黑神社　倉稻魂命　北山町

勸請年月日ヲ知ルニ由ナシト雖モ、元福島縣下信夫郡福島北陵ニ鎭座アリシヲ寛文十年辛亥夏伊達綱基當所ニ遷座スト云フ。

無格社	愛宕神社	火產靈神	北山町	慶長年間勸請ノ由傳フレドモ後年火災ニ罹リ其詳ナルヲ知ルニ由ナシ。
同	竹駒神社	保食神	北山町	不詳。
同	愛宕神社	火產彥神	十二軒丁	不詳。
同	春日神社	天兒屋根命 倉稻魂命	覺性院丁	年月日及勸請セシ地所詳ナラザレドモ國分彥九郎盛重之ヲ勸請氏神トシテ祭リシト云フ、同家滅亡後盛重ノ息男覺性院ノ開山玄性坊實永ナル者寛永十九年該寺境內ヘ移轉シ、祭リ來リシヲ維新ノ際又此ニ移轉シ、衆庶之ヲ崇敬セリ。
同	熊野神社	家津御子命	越路	元祿年中里民之ヲ勸請スト古老ノ口碑ニ傳フ。
同	穴藏神社	保食神	靈屋下	不詳。
同	八幡神社 (三月十五日)	應神天皇	小田原 弓ノ町	康平年中長民部亟諸能奥州栗原郡迫之鄉長部之莊ニ勸請シテ氏神ニ祭ルル所ナリ、諸能沒落其男若介、狹浪人ト名ヲ伊門ナル豪城ニ移リ、此地ニ居住シ之遷座セシト、其後當地ヲ小田原弓ノ町ト名ヲ政宗者儒ヲ此神祭ラシ年々三月十五日ヲ以テ足ケ諸伊達ル組ヲ古口碑ニ傳レドモ交化四年三月五日火災ニ罹リ社記失ナルヲ知ルニ由ナシ。
同	招魂社	從軍戰病死者	舊臺天主跡	元第二師管ニ屬スル軍人軍屬ニシテ從軍戰死病歿シタルモ歲ノ實ニ有志少ナカラザルモ本縣ニハ常設ノ招魂社ナキヲ以テ有志相圖リ醵金ヲ募リ行シ來リタリ毎祭典ヲ續ケ永久ニ持ツ魂ハ一時止ムヲ得ズ一旦ニ慰ルモノニシテ招魂ノ主ニ遺旨ニ基キ一定ノ組織ヲ以テ下ニ籍スルモノニ本年十月二十五日ニ常主ニ非スル忠魂義士ノ所ナリ昭和十一年月日ニ創立シ、明治三十八年ニ右ノ用ニ費ヤシ、明治七年ニ義金ヲ以テ維持シ、久ニ捐志ノ募集ニ及ビ、同年ニ社殿拜殿ヲ建設シ、祭祀ヲ執行スル旨許可セラル。

無格社	稻船神社	宇賀靈神	原町南目	不詳。
同	福澤神社	宇迦之御魂神	小田原福澤	不詳。
同	大山祇神社	大山祇命	苦竹新田	不詳。
同	平田神社	豐受姬命	苦竹北浦	不詳。
同	豐玉神社 (十一月八日)	苦竹原町	年月不詳、加藤權內祖先加藤幸吉勸請奉仕。	
同	姥神社	伊豆佐賣神	原町南目 蒲北	不詳。

三、佛堂所在地

堂名	本尊	所在及管理者	由緒
藥師堂	藥師如來	木ノ下 國分寺	聖武天皇ノ御宇天平九年二月十五日勅シテ國分寺七箇ノ高臺十八迦藍ヲ建立セラルルノ一堂ナリ、文治五年八月源頼朝原泰衡ヲ征討ノ際兵燹ニ罹リ伽藍悉ク燒亡シ唯本堂ノミヲ存ス、其後建久二年結城宗廣修繕ヲ加ヘ永祿元年國分宗正大ニ修繕ヲ加ヘテ神トナス、其後國分盛重滅亡ニ及ビテ慶長十年十月伊達政宗之ヲ崇敬シテ堂宇ヲ修繕シ仁王門鐘樓ヲ建立シ歷世修繕ヲ加ヘテ尊崇セリ
準胝堂	準胝觀世音	同	聖武天皇天平九年國分寺創立ノ時十八伽藍ヲ安置シ給フノ一堂

大大佛佛堂前　不動堂

大師堂　不動堂

島瀧不動堂　三居澤不動堂

觀音堂　千手觀音堂

藥師堂　藥師如來堂

藥師堂　藥師如來堂

仙臺忠魂國堂　阿彌陀如來堂

不動堂

思惟遮那如來　大佛殿

弘法大師　中同山

不動明王　三浜居澤巻

不動明王　不動堂

不動堂

上山

享保二年鑄

南原目町

千手觀音堂

芳賀ノ口町

藥師如來

四反田町

調上藥師如來

柊町

同　尊像信賞／醫教文高ノ／ヲ十一年發ノ／ヲ十一年發ノ／ヲ十一年發

四、寺院所在

名稱	宗派	本尊	所在地	備考
桃源院	黃檗宗	阿彌如來	新河原町	長町大年寺末
大學院	天台宗寺門派	不動明王	河原町	本山　近江國滋賀郡別所村園城寺
泰心院	曹洞宗大源派	釋迦如來	南鍛冶町	北山輪王寺末
東漸寺	眞宗東派	阿彌陀如來	同	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺
嘉祥寺	同	同	同	同
淨影寺	同	同	同	同
仙性院	天台宗寺門派	不動明王	荒町	本山　大學院ニ同シ
滿福寺	新義眞言宗智山派	阿彌陀如來	同	本山　山城國愛宕郡下京東瓦町智積院
昌傳菴	曹洞宗大源派	釋迦牟尼佛	同	羽前國置賜郡高玉瑞龍院末
皎林寺	同	聖觀世音	同	名取郡吉田村秀麓齊末
佛眼寺	日蓮宗魚門派	十界勸請板曼荼羅	同	本山　山城國愛宕郡法皇寺村要法寺
遍照寺	眞言宗新義派	不動明王	連坊小路	大本山　大和國式上郡初瀨町長谷寺
松音寺	曹洞宗太源派	釋迦如來	新寺小路	桃生郡鹿又村統譚寺末
瑞雲寺	同　月泉派	釋迦牟尼佛	連坊小路	羽前國米澤朝川村瑞雲院末

保壽寺	同　明峰派	釋迦如來	同	宮城郡七北田村洞雲寺末
法運寺	日蓮宗	同	同	甲斐國南巨摩郡身延村本遠寺
大安寺	曹洞宗明峰派	釋迦牟尼如來	弓ノ町	名取郡長町村瀧澤寺末
圓福寺	同	正觀音菩薩	石名坂	同
花京院	天台宗寺門派	三寶荒神	成田町	本山　近江國滋賀郡別所村園城寺
冷源寺	眞宗東派	阿彌陀如來	同	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺
寶性院	眞言宗醍醐派	愛染明王	南染師町	本山　山城國宇治郡下醍醐村三寶院
淨澤寺	眞宗東派	阿彌陀如來	八軒小路	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺
常林寺	淨土宗名越派	同	三百人町	新坂通莊嚴寺末
保春院	臨濟宗妙心寺派	觀世音菩薩	保春院前町	大本山　山城國葛野郡花園村妙心寺
西光院	新義眞言宗智山派	十一面觀音菩薩	土樋	大本山　山城國愛宕郡下京東瓦町智積院
松源寺	曹洞宗大源派	釋迦牟尼佛	同	北山町輪王寺末
眞福寺	時宗遊行派	阿彌陀如來	同	本山　相模國鎌倉郡藤澤驛清淨光寺
國分寺別當坊	新義眞言宗智山派	藥師如來	木ノ下	本山　山城國上醍醐報恩院
蓮華院	天台宗寺門派	秋葉山吒枳尼天	上染師町	本山　近江國滋賀郡別所村園城寺
賢聖院	天台宗山門派	不動明王	北目町	元寺　小路光圓寺末
教樂院	眞言宗醍醐派	大日如來	柳町	本山　山城國宇治郡下醍醐村三寶院

本願寺別院	眞宗本願寺派	阿彌陀如來	東一番丁	本山　山城國愛宕郡下京門花町本願寺
大聖寺	新義眞言宗智山派	不動明王	東三番丁	本山　山城愛宕郡下京東瓦町智積院
報恩寺	淨土宗名越派	阿彌陀如來	東九番丁	中本　山下野國芳賀郡大澤村圓通寺
圓德寺	同	彌陀如來	同	本寺　新寺小路成覺寺
常念寺	同	阿彌陀如來	同	本寺　下野國芳賀郡大澤村圓通寺
栽松院	曹洞宗明峰派	釋迦如來	同	連坊小路松音寺末
光壽院	曹洞宗太源派	同	同	北山町輪王寺末
龍泉院	同　明峰派	五智如來	同	宮澤宗禪寺末
榮明寺	眞言東派	阿彌陀如來	東十番丁	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺
見瑞寺	同	同	東九番丁	同
本山孝勝寺	日蓮宗	赤栴檀釋迦牟尼佛	同	
蓮香院	同	釋迦牟尼佛	同	本山　東九番丁孝勝寺
法輪院	同	日蓮大菩薩	同	同
妙音院	同	釋迦牟尼佛	同	同
願行寺	淨土宗名越派	阿彌陀如來	東十番丁	小本山　新寺小路正雲寺
久近寺	同	同	同	中本山　弊城國弊前郡山崎村專稱寺
慈恩寺	同	同	同	小本寺　新寺小路愚鈍院
全勝寺	曹洞宗月泉派	正觀世音菩薩	同	連坊小路瑞雲寺末
德泉寺	眞宗東派	阿彌陀如來	同	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺

明光院	眞言宗醍醐派	車地藏尊	小田原山本丁	本山　山城國宅治郡下醍醐村三寶院
成覺寺	淨土宗名越派	阿彌陀如來	新寺小路	中本山　弊城國檜葉郡折木村成德寺
愚鈍院	同	同	同	同
善導寺	同	同	同	本山　京都府下京區新橋通り大和大路東入三丁目林下町智恩院
正雲寺	同	同	同	中本山　弊城國弊前郡山崎村專稱寺
大德寺	同	同	同	中本山　弊城國檜葉郡折木村成德寺
生因寺	同	同	同	小本寺　新寺小路愚鈍院
林香院	曹洞宗通幻派	釋迦如來	同	弊城國東白河郡富岡村龍泰寺末
東秀院	同　太源派	同	同	弊城國刈田郡平澤村保昌寺末
大林寺	同	同	同	北山輪王寺末
妙心院	同	勢至觀音	同	連坊小路松音寺末
林松院	同	釋迦如來	同	同
洞林寺	同	正觀世音	同	新寺小路妙心院末
正樂寺	眞宗東派	阿彌陀如來	同	本山　山城國愛宕郡下京常葉町東本願寺
道仁寺	同	同	同	同
應瑞寺	同	同	同	同
阿彌陀寺	時宗遊行派	同	同	本山　相模國鎌倉郡藤澤驛清淨光院
滿願寺	天台宗	同	元寺小路	總本山　近江國滋賀郡坂本村延曆寺
光圓寺	同	地藏菩薩	同	同

正眼寺　臨濟宗五山派　觀音堤町　本山　山城國紀伊郡下京本町東福寺
紹明寺　同　觀音菩薩　同　通町光明寺末
日淨寺　日蓮宗奥門派　十界觀請板曼荼羅　同　本山　山城國愛宕郡法皇寺村要法寺
禪光寺　天台宗　地藏菩薩　北二番町　北六番丁仙岳院末
仙岳院　同　釋迦如來（文殊菩薩・普賢菩薩）　北六番丁　總本山　近江國滋賀郡坂本村延曆寺
延壽院　同　彌陀如來　同　北六番丁仙岳院末
林宅寺　眞宗東派　阿彌陀佛　同　本山　山城國愛宕郡下京當葉町東本願寺
滿勝寺　臨濟宗五山派　觀音菩薩　北八番丁　本山　山城國紀伊郡下京本町東福寺
江巖寺　曹洞宗太源派　不動尊　同　北山輪王寺末
全玖院　同　釋迦牟尼佛　同　同
龍雲院　同　同　同　同
東昌寺　臨濟宗五山派　釋迦如來　通丁　本山　山城國紀伊郡下京本町東福寺
光明寺　同　千手觀音菩薩　同　同
玄光庵　曹洞宗明峰派　釋迦如來　同　新寺小路龍泉院末
大法寺　淨土宗名越派　阿彌陀如來　北山丁　下野國芳賀郡大澤村圓通寺末
稱安寺　同　同　同　中本山　磐城國磐前郡山崎村專稱寺
覺範寺　臨濟宗妙心寺派　觀世音菩薩　同　本山　山城國葛野郡花園村妙心寺
資福寺　同　同　同　同

輪王寺　曹洞宗太源派　釋迦牟尼如來　同　越後國岩船郡耕雲寺末
秀林寺　同　同　同　北山輪王寺末
恩慶寺　眞宗本願寺派　阿彌陀佛　支倉通　本山　山城國下京門前町本願寺
充國寺　淨土宗名越派　阿彌陀如來　新坂通　新寺小路成覺寺末
昌繁寺　同　同　同　磐城國磐前郡山崎村專稱寺末
大源寺　同　同　同　同
正圓寺　同　同　同　同
寶泉寺　同　阿彌陀佛　同　同
莊嚴寺　同　同　同　中本山　磐城國楢葉郡折木村成德寺
永昌寺　曹洞宗太源派　千手觀音菩薩　同　北山町輪王寺末
稱念寺　眞宗本願寺派　阿彌陀佛　同　本山　山城國愛宕郡下京門前町本願寺
稱覺寺　同　同　同　同
超光寺　同　同　同　同
彌勒院　眞言宗知山派　不動尊　十二軒丁　總本山　山城國愛宕郡下京東瓦町智積院
壽德寺　曹洞宗太源派　釋迦牟尼佛　半子町　連坊小路松音寺末
寬行院　天台宗寺門派　不動明王　八幡町　本山　近江國滋賀郡別所村圓城寺
來迎寺　淨土宗名越派　阿彌陀如來　瀧前丁　新坂通昌繁寺末
青山院　眞言宗醍醐派　十一面觀音　元材木丁　本山　山城國宇治郡醍醐村三寶院
瑞鳳寺　臨濟宗妙心寺派　觀世音菩薩　越路　本山　山城國葛野郡花園村妙心寺

雄心院	同	釋迦牟尼佛	同	瑞鳳寺末
大滿寺	曹洞宗明峰派	虛空藏菩薩	同	新寺小路龍泉寺末
長德寺	同　通幻派	華嚴說相釋迦牟尼佛	同	岩代國岩瀨郡須賀川村長祿寺末
龍寶寺	眞言宗御室派	本尊釋迦如來 脇土文殊菩薩 普賢菩薩	坊主町	京都府葛野郡花園村大字御室大本山仁和寺末
善入院	天台寺	阿彌陀如來	土樋	本寺報恩寺末
常藏院	天台宗寺門派	聖觀世音	長町北町	總本山　近江國滋賀郡別所村圓城寺
瀧澤寺	曹洞宗明峯寺	十一面觀世音菩薩	同　砂押	仙臺宮澤宗禪寺末
福聚院	同	十一面觀世音菩薩	長町福聚院	同
大年寺	黃檗宗萬壽下	釋迦牟尼佛	同　茂ヶ崎	本山　山城國宇治郡五ヶ庄村萬福寺
宗禪寺	曹洞宗明峯派	同	長　町	七北田村洞雲寺末
國分尼寺	同	正觀音大士	原町南目新屋敷	新寺小路龍泉寺末
陽雲寺	同	藥師如來	同　宇町	木ノ下尼寺末
大蓮寺	同	五智如來	同小田原案內	北山輪王寺末
萬壽寺	黃檗宗萬壽下	釋迦如來	同　高松	總本山　山城國宇治郡五ヶ莊村萬福寺
金昌寺	曹洞宗	同	西多賀富田	岩代國白河郡白河村長樂寺末
成就院	同	藥師如來	同	仙臺宮澤宗禪寺末
鈎取寺	同	同	同　鈎取	北山輪王寺末
耕田寺	同	地藏尊	同	同
大谷派東北別院	眞宗大谷派	阿彌陀如來	東三番丁	京都市下京區東六條大谷派本願寺(東本願寺)別院

附記　舊藩當時に於ける寺格を擧ぐれば

△一門格

天台宗　仙岳院

眞言宗	龍寶寺、定禪寺(定禪寺通現在廢寺)、千手院(龜岡現在廢寺)、法蓮寺	
臨濟宗	覺範寺、保春院、瑞鳳寺、東昌寺、光明寺、滿勝寺、瑞巖寺(松島)、湯德院(松島)	
曹洞宗	輪王寺	
黃檗宗	大年寺、萬壽寺	
日蓮宗	孝勝寺	

△盃返上の格

眞言宗	國分寺
臨濟宗	資福寺
曹洞宗	松音寺

△着座格

眞言宗	遍照寺、寶光院(元寺小路現今廢寺)、國分寺別當坊、國分寺院主
淨土宗	善導寺、成覺寺、愚鈍院
曹洞宗	昌傳庵、泰心院、裁松院、江巖寺、保壽寺、大林寺、妙心院、林香院、宗禪寺、大滿寺、光壽院、大安寺、圓福寺
淨土眞宗	正樂寺、東漸寺
日蓮宗	佛眼寺
時宗	阿彌陀寺、眞福寺

△召出格

天台宗　滿願寺、光圓寺、誓願寺（根岸現今廢寺）、安樂寺（元寺小路現今廢寺）
眞言宗　大聖寺、寂光寺（北山現今廢寺）、藥本寺（北六番丁現今廢寺）、滿福寺
淨土宗　大德寺、大願寺、稱安寺、莊嚴寺、充國寺、昌繁寺、慈恩寺、正圓寺、正雲寺
臨濟宗　定光寺
曹洞宗　瑞雲寺、永昌寺、壽德寺
淨土眞宗　稱念寺
日蓮宗　法運寺

五、宗教會堂所在

名稱	宗教ノ名稱	所在地
日本基督教會荒町講義所	日本基督教會	南鍛冶町
日本メソヂスト仙臺教會	日本メソヂスト教會	東二番丁
仙臺聖公會	日本聖公會	元鍛冶町
仙臺日本基督教會	日本基督教會	東二番丁
同上	バプテスト教會	北一番丁
福音正堂	ハリスト正教會	東二番丁
東六番丁日本基督教會	日本基督教會	東六番丁
北四番丁日本基督教傳導教會	同上	外記丁通

クリスチヤン教會	基督教クリスチヤン教會	二十人町
元寺小路天主堂	天主公教	元寺小路
救世軍仙臺小隊	救世軍	本荒町
角五郎丁天主公教會	天主公教	角五郎丁
仙臺基督教會	基督教會	外記丁
仙臺組合教會	基督教日本組合基督教會	東三番丁
仙臺ホーリネス教會	東洋宣教會仙臺ホーリネス教會	外記丁
仙臺疊屋丁天主公教會	天主公教	疊屋丁
仙臺北星教會	日本バプテスト派	北三番丁
日本基督教會長町講義所	日本基督教會	長町
救世軍第二小隊	救世軍	南材木町
天理教仙臺布教所	天理教	東四番丁

六、官公衙學校其ノ他

名稱	位置	建築樣式	名稱	位置	建築樣式
宮城縣廳	勾當臺通	コンクリート造	仙臺鑛山監督局	東三番丁	木造
仙臺市役所	表小路	同	仙臺商業會議所	東二番丁	準耐火造
宮城縣商品陳列所	勾當臺通	木造	仙臺稅務監督局	北一番丁	木造
宮城縣圖書館	定禪寺通	木造	仙臺稅務署	同	同

第二師團司令部	川内	木造
歩兵第三旅團司令部	同	同
仙臺聯隊區司令部	川内	木造
仙臺陸軍教導學校	同	同
宮城刑務所	古城	同
內務省仙臺土木出張所	北三番丁	同
仙臺營林署	北六番丁	木造
仙臺遞信局	南町通	同
仙臺貯金支局	東二番丁	同
仙臺郵便局	南町	同
仙臺鐵道船舶郵便局	東二番丁	同
仙臺鐵道局	清水小路	同
歩兵第四聯隊	榴ヶ岡	土藏造
騎兵第二聯隊	宮城野原	木造
野砲兵第二聯隊	川内	同
工兵第二大隊	同	土藏造
輜重兵第二大隊	同	木造
仙臺憲兵隊	東二番丁	土藏造
仙臺憲兵分隊	同	同
仙臺警察署	東三番丁	鐵筋混凝土造
宮城控訴院	片平丁	同
仙臺地方裁判所	同	同
仙臺區裁判所	同	同
仙臺停車場	裏五番丁	木造
仙臺運輸事務所	東五番丁	同
仙臺保線事務所	同	同
仙臺地方專賣局	清水小路	木造
仙臺衞戍病院	定禪寺通	同
石卷測候所仙臺出張所	榴ヶ岡	同
工藝指導所	二十人町通	同
長町停車場	長町	同
北仙臺驛	堤通	同
東仙臺驛	原町案內	同
仙臺放送局	北一番丁	同
仙臺偕行社	本柳町	同
赤十字社宮城支部	北一番丁	同
東北帝國大學金屬材料研究所	片平町	鐵筋混凝土造
	同	同

帝國大學附屬醫院	北四番丁	木造
向山觀測所	越路	コンクリート造
仙臺供託局	片平町	煉瓦造
宮城縣農產物檢査所	表小路	木造
繭檢定所	長町	同
印刷所	表小路	同
工業試驗場	同	同
宮城縣農會	北一番丁	同
同 產馬組合	同	同
修養學園	越路	同
市立病院	東二番丁	同
小田原病院	北一番丁通	同
仙臺市療養所	西多賀	同
遞信診療所	東二番丁	同
宮城縣教育會	定禪寺通	同
同 神職會	元寺小路	同
仙臺市榴ヶ岡病院	東十番丁	同
同 職業紹介所	北目町	同
仙臺高等工業學校	南六軒町	同
第二高等學校	北六番丁	木造
宮城縣女子專門學校	越路	コンクリート造
同 女子師範學校	中島町	木造
同 師範學校	北六番丁	同
同 第一中學校	元茶畑	同
同 第二中學校	川内	コンクリート造
同 第一高等女學校	元寺小路	木造
同 第二高等女學校	東九番丁	同
同 第三高等女學校	中島町	同
五ツ橋實科高等女學校	五ツ橋通	同
北五番町實科高等女學校	北五番丁	同
宮城縣工業學校	米ヶ袋	同
同 農學校	長町	同
同 盲啞學校	梅田町	同
仙臺工業學校	榴ヶ岡	同
同 商業學校	北三番丁	同
同 工業專修學校	榴ヶ岡	同
同 商業專修學校	北三番丁	同
東北學院高等學部	土樋	煉瓦造

東北高等豫備校　外記町　木造
東北中學校　向小田原　同
育英中學校　外記丁　同
學院中學部　東二番丁　煉瓦
梅檀中學　荒巻　コンクリート造
宮城女學校　東二番丁　煉瓦造
尙絅女學校　中島町　木造
吉田女學校　原ノ町　同
仙臺女學校　花京院通　同
常盤木女學校　元柳町　同
仙臺市荒町尋常小學校　荒町　同
同五ツ橋高等小學校　五ツ橋　同
同片平町尋常小學校　片平町　同
同上杉山通尋常小學校　上杉山通　同
同北五番丁高等小學校　北五番丁　同
同木町通尋常小學校　木町通　同
同立町尋常小學校　本柳町　同
同榴ヶ岡尋常小學校　東九番丁　同
同通町尋常小學校　北八番丁　同
同長町尋常高等小學校　長町　木造
同西多賀尋常高等小學校　鈎取　同
同八幡尋常小學校　土橋通　同
同原町尋常小學校　原町　同
同東二番丁尋常小學校　東二番丁　同
同東六番丁尋常小學校　東六番丁　同
同南小泉尋常小學校　南小泉　同
同南材木町尋常小學校　南材木町　同
同宮城野高等小學校　二十人町　同
同連坊小路尋常小學校　連坊小路　同
東北女子職業學校　清水小路　同
朴澤松操學校　本荒町　同
簡易保險健康相談所　清水小路　同
遞信講習所　靈屋下　同
河北新報社　東三番丁　同
仙臺日日新聞社　多門通　同
東華新聞社　元常盤町　同
大仙臺新聞社　定禪寺橋丁　同
東北產業日報社　東四番丁　同

第十節　任務以外の奉仕

大正七年八月米價の暴騰による騷擾は燎原の凱を以て、全國各地に蔓延し範圍益々擴大して殆んど底止するところを知らず爲めに當局の之れが警戒を怠らざりしが果然八月十四日不穩文書の貼付に其の端を發し遂に市内各所に暴行脅迫放火の大騷擾を現出するに至り我が消防組は逸早くも非常召集に應じ其の部署に就き警察官と必死的の活動を爲し遂に軍隊の出動に依り漸く鎭靜するに至れり尙左に當時に於ける光景を記さん。

○仙臺未然の大騷擾

放火、脅迫、暴行遂に軍隊出動す

宛然無人の境を行くが如く大集團市内各所を横行す

△果然暴動爆發、米商に値下强要

白米二十錢賣を約せしむ富豪と金貸を襲擊暴行

八月十四日夕刻仙臺停車場附近に不穩なる意味の貼札をなせる者ある由風說せられ市中何となく不穩の空氣漂ひ初めたる爲めその筋にて嚴重警戒に着手し翌十五日朝に至り再び前に同樣の貼札所々に現れたりと傳へられ益形勢穩か

ならざる狀態に進みたるが當日は盆火のため市内到る所群衆に賑ひ

△西公園　に三三五五相集ひたる人々、盆火の終りし午後九時過ぎ約五十名程の一團となりたる時、一人の壯漢突如として現れ生活問題に關する演說を始め群集また之に和し盛んに拍手を浴びせかけ見る〳〵間に四百名餘の一團となりたるが斯くと急報に接したる仙臺署の角袖巡査連はスワ事と西公園指して驅け着けたる時には群集は既に「行け〳〵」の聲と共に

△肴町を一直線に進み同町の米穀小賣商を襲擊して米の値下げを强要し各商店共即時この强要に應じ一升廿五錢に値下げの約束をなしこの旨店頭に貼札せるを以て一同萬歲を三唱しその勢を以て新國丁より東一番丁に出で通行中なる彌次を加へ夥しき群勢となりて大町四丁目より東行し佐々重商店に殺到して此處にても亦

△一升廿錢　に値下げの承諾を得萬歲を叫んで名掛丁に直進し福田商店を襲ひたるが巡査憲兵等の保護あり直に裏五番丁より東五番丁に進み福田商會出張所姉齒米穀商店宮城倉庫に殺到萬歲々々の鯨波を作つて日吉町より元寺小路に出で奥田米店に殺到し値下を契約しそれより米穀取引所を襲ひ硝子窓等を破壞し此處にて分派せる模樣あり。

△一團は　大佛前萱場米商に到り例の如く値下を承諾せしめ同心町通りへ出で小商店を襲ひ車通り元寺小路を通過して鐵砲町に出で金貸業吉田つぎ氏邸に殺到せる時宮城野原に集合せる他の一團と合して米價調節費として三萬圓を寄附せよと强要し又は門に登りて演說する等却々の騷ぎなりしが宮城野原組は强硬派とも目すべき一派とて猛勢偖々募りたり先の一派は同所より引返して東六番丁を經て宮町に出で常盤町。

△遊廓に殺到　し再び分派を糾合して北五番丁なる素封家伊澤平左衞門氏邸に到りたるに壯漢續々同店酒賣場に入りて酒を呷り氣勢を添へたるも群集の中より「亂暴するな呑み逃げするな」との聲湧き壯漢等は酒代を支拂ひ萬歲を唱へて引き揚げ「米は二十錢になつたぞ」と叫びつゝ北鍛冶町に拔け齋喜早坂等の

△米商を襲ひ　て何れも二十錢値下を契約し二日町に進み辰巳商店に殺到して例の如く强要し國分町仙臺警察署前に差蒐りたる時主魁らしきもの警官の爲め拉致されんとせるに會せる群集は之を取戻さんと叫びて不穩の形勢を示したる爲め警官も取返へしの求めに應じたれば群集はその儘一直線に南進し芭蕉の辻に到り此處にて

「明日は南方を襲ふべく集會所は西公園と荒町畑沙門天祠なり時刻は午後七時」

と叫ぶ者あり萬歲を三唱して解散せるは午後十二時頃なりこれより前八幡町方面の一派と目すべき連中が

△伊勢堂山　に集合せりとの說あり又東三番丁本願寺にも同樣の一團ありし由なるが伊勢堂一派は八幡町天江勘兵衞丸屋酒店に殺到し天江方より一千圓、丸屋方より五千圓を救濟費として提供する事を契約し凱歌を擧げて更に新坂通り素封家細谷德次氏邸を襲ひ約千五百名の群集同邸内に侵入し戶障子等手當り次第に破壞し主人に强談して

△二萬圓　と在庫米を十八錢にて全部提供する事を契約せしめそれより北一番丁山田久右衞門氏邸に到り石を投げ門を破る等の狼籍を演じ一萬圓提供を强要して承諾を得たるがこの騷擾を早くも聞知せる北三番丁瀨戶新三郎氏邸にては開門して三萬圓提供の貼札を掲げ居たる所へ例の一團殺到せるもこの貼札を見て凱歌を擧げたり此の時一方本願寺に集合せる一派は米のみの値下にては生活の安定を得る能はず須らく

△味噌醬油　の値下をも計らざるべからずとて二日町荒井商店に到り味噌一貫目四十錢醬油一升三十錢にて賣却の承諾を得これより北鍛冶町酒店伊澤平太郎氏店を襲ひ酒の値下を求めんと叫ぶ者ありたるも酒は贅澤品なればそれに及ばずと唱ふる者あり强要を中止し左らば伊澤平左衞門氏邸に殺到すべしと叫ぶ者現れたるも午前二時なりしかば警官隊は徐ろに解散を勸告せるためこれに應じて無事解散せり。

△宮城野原　の一團は前記數ヶ所を歷襲せる後商業會議所會頭八木久兵衞氏の田町なる本邸を襲ひ米庫を開放せよと迫りたるに「一粒もなし」と答へたるものあり群衆殺氣立ちたるが同店の小僧が恐怖の餘り「米は御座います」と

答へだるため欺かれたるを憤激せる一團の或者は「吾曹は天誅組なり」など豪語しつゝ遂に鐵拳を見舞ひ明日

△再び殺到　して別に在庫米を調ぶべしとて戸障子窓硝子等を破壞して引揚げ南町若生金物店に到りたる時同店は戸を固く鎖して開かざるため忽ちこれを破壞し硝子窓等を破り漸く同店の開戸せるより侵入して寄附金を强要し三百圓提供の契約をなして引揚げ第八銀行を襲ふべしと叫ぶ聲に一同は國分町方面に進みたるが

△亂暴の餘勢　が遂に丸善書店の窓硝子二枚を滅茶々々にし此處にて解散せり荒町北西に亘り約十三組の團結ありしものゝ如く彌次を合せ殺到の流れ約二萬と號されたり。

警察當局は出來得る限り穩かなる鎭撫策を取るの態度に出でたる爲め意外に附帶事故尠く二十名を檢束處分に行ひ十六日帆高檢事取調の上宮城監獄に送致したり。

◇遂に軍隊出動市内漸く物々し

十五日夜の情勢に鑑がみ濱田知事は河内師團長に對して軍隊の出動を要求し王城寺原の演習より歸營したる許りの歩兵第四聯隊及び騎兵隊等より夫れ〴〵軍隊を出動することゝなり西公園その他要所々々を警戒し銃劍を閃かして市内を警羅する光景實に凄慘を極め群集亦漸く興奮の色あり。

◇約束履行を迫る

米商及び富豪を襲ひ値下と寄附を强要す

▽西公園に集れる一團

十五日夜の示威運動にて荒町以北の米穀商に米價引下を强要したる群集は十六日夜再び西公園の馬像附近に參集し白米一升二十錢にて販賣を承諾したるに拘らず該米は賣切れたりと稱して拒絶し或は外國米を販賣せるは

△市民を欺滿　したるものなれば大いに懲戒せよと煽動的の演說をなしたるより群衆は附和雷同し、ヤレ〴〵と騷ぎ形勢刻々不穩となりしかば栗野警部補の指揮する警官隊は一齊に解散を命じたり、されど群集は立町小學校を中心に三四團となり恰も蜂の巢の破れし時の如く、ワア〴〵と喊聲凄まじく警官隊と對抗して容易に退散せず本柳町派出所に檢束中の

△壯漢二名　を解放せよと迫り投石する者あり、結局壯漢を放還せるより約三百名の群衆は看町立町邊の米穀商に契約を履行せよと迫り是より金貸連を訪問すべしとて本櫓丁金貸山下平吉氏邸に殺到し主人に面會を求め細民救濟費として五千圓を市へ寄附せよと强要し主人が之を承諾するや群衆は萬歳を連呼し次ぎに同丁金貸太田可一氏に對しても同樣五千圓を寄附せしめ承諾證を握り立町の工藤へ行けと叫び繰出さんとする際、何者か吉田由右衞門氏の家が火事だ、ナニ放火だ……と物凄き叫び聲に流石の

△群衆も火事　に氣を奪はれ過半は鐵砲町方面に疾走せるも主謀者らしき快漢は虎屋横丁より東二番丁に出で五ツ橋通附近なる勝山質屋阪病院等へ殺到して寄附金を强要しその間何者か小塚病院の裏手に放火せるを女中が發見し消止たる由なる漸次勢力を得たる同組は再び紅久本店に闖入し「今夜はどんなに遲くなつても立ち寄るから戸締をしてはならぬ……と

△脅迫し　其儘立ち去り荒町毘沙門天附近に集合せる一團と合併すべく河原町方面に殺到し米穀商其他の富豪に寄附金を强要し折柄の降雨に氣勢を殺がれ何時の間にかバラ〴〵に退散して姿を見せず紅久本店は勿論附近人民は燒打されては大變と恐怖心に驅られつゝ徹宵警戒したるが幸ひ無事なるを得たり。

◇米商破壞

警官隊と軍隊――警戒益々嚴重

鎭火と共に鯨聲を上げて、退去するや元寺小路米穀仲買店を散々に破壞次いで外記丁通り大井一哲氏邸に闖入して同樣の亂暴を働き非常の損害を與へて引揚げ更に仙臺警察署に拘留中の騷擾被告人四十餘名を奪還せんと企てしも警戒嚴重のため目的を達す能はず是より

△富豪を襲へ　と命令するや國分町松本酒店より一萬圓、菅原酒店より一千五百圓清酒は一升三十錢前田牛肉店より一百圓、坂垣商店にて薪炭は時價の半額、東二番丁岩久酒店より五千圓、新傳馬町谷井文藏氏より一萬圓と白米百石、名掛丁淺見酒店は電氣正宗一升三十錢、ビール一本十錢にて寄附及販賣に應ずる旨を强要し名掛丁

△福田商會　は三度襲擊され金五千圓鐵砲町山田米屋より一萬圓、原町佐々木德之助氏より一萬圓寄附することを强要し引返して大町五丁目佐々重商店及大町四丁目藤崎呉服店に殺到し同樣强要せんとしたるが吉田家の放火事件米屋の暴行事件等ます〳〵兇暴となりたるより吉村署長は森木村兩警部及び郡部の各警察署より來援せる警官隊並に

△步騎兵隊　にて要所々々を警固し犯人の搜査に努めたり。

◇銃床で打つ

即座に昏倒逮捕さる

大佛前より元寺小路に出でたる約五六十名の群集は向ふ鉢卷に尻端折姿にて三業見番を襲へと叫びつゝ東一番丁見番にて既に「金八百圓寄附」と大書せるビラを揭げしため些か拍子拔け氣味にて暫時見番前に淀みたる時「サア何うしたんだ、何時まで斯うして居るんだ、何處かへ行け」と叫ぶものあり「ぢや南へ下つて岩久へッ」と叫びアワヤ同岩久方へ殺到せんとせる時しも豫て鎭撫のため出動憲兵分隊に屯せる步兵の一隊はスワこそと正門より出で來り、今や岩久商店さして殺到せんとせる群集の前に立塞がり取押へんとせるより群集は一時に周章て蜘蛛の子を散らせし如く逃げ出したが、この時逃げ後れたる一名は兵士の手に又他の一名は銃床にて頭部をイヤといふ程突かれしかばその場に昏倒せるをその儘取押へられたり。

◇軍隊突擊す

群衆雪崩を打つて下る――遠く對峙して毒罵す

▽午後二時半漸く退散

飽くまで兇暴を極めたる群集は警官及び軍隊に反抗妨害し角袖巡査が拘引すれば之れを包圍して奪取し大格鬪は隨所に演ぜられ血を見ざれば止まざるの險惡狀態となりしより着劍せる兵士は遂に群集に向つて突擊を加へたるより群集は雪崩を打つて散亂したるが一名の壯漢は兵士の爲めに銃を以て足を打拂はれ負傷して倒るゝを逮捕せられその他首魁らしきもの數名も捕縛されたり是等群集のために藤崎呉服店の硝子戸は滅茶々々に破壞せられたるが軍隊の銃劍突擊に追ひ散らされたる群集は遠く軍隊と對峙し細民を殺すのか汝等の兩親も高い米を喰つてるぢやないかと罵詈嘲笑を浴ひせ掛くる等殺氣橫溢していふべからざる凄慘の氣に滿ち斯くて十七日午前二時半まで繼續したれど觸らば容赦せぬぞと威嚇されて手出しもならず警官隊も機を見て非常線を張り退散を命じたるより蜘蛛の子の如く四方に散り警察門前の群集は何時の間にか解散し佩劍と靴の音のみ淒々と聞こえ赤煉瓦樓を掠める夜風も血腥く思はれたり

◇市民立退頻々

流言蜚語に人心恟々——軍隊警官警戒物々し

△光景淋しくも物凄し

十六日夜の大騒擾に明けたる十七日は流言蜚語盛んに行はれ市内四十餘ケ所に放火さるべし等の不穩なる風説何處よりともなく傳へられたるため人心恟々として市民は生業に安んじ得ざる狀態に陷り午後に及びて怪説一入激しく元寺小路米穀取引所附近一帶幷びに大佛前より東二番丁憲兵隊附近の住民は宛然轉宅の如き準備をなして女子供を他町に遠ざけたるものあり殷賑の中心なる番街一圓も萬一を慮りて避難の用意をなしたる者多く各演藝場は何れも休業の貼札を掲げ藝妓屋料理屋待合等も多くは夕刻より門を鎖して休業の體にあり國分町も午後六時を過ぎては大商舗の多くは固く表戸を鎖して人聲すら立つるもの尠く常盤町遊廓は今晩襲撃さるべしとの説に早くも警戒して各樓の店頭に掲げある電燈の屋號記入の文字を消し娼妓を一時他に預けたる者多く大門前に大卓子を据ゑて遊廓組合役員二三名詰め居る狀物々しく北東一圓の市民も皆避難準備をなす等全市に悽蒼の氣漂ひ居れるがその筋にても警戒の手配りを一層嚴重ならしめ各町の警火組合或は在郷軍人團等と協力して萬一の火防に備ひ消防組の配置を更に整備したる一方蹶躅ケ岡歩兵第四聯隊より四ケ中隊歩兵第廿九聯隊より二ケ中隊の出動あり武田少佐之れを指揮して各所に配し各街に哨兵を置きて何れも嚴めしき武裝に市民の通行を監視し危險の虞ありと豫測せる場所には着劍の兵四五名を屯せしめ市内の東西南北隈なく劍戟の音を響かしめたるは宛然戒嚴令を布かれたるかの觀あり夜の帷の刻々に垂れ込むるに伴れ鬼氣の一入襲ひ來るが如く午後八時を過ぐる頃西公園に群集ありとか愛宕山に集合せる一團ありなどの風説傳へられ午後九時頃に到りて大町四丁目藤崎呉服店前に約三百の群集騒ぎ立つる樣の形勢を示したるも警戒中なる軍隊の爲

めに解散せしめられ同時に停車場前にも一大集團ありたるが是亦何等不穩の狀なく何時とはなしに解散し午後十二時頃は全市は寧ろ物凄きほど平穩に過ぎたり時に雨雲を誘ふ南風漸く風勢を強め夜氣の頓に凉を加ふるの狀なり。

◇禁足縣令

以上の如く人心甚だしく動搖し、良民堵に安んじて生業に就く能はず戦々恟々たる狀態なる爲め濱田縣知事は縣令第四十一號を以て八月十八日左の禁足令を發布せり。

一、午後十時以後日出前に於て濫りに街路に徘徊停立若くは五人以上連行することを得ず

一、前項に違反したるものは拘留又は科料に處す

一、本令は仙臺市、牡鹿郡石巻町に之を施行す

本令は公布の日より施行す

斯くて一世を驚かしたる米騒動も鎮靜に歸し該縣令は八月廿四日限り廢止せらる。

嘉永年間に謠はれてゐた大津繪

一、闇の夜にジャンとぶつつけ、寝巻で出かける繼もち、蕎の衆はかゝいが八百人大蕎手鍵を打ならべ、半纏すいひにつゝぼ襦袢、さしこの股引で、組子衆は水の手まはして火を消す、大將めいて頭取はざいをふる、中にも引けをとらない纏持や、半事をながめ、半鐘をたたいて、これは〳〵火がかりするのと纏をかついでそのまゝいそいでしめりがね。

一、あすは建て方、地ぎうに木遣蕎のあそびも餘念なく、こりやたが嗣突、ちいさい中でも、人に知られし頭の子、みんなみな〳〵みな來い、梯子はしご乘をしようぞへ、先へ行くのがこの町の組頭あとさがるのは大屋さんに彌次馬向ふ鉢巻で蕎や鍵で打つたぞへ打つたがどうした勝手にしやうキヤリ、よういよいやなへ、揚所に凶事でもないのやよい。

第四章　火災統計

第一目　組員

一　仙臺消防組組織表

區分		組頭	副組頭	部長	係長	班長	小頭	消防手	計	自動車喞筒	蒸汽喞筒	瓦斯輪喞筒	腕用手挽喞筒	水管車	計	備考
常備班	第一班	一	一	一	一	一	四	一六	二一	三	一	一	一	一	三	自動車喞筒種類。カスチウドベーカ。ハドソン。レオー
	第二班	一	一	一	一	一	一	一〇	一二	二	一	一	一	一	二	同ハドソン
	計	一	一	一	一	二	五	二六	三三	五	一	二	一	一	五	
第一部		一	一	一	四	一	二〇	二二〇	二四五	一	二	一	一	一	六	同グラハムブラザー
第二部		一	一	一	一	一	八	九〇	一〇〇	一	一	一	一	一	八	同ダッチブラザー
第三部		一	一	一	二	一	一一	一二六	一四〇	一	一	一	一	一	七	
合計		一	一	三	七	二	四四	四六二	五二〇	七	二	二	二	一	三四	

昭和九年末日現在

二　消防組員年齢別表

組頭	五〇歳以上	四五歳以上	四〇歳以上	三五歳以上	三〇歳以上	二五歳以上	二〇歳以上	一八歳以上	計	平均年齢
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

三　常備班員年齢別表

	五〇歳以上	四五歳以上	四〇歳以上	三五歳以上	三〇歳以上	二五歳以上	二〇歳以上	一八歳以上	計	平均年齢
副組頭	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
部長	二	一	一	一	一	一	一	一	三	一
係長	五	二	二	一	一	一	一	一	一一	一
小頭	一五	六	一一	一一	一一	二	一	一	七	一
消防手	七	二六	六三	一〇二	一一	九七	三二	三	三五	一
計	三一	三五	七四	一一三	一一八	九七	三二	三	五〇三	一

昭和九年末現在

四　消防組員職業別表

區分	五〇歳以上	四五歳以上	四〇歳以上	三五歳以上	三〇歳以上	二五歳以上	二〇歳以上	一八歳以上	計	平均年齢
班長	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
小頭	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一等手	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二等手	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三等手	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	二	二	四	八	七	八	一	一	三二	三六

昭和九年末現在

職業		幹部	消防手	計	幹部	消防手	計	幹部	消防手	計	幹部	消防手	計
農業		一九	一七三	一九二	二	一九	二一	六	五三	五九	一二	一〇一	一一二
內譯	第一部							第二部			第三部		

五 消防組員兵役關係表

昭和九年末現在

區分	既教育者 飛行及氣球兵	鐵道兵	電信兵	戰車兵	自動車手	工長	其他	計	未教育補充兵	合計	海軍關係者	總計
第一部			二				三	三	一九	一	五	一九
第二部							内一〇	内一〇	八	内二一	一	内二一
第三部	一						三五	三五	八	内四四	四	内四四
常備班			一				内一六	内一六	二	内二七	一八	内三七
合計	一		三				内八三六	内八三六	三七	内一一三	六	内一一三

區分	工業	商業	其他	計
	二〇	一七四	四八	四二三
	一九四	四二	四三	四七一
	一八	二	三	二五
	一四二	二八	一七	二〇六
	一六〇	三〇	二〇	二三一
	一	二		九
	一七	五	一六	九一
	一八	七	一六	一〇〇
	一	一	四	一四
	一五	四	六	一二六
	一六	五	七	一四〇

六 消防組員勤續年數表

昭和九年末現在

勤續年數	内 第一部 幹部	内 第一部 消防手	内 第一部 計	内 第二部 幹部	内 第二部 消防手	内 第二部 計	内 第三部 幹部	内 第三部 消防手	内 第三部 計	計 幹部	計 消防手	計 計
十年以上	一五	六三	七八	四	二九	三三	一七	三三	五	一五	六三	七八
二十年以上	三		八	四	六	一〇	一			五	三	八

第二目 火災

一 自大正十四年至昭和九年 月別火災度數表

區分	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
大正十四年	六	四	七	四	二	五	三	一	二	三	三	四	四四
大正十五年 昭和元年	八	八	三	九	四	五	一	一	三	二	二	四	四五
昭和二年	五	六	一五	二	二	五	一	一	一	二	二	七	五七
昭和三年	五	一二	五	四	八	一	一	一	三	一	四	七	四七
昭和四年	八	二	四	五	七	一	一	一	二	四	二	四	四一
昭和五年	一二	五	九	二	六	一	二	一	三	一	四	二	五七
昭和六年	六	六	八	一一	八	一	二	四	一	二	一	一	四八
昭和七年	七	二	九	四	四	一	三	二	一	一	二	三	三九
昭和八年	四	四	八	六	六	一	一	一	一	一	五	一二	五六
昭和九年	一三	九	一一	一二	三	一	四	四	二	五	五	七	七八
計	四七	一四二	一八九	二九	六六	九五	八	三七	四五	一〇	三九	四九	三
三十年以上	一〇	三	一三	八	一	八		二	二	二	一	三	
四十年以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	

二 自大正十四年至昭和九年 火災別原因表

年次	大正十四年	大正十五年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年
竈	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
浴場	二	二	三	一	三	一	三	一	一	二
突煙	一〇	一一	七	一〇	三	二	九	三	一三	一四
暖爐	一	一	一	一	一	一	一	四	一	一
煖爐	一	一	二	一	一	一	四	二	一	一
炬燵火行	四	五	五	七	三	六	四	四	一	八
火鉢	二	二	一	一	三	一	一	二	一	一
取灰	一	一	一	一	四	一	一	一	三	三
殘火不始末	七	六	八	四	五	一三	一六	七	一五	一八
消壺火	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
提灯	一	二	一	一	二	一	一	一	一	一
藥品	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
乾燥場	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
油類	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
電氣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
小兒弄火	二	四	五	三	一	三	三	四	一	一
神佛燈火	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一
焚火	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
煙草吹殼	一	一	四	三	一	一	一	三	五	一
放火	二	三	二	二	三	五	一〇	七	五	一〇
不審火	四	二	二	一	一	一	一	一	一	一
吸入器	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
機械摩擦	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
粗火	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
引火	一	一	一	一	一	一	一	一	三	六
漏電	一	二	二	一	五	二	一	一	二	二
燒釜	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
芋釜	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
焙寸	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
ロソーク	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
其他	一	一	一	一	四	二	一	一	三	一
汽車飛火	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
花火	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
其他	一	一	六	一	一	一	六	一	一	一
過熱	一	一	一	一	二	一	一	一	二	一
フルエム	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一
不明	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一
電氣炬燵	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
計	四四	四五	五七	四七	四一	四八	三七	三九	三六	七八

三 自大正十四年至昭和九年 火災發生時刻表

區分	午前〇時	三	五	八	五	三	二	三	四	五	三
大正十四年	三	三	一	二	一	一	一	一	四	一	一
大正十五年	三	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年	三	六	一	四	二	一	一	一	一	一	一
昭和三年	一	一	三	三	一	三	一	一	一	一	一
昭和四年	一	五	一	一	二	一	一	一	一	一	一
昭和五年	七	二	二	二	三	一	一	一	一	一	一
昭和六年	二	七	一	四	一	四	二	一	五	五	四
昭和七年	一	二	四	一	一	二	四	一	一	四	二
昭和八年	四	四	五	四	三	一	二	五	一	二	二
昭和九年	四	四	四	二	二	二	七	二	五	二	七
計	四	四	五	四	一	三	一	三	一	一	三

區分	午前一時	午前二時	午前三時	午前四時	午前五時	午前六時	午前七時	午前八時	午前九時	午前十時	午前十一時	午後〇時	午後一時	午後二時	午後三時	午後四時	午後五時	午後六時	午後七時
大正十四年	三	五	二	二	一	一	一	一	三	一	三	一	四	一	三	一	一	二	二
大正十五年	三	五	一	一	一	一	一	一	一	一	三	三	四	五	一	二	二	一	一
昭和二年	三	六	一	四	二	一	一	一	二	二	一	二	一	一	三	一	二	三	二
昭和三年	一	四	三	三	一	一	一	一	五	四	一	一	一	三	三	三	三	一	一
昭和四年	一	二	一	一	二	一	一	一	二	一	一	一	一	二	一	一	二	一	一
昭和五年	七	五	二	二	三	一	一	二	二	一	一	一	一	一	一	二	二	二	一
昭和六年	二	一	四	一	四	二	一	五	五	四	一	一	三	二	二	六	一	一	三
昭和七年	一	二	二	四	一	一	一	四	二	一	三	一	一	一	二	二	三	一	一
昭和八年	四	四	五	四	三	一	二	五	一	二	二	一	一	一	二	一	四	四	四
昭和九年	四	三	一	三	二	二	七	二	五	二	七	三	一	一	四	一	二	四	四
計	四	三	一	三	二	二	七	二	五	二	七	三	一	一	四	一	二	四	四

四　自大正十四年至昭和九年　火災損害表

区分	午後八時	午後九時	午後十時	午後十一時	計
	三	一	三	四	四四
	二	二	二	二	四五
	五	二	二	三	五七
	二	一	三	二	四七
	三	四	三	二	四八
	一	三	二	一	五七
	二	二	一	二	三九
	二	二	一	一	五六
	三	九	一	三	七八

区分	年次	大正十四年	同十五年 昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年
火災度数	延焼	三	七	八	五	六	八	五	六	六
	不延焼	三	六	三	八	八	三	五	一〇	一四
	即時消止	二	八	一〇	一七	三	八	二四	六	八
	小火	一八	二四	二六	一七	一五	一〇	一三	一七	一九
	計	四四	四五	五七	四七	四一	四八	五七	三九	四七
火災ニ罹リタル住家	全焼戸数	一八	二六	二四	二一	一九	三	二三	一〇	七八
	全焼七戸ヲ超ル戸数	九	一	二	一一	一〇	一〇	九	一九	一七
	半焼即時消止戸数	九	二	九	六	五	一	一五	三	五
	棟数	一九	一七	三一	二九	二九	二六	三〇	八四	五八
	坪数	四八四	三五六	一、〇四八	五五五	五三〇	四一八	七四五	四三	一、三五四
非住家	全焼戸数	三	五	一	一	六	一	五	七	一四
	全焼七戸ヲ超ル戸数	九	一四	一四	一二	一八	一三	四	二	二九
	半焼即時消止棟数	三	七	五	一一	三	六	八	八	九
	坪数	二〇六	三、〇五〇	一九六	五二五	七三三	二五〇	二五七	二一	七三五
焼失損害概算	不動産	一三二、四八九 円	一六八、六二五	八九、五五四	五五、三二九	七七、八三〇	五三、一八五	五八、九〇八	二三、一七五	一四〇、一三四
	動産	一四二、三八七 円	三七八、七七九	一〇六、四八三	一三〇、四三三	一五七、七九八	九五、七一二	八九、二七五	五七、六八九	三九〇、一九一
	計	二七四、八七六 円	五四七、四〇四	一九六、〇三七	一八五、七六二	二三五、六三八	一四九、八九六	一四八、一八三	八〇、九六四	五三五、九九九
	平均一度當火災損害額	六、二四七 円	一三、一六四	三、一九三	三、八五二	五、七四七	三、一二三	二、六〇〇	二、〇七六	一一、四〇三

五　自大正十四年至昭和九年　火災人畜死傷表

区分	年次	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	計
人 死傷	警察官吏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	消防組員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	其他	—	二	—	—	一	—	一	—	一	—	五
	計	—	二	—	—	一	—	一	—	一	—	五
畜 死傷	警察官吏	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	一
	消防組員	八	八	二	—	—	—	—	—	一五	二	四〇
	其他	五	一	九	二	一	一	一	四	一六	二	七
	計	一三	一	九	二	一	一	二	四	一六	二	四八
	牛	四	一四	一四	一三	七五七	三八	六五七	三六	六四	一四	一六八、七九八
	馬	一	一	六	一	一	一	一	六	一四	一四	二五五、三一一
	羊豚	八	二	七	一	二	一	一	二	八	九	五、一〇六
	計	一三	一四	二七八	二五七	七五五	三八	六五七	三六	六四	一四	一六八、三六六
	牛	一四	一四	二七	二四	七五	三	一六	四	三八	六五七	一四〇、一三四
	馬	一	一	六	一	一	一	一	六	一四	一	二五五、三一一
	羊豚	八	二	七	一	二	一	一	二	八	九	五、一〇六
	計	二七八	二八、二三三	一四〇、一三四	二五五、三一一	一九八、三六六	二、六四五	二、六〇〇	二、〇七六	一一、四〇三	一一、四〇三	五、一〇六

六　自大正十四年至昭和九年　町名別火災發生度數表

町名＼年次	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
東一番丁	一	二			一						一五
東三番丁	一	二	三		一		四		三	二	一五
北一番丁	一		三	三	一	二		一	二	三	一四
國分町	二	一	三		一						一四
元寺小路	三	一	二	四	二	一	二				一四
北六番丁	一	一	二	二	一	二	二	一	一	一	一三
東七番丁		二	一	一	二	二	二	二	一		一一
南町	二	二	二								一〇
名掛丁		二	二								九
北二番丁		二	一	一	一	二				二	九
荒町			一	二	二				二		八
土樋	一		二		一					三	七
八幡町	一		一								七
二日町	一		一		一						七
本柳町	二	一		二							七

町名＼年次	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
看町	一	一	二				四			一	七
東二番丁				二							五
柳町	一			一							五
東八番丁			一		二						六
北鍛冶町		一		二							六
北三番丁			一		一						六
本材木町	一						二				六
東九番丁			二	一							五
北山町		一			二						五
立町			一	二							五
大町一丁目	二										五
二十人町		一			一						五
裏五番丁			一	一							五
片平町					一			二			五
越路										一	五
靈屋下	二										五

町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
北四番丁	一										三
通丁		一									三
東四番丁											三
東五番丁											三
花京院通			一								三
南町通			二								三
新傳馬町				二							四
田町											四
行人塚											四
連坊小路											四
原町南目字町											四
長町											四
新坂通											四
北材木町											四
支倉通											四
堤通											四
荒卷杉添											四
大町三丁目											四

町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
大町五丁目											三
元荒町											三
定禪寺通橋丁											三
北一番丁通	一										三
北二番丁通											三
鐵砲町											三
北目町											三
上染師町											三
南鍛冶町											三
新河原町											三
河原町											三
新寺小路											三
勾當臺通											三
長町北町											三
六十人町											三
山上清水											二

年次 / 町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
土橋通	一										二
角五郎町											二
北七番丁											二
木町末無											二
琵琶首町		一									二
花樗川前丁											二
大町四丁目	二										二
本櫓丁											二
東六番丁											二
東十番丁											二
元鍛冶町		一									二
宮町											二
末無掃部丁			二								二
茂市ケ坂				一							二
中杉山通					一						二
清水小路											二
狐小路		一									二
米ケ袋上丁											二

年次 / 町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
同中坂通			一								二
大窪谷地		一									二
石名坂			二								二
穀丁	一										二
八軒小路											二
南材木町	一										二
新弓ノ町											二
五ツ谷		一			一						二
小田原山本町			一								二
同金剛院丁			一								二
三百人町											二
長町郡山 矢口宅地		一									二
原町苦竹字町											二
同新田											二
長町大道西											二
長町郡山				一							二

年次 / 町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
伊勢堂下											
坊主町											
伊勢堂山											
十二軒丁											
覺性院丁											
石切町											
北五番丁											
北八番町											
北田町											
堤町											
神子町											
川内大工町											
澱橋通											
荒巻龜岡											
大町五丁目新丁											
良覺院丁											
立町通											
上杉山通											

年次 / 町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
杉山通											
二本杉通											
北六軒丁											
新名掛丁											
榴ヶ岡											
柳町通											
空堀丁											
表小路											
外記丁											
大佛前											
同心町仲丁											
同心町											
南光院丁											
伊勢屋横丁											
北目町通											
鐵砲横丁											

町名	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	十ヶ年計
袋町											
米ヶ袋中丁	一										
越路六軒丁											
愛宕山下											
南小泉											
南五十人町		一									
小田原裏山本町											
同車通											
同清水沼通			一								
同弓ノ町				一							
同東丁											
二軒茶屋											
表柴田町											
木ノ下		一									
裏柴田町											
樫木通											
成田町			一								
榮町											
原町小田原											
大梶南											
同中江											
疊屋丁											
五十人町											
南小泉											
桃源院東											
米ヶ袋下丁											
石垣丁											
高松通											
米ヶ袋鍛冶屋前丁											
原町苦竹坂下											
同宮城野											
長町矢口											
荒巻日野中											
長町南町											
長町、郡山町											
長町郡山北目宅地		一									

第三目　器具機械

一　機械喞筒表

區分		名稱	ポンプノ種類	聯製造年月	馬力	放水量	吸口放口徑	價格及車輪數
常備班	第一班	スチュウドベーカ喞筒自動車	タービン	大正十三年十一月	五〇	四〇〇	四吋 1/2	一一、五〇〇圓
		ハドソン喞筒自動車	ローターリー	市原喞筒製作所	四〇	四〇〇	二吋 1/2	一四、七五〇
		同レオー	ローターリー	昭和四年十一月	四〇	四五〇	同	同
		同	ローターリー	日本自動車會社	四五	四五〇	同	同
	第二班	同	ローターリー	同	四〇	四〇〇	同	八、〇〇〇
		同	ローターリー	同三年四月	四〇	四〇〇	同	同
		同ハドソン	ローターリー	日本自動車會社	四〇	四〇〇	同	一一、〇〇〇
		同	ローターリー	大正十三年十月上	四〇	四〇〇	同	同
第一部		蒸汽喞筒	ブランジャー	明治四〇年七月	二〇	二〇〇	三吋 1/2	二、二五〇
		同	同	市原製作所	二〇	二〇〇	二吋 1/2	同二、二五〇
		瓦斯倫喞筒	同	明治四十二年九月	二〇	二〇〇	同	同二、二五〇
		同	同	同	一八	二〇〇	同	三、七五〇
第二部		グラハムブラザー喞筒自動車	タービン	大正八年一月	三〇	三五〇	三吋 1/2	七、六〇〇
		ベルプレス瓦斯倫喞筒	ローターリー	森田製作所	二五	二五〇	二吋 1/2	同三、二〇〇
第三部		ダッチブラザース喞筒自動車	同	昭和三年四月	三〇	三五〇	二吋 1/2	七、六〇〇
		同	同	東京ポンプ會社	二五	二五〇	同	同三、二〇〇
		同	同	大正十一年十二月	二五	二五〇	同	同三、二〇〇
		同	同	鈴木製作所	二五	二五〇	同	同三、二〇〇

第四目　警備費

一　市制施行後ニ於ケル警備費

年度	市費總額	警備費 經常部	臨時部	計	市費總額ニ對スル歩合	人口	戸數	一戸當警備費
	円	円	円	円	厘			厘
明治二十二年度	四三、六二二	一、四〇〇	—	一、四〇〇	三三	八六、三五二	一六、八〇六	一〇八
明治二十三年度	四一、一五六	一、四六四	—	一、四六四	三六	六〇、一五三	一三、六七一	一一五
明治二十四年度	五九、二二九	一、九八〇	—	一、九八〇	三五	五八、六七九	一三、五二五	一五八
明治二十五年度	四七、二七二	一、八八六	—	一、八八六	四〇	五九、九九九	一三、五七一	一五〇
明治二十六年度	四七、〇三三	一、九七三	—	一、九七三	四三	六二、六四六	一三、六三一	一五六
明治二十七年度	四七、五七〇	二、〇一三	—	二、〇一三	四三	六二、〇四〇	一三、四五一	一六二
明治二十八年度	五七、八九六	二、一〇〇	—	二、一〇〇	三八	六三、九五三	一四、一三五	一五五
明治二十九年度	六六、三一六	二、二五五	—	二、二五五	三四	六六、一五九	一四、一六三	一五九
明治三十年度	九九、八九一	二、二九	—	二、二九	三三	七三、七九九	一四、七四一	一五三
明治三十一年度	一一三、八六九	二、二四一	—	二、二四一	二〇	七五、二五六	一四、二九〇	一五六
明治三十二年度	一四〇、三五二	二、七四三	—	二、七四三	一九	七七、五四五	一四、八一七	一八五
明治三十三年度	一三四、一〇三	二、五九六	—	二、五九六	一九	八二、一〇八	一七、五二五	一四八
明治三十四年度	一〇四、二四五	二、八九九	—	二、八九九	一四	八〇、五四七	一七、八三三	一六三
明治三十五年度	一〇〇、二〇〇	二、九一四	—	二、九一四	一五	八三、三四〇	一九、六二一	一四九
明治三十六年度	一二〇、六四九	三、六九八	—	三、六九八	一九	九三、七六六	二一、一八一	一七五
明治三十七年度	一二〇、一九九	三、四六三	一	三、四六三	一七	九三、三三一	二一、一二九	一六四

| 備考 | | |

區分	員組綏一	員備常
運轉手助手(兼)	三等消防手 二等消防手 一等消防手 小頭 保長 部長 副長 組長・頭	運轉手 運搬手 運轉手 運轉手
至自	至自	至自
四三、〇〇、〇〇	二、八七、〇〇、〇〇	四三五五、〇〇、〇〇、〇〇
四、〇〇	一一、三〇	七、〇〇
一、〇〇	一、〇〇	七、〇〇
一、〇〇	一、〇〇	三、〇〇
一、〇〇	一、〇〇	七、〇〇
一、〇〇	一、〇〇	七、〇〇
一、〇〇	一、〇〇	七

二　其ノ他ノ火防用水

堀井八〇一　泉水　二　溜池　二八　河川　七　用水堀　一

記事

水溜及用水堀等ノ著名ナルモノ

一、公會堂噴水池　柳町公會堂構内
一、新常盤丁内池　新常盤丁
一、清水沼　小田原清水沼
一、蓮池寺ノ蓮池　東九番丁
一、五色沼　川内師團司令部前
一、越路下プール　愛宕山下
一、興平沼　向小田原
一、長町西裏養魚池　長町西浦
一、最上染工場池　長町
一、宮城製紙會社池　長町東裏
一、長町消防用池　長町西浦
一、原町用水池　長町東裏
一、四谷堰　市西北方ヨリ中央ヲ經テ東南ニ至ル延長約一里半

一、北六番丁川　市ノ北方ヲ東方ニ流ル延長約一里半
一、六郷川　市ノ南方廣瀬川ヨリ宮城郡六郷村ニ至ル
一、七郷川　市ノ南方廣瀬川ヨリ南小泉ヲ經テ七郷村ニ至ル
一、梅田川　市ノ北方荒巻ヨリ北方ヲ經テ原町北裏ヲ經七北田川ニ合ス

第五章　參考記錄

一　歷代消防關係當局

明治十二年消防組組織以來の縣、市及び警察署當局の變遷左の如し

任命年月日	知事氏名	任命年月日	知事氏名
明治十一年七月二十五日	縣令　松平正直	明治三十八年十二月十四日	亀井英三郎
同　十九年七月十九日	知事　松平正直	同　四十一年七月二十日	寺田祐之
同　二十四年四月九日	船越衛	大正　二年二月二十八日	森　正隆
同　二十七年一月二十日	勝間田稔	同　三年四月二十八日	俵　孫一
同　三十年四月七日	樺山資雄	同　四年八月十二日	濱田恒之助
同　三十一年六月三日	時任爲基	同　八年四月十八日	森　正隆
同　三十一年七月二十八日	大浦兼武	同　十年五月二十七日	力石雄一郎
同　三十三年八月九日	千頭清臣	同　十三年六月二十四日	上田萬平
同　三十三年一月十九日	高崎親章	同　十五年十二月十八日	牛塚虎太郎
同　三十三年三月十九日	野村政明	昭和　四年十月九日	湯澤三千男
同　三十三年十月三十一日	小野田元熙	同　六年十二月十八日	三邊長治
同　三十五年二月八日	宗像政	同　八年七月二十一日	赤木朝治
同　三十六年一月七日	田邊輝實	同　九年七月十日	半井清

任命年月日	警察部長(警部長)氏名	任命年月日	警察部長(警部長)氏名
明治十五年二月二十二日	警部長　高崎親章	同　八年八月二十一日	藤岡兵一
同　十九年十二月二十五日	菅井誠美	同　九年三月十日	平賀周
同　二十四年四月二日	末弘直方	同　九年九月三十日	佐藤復三
同　二十五年十一月五日	川路利行	同　十年十月七日	中野邦一
同　三十年四月十四日	小川弘水	同　十一年十月十六日	對馬郁之進
同　三十二年四月八日	竹内壽貞	同　十二年八月二十一日	稻葉俊太郎
同　三十三年七月五日	濱田恒之助	同　十三年六月二十八日	村松武美
同　三十五年四月十五日	櫻井高尙	同　十五年九月二十七日	伊賀良一
同　三十六年一月十五日	樋脇盛苗	同　二年五月十七日	中屋重治
同　三十六年七月十六日	明治三十八年四月ヨリ第四部長　白上俊一	同　三年二月二十八日	萬富次郎
同　三十九年七月二十八日	明治四十年七月ヨリ警務長　新妻駒五郎	同　五年八月二十八日	足立收
大正二年六月十三日	大正二年六月ヨリ警察部長　宮崎通之助	同　六年十一月九日	久保田畯
同　三年四月二十八日	富永鴻	同　六年十二月二十四日	三井僥
同　四年十二月十一日	三矢宮松	同　七年六月三十日	鈴木登
同　五年四月二十八日	大塚惟精	同　九年二月十九日	中野與吉郎
同　七年一月十四日	齋藤宗宣	同　十年一月十九日	纐纈彌三

（區）市長

就職年月		
明治十一年十月	區長	松倉恂
同 十七年十二月	同	小笠原幹
同 十九年八月	同	十文字信介
同 二十二年五月	市長	遠藤庸治
同 三十一年四月	同	里見良顯
同 三十六年四月	同	早川智寛
同 四十年七月	同	和達孚嘉
同 四十三年七月	同	遠藤庸治
大正 四年五月	同	山田揆一
同 八年七月	同	鹿又武三郎
昭和 二年八月	同	山口龍之助
同 四年九月	同	澁谷德三郎

就職年月 詳 不 市消防係 書記

同	同	伊東俊平
同	同	遠藤文治郎
同	同	山内省一郎
大正十四年二月	同	橋浦兵作

任命年月 詳 不 警部 署長

明治十一年十一月	警部	大橋清寛
同 十五年十月	同	井上穆
同 十六年一月	同	磯部亮通
同 十六年一月	同	河瀬秀多
同 十七年一月	同	樋脇盛苗
同 四月	同	市村敏郎
同 五月	同	河瀬秀多
同 二十一年四月	同	樋脇盛苗
同 二十三年九月	同	堀眞敎
同 二十年六月	同	有馬軍治
同 二十八年六月	同	黑田良正
同 二十九年七月	同	濱田盛禎
同 三十一年五月	同	尾崎給
同 三十一年十二月	警視	黑田良正
同 四十三年四月	同	戸田元太郎
	同	園田金之

任命年月 詳 不 署長

大正 二年六月	心得警部	戸村宇多吉
同	警視	内田左平
同 三年十月	同	北田輝
同 五年五月	同	内田左平
同 六年十月	心得警部	森直治郎
同	警視	吉村十七夜月
同 八年十二月	同	下山鑛之助
同 十年六月	同	須内丙子郎
同 十二年二月	同	小野寺有一
同 十三年十月	同	中濱俊一郎
昭和 二年七月	同	澤田惣之助
同	同	百鳥喜一
同 四年二月	同	山本寛一
同 七年一月	同	森治三郎
同 九年八月	同	阿部三右衛門

任命年月 詳 不 消防主任

	巡査部長	東海林昌義
	同	粟野宗賓
	警部補	梶原正雄
	同	菅原泰輔
	同	菅原榮之助
	同	阿部三右衛門
	同	佐々木惣五郎
	同	畠山榮之亟
	同	舘山千治
	同	鈴木義助
	同	齋藤文二良
	同	及川健男
昭和三年五月	同	石垣董
同 三年八月	同	湯山市平
同 七年一月	同	警部補 遠藤末吉
同 七年十月	警部	是川雄三郎
同 九年四月	同	中村千代雄
同 年八月		

任命年月		消防係長
昭和九年四月		巡査部長 小林喜代美

任命年月		消防特務
不詳	巡査	松原弘
同	同	五十嵐善雄
同	同	齋藤雄三郎
同	同	伊藤捨次郎
同	同	佐藤松策
同	同	舘山千治
同	同	川名靜
同	同	五十嵐善雄
同	同	三浦軍記
昭和七年十月	同	佐藤小次郎
昭和九年四月	同	大泉今朝之亟

一 纏 考

まとゐは的率の訛か、軍陣にて將帥の馬側に樹てて其所存の標とする具にて、竿頭に種々の飾を付け、其下に馬簾を垂れたるものなり、甲陽軍鑑五河越夜軍の條に、北條氏康の臣大道寺が敵の差物を奪ひて已の標とせしを纏の始とすと見えたり、其後武田信玄大小の二品を製して大纏、小纏といひ、以て軍陣の重器となせり、要するに馬標と一物にして名を異にせるのみ、一説に馬標を武田家にて纏と稱へたるものなりとも云ふ而して後世これを消防に用ふるに至りたるは、萬治年間旗本内藤甚之丞、元寄合御持頭秋山十衛門が火事場に旗印なきを不便とし、初めて六尺柄の突端に釣の手をつけこれに濡れ筵を下け纏のぼり合印と稱して用ひたり、後御牢奉行石出帶刀捧の突端に球二つをかけ比翼の纏と稱し、後大岡越前守の時改正せられ今日に至るも重用せらる

三 舊幕時代火災法令

イ、出火に關する諸令達

享保九年甲辰正月幕令

一當番詰番之節火事有レ之自分宅如何と存候砌は御城へ不レ及レ被二罷出一候御番之儀者同役へ申遣致二在宅一防可レ被レ申事

一當番詰番に而御城に被二罷在一候内居宅氣遣成火事には同役之内被二罷出一候而當番詰番は歸候樣可レ被レ致候就レ夫何方筋之火事同役之内誰々宅如何候間其面々御番之節者罷出代り候との儀相極兼而申合可レ被レ置事

一寄場へ出候程之火事之節者寄場より直に被二罷出一御番之面々と代り積に被二極置可一レ然事

右之通可レ被二相觸一候事

同　二年二月幕令

一火事之節瓦屋根へは人數上げ防候事無用之筈に候火移可レ申所を下に而隨分爲レ防可レ被レ申儀に候若屋根へ火移候は〻早速人數上被二消留一候事肝要に候旨左之面々家來へ急二急度一通達可レ有レ之候

火之番　所々火消

一火事之節御城へ出仕日之當番早速可二罷出一候萬一急火に見得者當番非番之無レ構出仕御城風能候ても大火又は遠方に而も風惡舗候得者見合可二罷出一候其節者裏付上下又常羽織袴に而火事羽織可レ爲レ持候供之者同斷

一火事之節大手下乘出番所迄罷越候而老中方差圖次第出仕差圖無レ之候は〻待合申候事夜中も同斷

一大火事御機嫌伺使者革羽織裾細着用之事（裾細は踏込なり）

享保三年戊戌十一月二十一日幕令

前々も被二仰出一候通若出火之節者屋舗廻二三町之間者人數差出小火之内に消候樣可致候居屋敷に不レ限中屋敷下屋敷に而も家來差置候面々者家來差出可レ申候尤人數小勢之分者不レ苦候條隨分早く驅付候樣兼々急度可二申付一候人數差出候は〻其場所に而御目付御使番之内へ可二申屆一候自然近所之出火に人數差出候事遲滯候は〻其仔細目付へ可二屆出一候事。

（是即ち三町人數と稱するものにして其人數にて消留めたる所へは何何之守人數消口と六尺の一枚板に筆太に書し屋棟に建るものなり）

一自火急に難レ鎭候は〻早速御用番へ以二使者一唯今私居屋敷より出火仕候先御屆申上候此使者革羽織立付遠慮之

者追而可レ伺事。

享保八年癸卯十二月十二日幕令

中屋舗下屋敷抱屋舗より出火候は〻自今居屋敷内前差扣之儀伺候樣可被レ達レ候

右に付役人差圖左之通

一武士屋敷より出火候は〻差扣之儀七日過御免可二申渡一事

但類火十町餘に候は〻普請は三十日控候樣可レ仕候

一武士屋敷より出火類燒十間程に候は〻類火候共只今迄之通不レ及二遠慮一段差圖可仕事

一居屋敷中屋舗下屋敷抱屋敷共出火候は〻向後右定之通萬石以上以下共一同可二心得一候

旅宿燒失立退候程之節屆出之例

元文五年庚申四月朔日松平肥後守下野國氏家止宿之處夜半失火有レ之不レ殘燒失す、肥後守江戸之方へ向ひ難を避る事五町許阿賀須河岸の米問屋に假泊し其趣御用番へ屆たるものを抄錄す。

當朔日肥後守野州氏家驛に致二止宿一候處本陣より一町半程隔致二出火一及二大火本陣共に不殘致二燒失一候依レ之野州阿久津へ（前に阿賀須とありて玆に阿久津とあり地圖を案するに阿久津は氏家の隣驛絹川の沿岸なり）立退申候召連候人馬共別條無二御座一候此段御屆可二申上一旨申越候　以上

松平肥後守留守居某

四月四日

享保三年戊戌正月十一日幕令

火消增火消共向後火事場二三町脇に而馬より下り可レ申事

同年八月十五日幕令

領分出火之節百軒以下燒失不レ及レ屆但城内又者關所者格別之事

寛保元年辛酉十二月二十八日幕令

火事之節馬上火元見向後無用幷火口へ乘込申間敷且亦大名火消人數所々切候而往來横道之障不二罷成一樣可二心得一候

同日火事場見廻へ渡候書付

火事場に控居候町人足呼寄申間敷候火事場へ參り候人足者遣ひ可レ申候武士方驅付人數者只今迄之通向寄次第呼寄遣可レ申事

同　三年癸亥閏四月十八日幕令

火事裝束美々敷無レ之家來等迄結構無レ之樣且頭巾之綴襲多く目立候樣模樣仕間敷事

延享二年乙丑二月二十一日幕令

火事繁に付屋敷内外廻念入怪敷者捕候はゞ不レ及二屆町奉行へ可二相渡一候捕違之分者不レ苦事

同　年七月十二日幕令

出火之節驅付人數御堀外へは不レ出筈に候御堀外之屋敷より程近く候共堀内へ人數差出不レ申人數揃御目付御使番差圖之時早速可レ出事驅付人數者一曲輪限に相用候事ニ可レ被二心得一候

寶暦二年壬申正月二十九日幕令

近來火事場に見物ヶ間敷者別而多馬上に而も出候樣子に相聞候向後堅可レ爲二無用一候右體之者見請候はゞ其場へ

出候御目付御使番相改姓名承糺申出樣申渡置候事

幕令歳月不詳

屋敷境より出火之節火元之儀早速頭支配へ可二屆出一候大火に相成火元分り兼候はゞ右不レ移二時刻一相屆可申候

正保三年丙戌幕令

火事之節可二見舞一親戚。親子。兄弟。舅。小舅。伯叔父母。甥姪。祖父母。從弟。舅

ロ、出火に付て之處罰

自分宅出火或は類類にて祖父母兩親之内爲二燒死一候得者（遠島は概ね伊豆七島の内へ流さる其送り物は妻子家來の外不二相成一尤米三俵金三兩に限り木綿鹽噌等少々送るは不レ苦ニせり）其他一族爲二燒死一候得者閉門之事尤於二途中一燒死候得者罪一等を減す。

遠慮閉門差控中自宅より出火之節道具一切片付不レ申消亡次第尤家作等不レ殘燒失候共當人立退申間敷家族者前以頭之差圖に隨ひ親類共へ爲二立退一可申事

案ずるに此文に依る時は餘りに苛酷に過ぎたり疑らくは文中脱誤あらん、然るに寶永元年の令閉門逼塞中の條に左の文あり

寶永元年甲申七月八日幕令本多佐渡守渡

一、火事之節屋敷危ニ候はゞ立退其後支配方迄可二申達一候自火は不レ及レ申近所より火事出來候はゞ、屋敷之内火防候儀不レ苦事

閉門中遍塞中共同文遠慮中は同文の内支配方可二申達一候の次に尤無二遠慮一火防可レ申事の九文あり

一、御目見以上は裏付上下着御屆は親類名代尤名代之心得は出火に付當人並家内爲ニ取慎一門前へ罷越控在候處名代之儀相類候に付罷出候ゝ申趣に相認可レ申事

（閉門中故他人の出入不ニ相成一故に此文ありゝ知るべし）

但燒跡へ住居之節者燒殘り古木等を取集孤集張に而床不ニ相成一候

閉門遠慮之者屋敷より出火又は近火にて屋敷危爲ニ立退一候屆の近例

覺

閉門　　小普請組久留島數馬支配　高橋市左衛門

右市左衛門儀先刻小日向茗荷谷より出火屋敷危相見候に付御書院番水野河内守與頭溝口孫左衛門方へ立退可レ申哉之趣申聞候に付其通可レ仕旨申達私家來差添先方迄遣申候依レ之申上候

月　日　　島津式部

右之通鎭火以後登城仕候共御退出に候はゞ御用番御支配方御宅へ罷越可　申上　候妻子之儀者先達而立退候者此段構不レ申候事

四　失火放火に關する刑法沿革

明治元年は兵馬倥偬國事多端なるを以て、未だ新律を定むるに遑あらず、因つて姑く幕府制定の舊律に仍らしむ。但其の中從來放火者に實施せる焚刑は、此の際梟首に換へて施行するこゝゝせり。

三年十二月二十日、始めて新律綱領を發布す。其の雜犯律に失火及び放火の條あり。

失　火

凡火を失して自己の宅舍を燒く者は笞二十。人の宅舍に延燒する者は。笞四十、罪。止た火を失する人を坐す若し太廟及び宮闕内に於て火を失する者は。流三等。山陵の兆域は徒一年。公廨。及び倉庫内は。杖一百。主守の人。因て財物を侵欺する者は贓に計へ監守自資を以て論す、其外に在り。火を失して延燒する者は各三等を減す。其宮殿及び倉庫を守衛し若くは因を掌る者火の起るを見ては所守を離るゝことを得す。違ふ者は杖七十。

放　火

凡火を放て故さらに公廨倉庫。及び民舍を燒く者は皆斬、未だ燒燬に至らざる者は流三等

六年三月三日。第八十三號を以て失火條例を布告せり。凡太廟及び山陵内に於て失火する者。律に依り罪を科するの外宮幣、國幣大社は。山陵と同しく論し。中社は杖一百。小社は杖九十。府縣社は杖七十。鄕社は杖六十。延燒する者は。各本罪に三等を減す。減して人の宅舍を延燒するより輕く若くは等しきは。幷に一等を加ふ。

六月十三日。第二百六號を以て改定律例を布告し。前律を廢止せり。其の中に失火放火の二條例あり左の如し

失火條例

第二百七十三條　凡太廟及び山陵内に於て火を失する者は。律に依り罪を科するの外。官幣、國幣大社は。山陵と同しく論し。中社は懲役百日。小社は懲役九十日。府縣社は懲役七十日。鄕社は懲役六十日。延燒する者は各本罪に三等を減す。減して人る宅舍を延燒するより輕く若くは等しきは。並に一等を加ふ。

第二百七十四條　凡稅居人火を失して其家を燒く者は。自己宅舍を燒くに一等を加ふ。

第二百七十五條　凡火を失して人を燒死に致す者は。死屍の多寡を論せす。一等を加ふ。其同居の祖父母。父母を

燒死に致す者は懲役百日。

第二百七十六條　凡火を失して。人の山林柴草及び空間房屋若くは田場積聚の物を延燒する者は。官私を分たず。人の宅舍に延燒するに一等を減す。

第二百七十九條　凡盜犯火を用ひて。門關戸樞を燒燬し。及び燭炬を持し。期せずして失火に致す者は。懲役三年若し盜罪重きに從つて論す。

放火條例

第二百七十九條　凡火を放て故らに自己の房屋を燒く者は。懲役九十日。未だ燒燬に至らざる者は。一等を減す。若し期せずして公廨倉庫及び民舍を延燒する者は。懲役二年半。因て、財を盜む者は懲役終身。

第二百八十條　凡火を放て人の空間房屋を燒き。期せずして人の宅舍に延燒する者は。懲役十年。

第二百八十一條　凡火を放て人の宅舍を燒き。未だ燒燬に至らざる者。律に照し懲役十年に處する外。若し雇人等家長の督責に苛迫し。一時脫身を圖り。纔に火を放ち未だ燒燬に至らざる者は。情を量て三等を減し。懲役三年

三年八月十二日第二百七十五條を改正して左の如く爲せり凡火を失して人を燒死に致す者は。死屍の多寡を論せず。一等を加ふ。其同居一等親顏の尊長を燒死に致す者は。懲役百日。二等親以下の尊長は。各一等を遞減し。卑幼は各等親に照し。尊長に三等を減し。減して罪致人燒死律より輕き者は減せず。其各居に係る者は。等親尊卑を論せす。幷に致人燒死と罪同。

此法行はるゝこと凡そ七年間にして。明治十三年七月十七日に至り刑法を布告し。同十五年一月一日より施行せり即ち其の第二章第七節に云

放火失火の罪

第四百二條　火を放て人の住居したる家屋を燒燬したる者は。死刑に處す。

第四百三條　火を放て人の住居せさる家屋其他建造物を燒燬したる者は。無期徒刑に處す。

第四百四條　火を放て廢屋及び柴草肥料を貯ふる屋舍を燒燬したる者は。重懲役に處す。

第四百五條　火を放て人を乘載したる般舶汽車を燒燬したる者は死刑に處す。其人を乘載せさる般舶汽車に係る時は。重懲役に處す。

第四百六條　火を放て山林の竹木田野の穀麥。又は露積したる柴草竹木其他の物件を燒燬したる者は。輕懲役に處す

第四百七條　火を放て自己の家屋を燒燬したる者は。二月以上二年以下の重禁錮に處す。

第四百八條　放火の罪を犯し輕罪の刑に處する者は。六月以上二年以下の監視に付す。

第四百九條　火を失して人の家屋財產を燒燬したる者は。二圓以上二十圓以下の罰金に處す。

第四百十條　火藥其他激發す可き物品。又は爆氣幷蒸氣罐を破裂せしめて人の家屋財產を毀壞したる者は。其故意に出るゝ過失とを分ち。放火の例に照して處斷す。

明治三十二年三月七日失火の責任に關する法律の公布あり。即ち民法第七百九條に

故意又は過失に因りて他人の權利を侵害したる者は之に因りて生したる損害を賠償する責に任すとあるも失火の場合には之を適用せず。但し失火者に重大なる過失ありたるときは此の限りにあらずとせり。

明治四十年四月法律第四十五號を以て刑法を改正明治十三年布告刑法は廢止せらる現行放火及失火罪の法律左の如し

第九章　放火及ヒ失火ノ罪

第百八條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ又ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第百九條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス但公共ノ危險ヲ生セサルトキハ之ヲ罰セス

第百十條　火ヲ放チテ前二條ニ記載シタル以外ノ物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百十一條　第百九條第二項又ハ前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ第百八條又ハ第百九條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ前條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百十二條　第百八條及第百九條第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百十三條　第百八條又ハ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

第百十四條　火災ノ際鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若ハ其他ノ方法ヲ以テ鎭火ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百十五條　第百九條第一項及ヒ第百十條第一項ニ記載シタル物自己ノ所有ニ係ルト雖モ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ

又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノヲ燒燬シタルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シタル者ノ例ニ同シ

第百十六條　火ヲ失シテ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ燒燬シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

火ヲ失シテ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

第百十七條　火藥、汽罐其他激發ス可キ物ヲ破裂セシメ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ放火ノ例ニ同シ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

前項ノ行爲過失ニ出テタルトキハ失火ノ例ニ同シ

第百十八條　瓦斯、電氣又ハ蒸汽ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ノ生命、身体又ハ財產ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

瓦斯、電氣又ハ蒸汽ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

五　明治中興消防の先覺者川路大警視の墓表幷碑文

明治中興の初に於て先つ新製の機械を利用し消防隊を組織せる者は實に大警視川路利良君なり、今廣く其の功績を傳へむと欲し左に墓表を掲ぐ

故陸軍少將兼大警視正五位勳二等川路君墓表

編修副長官　從五位重野安繹撰

陸軍少將兼大警視川路君。自明治初任警官。奉命航歐洲。攻究各國警察事例。歸上疏曰。君主獨裁之國不可重君權。欲重君權在於嚴警察。如俄索法三國是也。請倣三國例置警察署於東京。凡京中警察之事其長官掌之。他府縣使知事令兼掌之。朝廷納之。乃置警視廳屬內務省。先是內務省未建設。警保寮於司法省。管國內警察。君援各國之例曰。司法與行政有別。闔國警察非法司之所宜專管。故各國皆有內務省以統府縣警察。至是朝議先置內務省。次及警視廳。君又以謂。邏卒之職平時任警察。臨有事則執戎器以鎭暴亂。故各國多用軍人。然彼無士民之別。故不得不取軍人。我國幸有士族。宜取以充之。人民之損害莫大於火災。故消防爲警察之要務。東京多災。而舊制救火之事委於府司。宜遵各國之例屬之警官。事皆施行。君以明治五年赴歐洲。時爲警保助。及置警視廳。爲其長官。乃廢邏卒番人。增巡查之員。改京中區域排置支署。架電線以通聲息。設消防別隊用唧筒救火。又創設河海警察。於是盜火之害大減。君常憫倒園之傷人命。欲枚厘革其弊。因獄舊屬于府司。迨本廳管之。大更定獄則。盡意看護。宿弊頓革。君嘗建議。訓練巡查以備非常。會佐賀山口諸縣亂作。鎭靖勦捕與有力焉。而最後有鹿兒島之變。君鹿兒島人。世仕薩主爲衛騎。西鄕隆盛甚器重君。戊辰伏見之役君率一隊。戰于竹田有功。旣而隨隆盛東下。收江戶城。君先衆入城。五月攻東叡山。君率兵自三枚橋進破黑門而入。賊潰走。遂與諸將東征。攻關若松。亂平歸藩。陞兵器奉行。後三歲徵拜東京府大屬。累轉權典事。遷邏卒總長。以至航歐洲。皆隆盛所推轂也。及隆盛去政府。君反覆陳說以留之。不聽。乃與內務鄕大久保利通相結納。隆盛與其徒在鹿兒島。君知其終激亂。命部下伺察其動靜。多布耳目。隆盛之徒深惡之。聲言君與利通遣刺客刺隆盛。因擧兵反。十年二月奉命赴西京。拜陸軍少將。爲征討旅團司令長官。帥部下三千西下。轉戰肥薩間。遂入鹿兒島。七月歸東

京。此役君以爲賊所措名。奮戰決鬪大小七十餘合。而奪賊依據。爲陸海將士解圍。其所率部下皆其所嘗訓練者。刀銃并用。精悍無前。敵皆畏之云。以功叙勳二等賜旭日重光章。勳章年金五百圓。十二年奉旨再赴歐洲。更訪求警察事例。船中病發。至法都益劇。十月歸朝。天子使侍臣待醫問疾。遂不起。是月十三日也。葬靑山墓域。天使臨家賜奠帛。又褒其積年勤勞賜祭粢金二千圓。賑恤其家族五千圓。君竭力聯務。夙夜孜孜不休。本廳建設以來。徒居官舍。無時不視事。夜則召集分署長等於廳內。奬勵職事。訓諭懇到。每逐宵分。三年間不曠一夕。僚屬輯錄其語曰警察手眼。性無他嗜好。唯事務修擧爲快樂。其臥病海外。惓惓公事。督勵從行諸員。期以成功勿負使命之任。至病篤不變。平生語人曰。本邦政事比之歐洲。治國無一出其右者爲可慨已。吾願以我警察法超過諸國上。是非甚難事。其自任如此。君身材脩頎。慶顙豐下。鬚髯疎疎。然膽壯氣剛。當事不避嶮艱。接人笑貌溫和。而勇邁之色溢手眉宇。性慈仁憫物。部屬有以職事死傷者歎賞不已。至爲垂泣。揖私財贈遺之吊死者遺族。或建墓碑追悼。遂設吊慰法。凡有死傷者。本廳官吏醵金以吊賻賑恤。著爲例。以故人人致身職務而不畏死。君自少脩文武諸技。受擊劍於長沼某。究其秘奧。從餘及水本成美受經。旁學作詩。殁後檢篋簏得詩稾一卷。中有兵役使命之作。人而未嘗有見君哦詩者。嗣子利恭梓藏于家。命曰龍泉遺稿。龍泉其別號。諱利良。初稱正之進。考諱利愛。母川路氏。娶西氏生一女無子。養五代友政子配以其女。即利恭也。君旣殁。本廳官吏胥謀建石勳君功績。屢文於余。內外官員東京府民及外國人捐貲助之者五千餘人。余乃詮次君之終始盡於職者。表於墓道。明治十五年八月。

太政大臣兼賞勳局總裁脩史館總裁

從一位大勳位三條實美篆額

脩史館監事從五位勳五等巖谷脩書　遠千秋刻

六　火災保險の起源

我が帝國に於ける火災保險の起源は、明治十一年大隈重信氏が參議兼大藏卿たりし頃。政府顧問逸獨人政治學士「バウル、マイエトッ」氏大隈氏に說くに、火災保險事業の我國經濟の振興に必要なるを以てせしかば、大隈侯之を容れ、十二年大藏省に、火災保險取調掛を新設し、侯は自ら委員長となり、諸法案及其他を調査せり、旣にして大隈侯は參議に專任し、佐野大藏卿代りて委員となり、十四年調査結了し、諸法案完成を告げ、太政官に稟議するに至れり。然るに時の參事院は、强制法を不可なりとして、其議を否決し、大隈侯も亦政府を去り。遂に十五年五月太政官は、即今詮議に及び難しと指令し、折角一旦胚胎せし我國の火災保險事業も、玆に至りて全く泡滅の姿となれり、斯くの如くにして一旦は火災保險の創設望み絕えたりしも、當時委員の一人なる元松田東京府知事は尙ほも思念を斯業に絕たず、全國に普及する能はずんば、責めて東京府下に實行せんものをと、屬僚に其取調を命じたりしが、實行期年にして松田氏は不幸にも、泉下の人となる。玆に殆むど斯業の望み絕ゆるに至れり。東京府知事松田道六氏の逝去と共に、氏の庫底に深く藏されたる火災保險に關する調査書類は、偶々氏の眷顧商柳川某に依りて發見せらる。某乃ち松田氏の室と共に首唱して、氏の姻戚元鳥取藩老鵜殿長氏等と謀かり、專ら此書類の設計に基き、民設組織として斯業を經營せむとし、資本金二十萬圓を募り、事務所を京橋區三十間堀に設けて、會社の設立を請願し、遂に明治二十年七月其允可を得て設立せり。即ち我國に於ける火災保險の嚆矢にして、又火災保險事業の開祖なる東京火災保險株式會社にして、最初有限責任東京火災保險會社と稱せしもの是れなり。

東京火災保險株式會社は、以上の如く形體を具へて、社會に現出したるも、其當初に至りては、啻に內部組織の完

備を得ざるのみならず、社會の保險思想亦甚だ幼稚の時に屬し、二十一年十月假開業後も、事業の進步遲々として意の如くならず、爾來幾多の困難に遭遇し、迂餘曲折遂に安田善次郎氏の救濟を仰ぎて大成するに至れり。

明治二十四年二月明治火災保險株式會社開業ありてより、日本火災保險、銅業火災保險、中央保險、內國保險、大阪保險、明敎保險等の數社相次て創立せられ、同業者並駕齊馳するの端を開き爾後二十七八年、三十七八年、戰役及歐洲大戰を畫期とし其間自ら興亡盛衰あり現今四十有餘社の多きに達し國家社會經濟上寄與する處實に大なるものあり

明治三十二年三月七日法律第四十八號を以て、商法を定む、第十章保險の部第二款に火災保險の規定あり即ち左の如し

第四百九十條　火災に因りて生したる損害は、其火災の原因如何を問はす、保險者之を塡補する責に任す、

但第三百九十五條及第三百九十六條の場合は此限にあらす。

（第三百九十五條戰爭其他の變亂に因りて生したる損害は、特約あるにあらされは、保險者之を塡補する責に任せす、第三百九十六條保險の性質の目的若くは瑕疵其自然の消耗、又は保險契約者若しくは被保險者の惡意若くは重大なる過失に因りて生したる損害は、保險者之を塡補する責に任せす）

第四百二十條　消防又は避難に必要なる處分に因り保險の目的に付き生したる損害は保險者之を塡補する責に任す

第四百二十一條　賃借人其他他人の物を保險する者か其支拂ふことあるへき損害賠償の爲め、其物を保險に付したるときは、所有者は保險者に對して、直接に其損害の塡補を請求することを得

第四百二十二條　火災保險證書には、第四百三條第二項に揭けたる事項の外、左の事項を記載することを要す。

一　保險に付したる建物の所在構造及ひ用方、

二　動產を保險に付したるときは、之を納るる建物の所在構造及ひ用方

七　宮城縣消防組幹部氏名

（昭和九年十二月十五日現在）　（順序不同）

宮城縣消防協會　總裁　宮城縣知事　從四位勳四等　半井清
同　會長　宮城縣警察部長　從五位　中野與吉郎
同　副會長　大河原消防組頭　佐藤源十郎
同　副會長　石巻消防組頭　清野源助
同　幹事長　保安課長　野村道夫
同　幹事　消防主任警部　遠藤文次郎
同　幹事　消防係警部補　三浦東左衛門
同　主事　島田淳一
同　書記　消防係巡査部長　松本榮馬

仙臺支部長警視　阿部三右衛門
主任巡査部長　小林喜代美
係巡査　大泉今朝之亟

仙臺消防組
組頭　山口龍之助
副組頭　庄司正
大島榮吉
阿部龜吉
松浦龜吉
鈴木十次郎
吉田勇吉
吉田勇之助
佐藤勝治
小山伊勢治
新田襲治
二階堂宗吉
高橋幸之助
北村仁吉
吉川半二
島岡謙司
田中重太郎
中塚藤三郎
佐藤忠次郎
庄司勇松
齋藤喜平
鈴木熊之進
山岸榮一郎
松平與太郎
今野正吉
堀籠作兵衛
八重樫太吉
佐藤龜三郎

佐藤新吉
森忠四郎
熱海丹次郎
渡邊文吉
紺野久右衛門
熱海貞吉
鳥山正三郎
菊田安兵衛
高橋勇五郎
小松與四郎
小畑勝治
小野平三郎
齋藤耕造
根本平造
渡邊慶藏
木皿松三郎
佐藤孝
相原養作
相澤安三
板橋常吉
安齋今朝之助
川村廣吉
芳賀市太郎
相原房太郎
佐々木文治
庄司利吉
森源之助
庄子善三郎
松浦久治
加藤一丸
河村千吉
結城淺吉
中野藤助
沼田俊三郎
丸山喜平
佐藤清
大泉白藏
庄子喜一郎
三浦和助
大泉藤三郎
庄子彌平治
菅原榮
阿部庄吉
阿部啓五郎
佐藤正治
多田彌五郎
阿部幸一

生出消防組
組頭　山田卯八
副組頭　佐吉惣右衛門
佐藤勇助
佐藤善兵衛
佐藤善藏
佐藤秋保
櫻井馬之亟
根本平造
渡邊慶藏
木皿松三郎
佐藤儀三郎
秋保浩
早坂松藏
太田太郎右衛門
岡崎胞次郎
鈴木善五郎
佐藤秋保
大澤消防組
組頭　庄子利三郎
結城多吉
早坂富藏
早坂健造
佐藤兵之助
石垣伊勢之進
結城陽介
庄子萬太郎
結城龜治
結城幸太郎
庄子吉三郎
七郷消防組
組頭　大泉權太郎
菊地萬吉
副組頭　末永達彌
高橋宗藏
齋藤重右衛門
根白石消防組
組頭　川島富五郎
早坂幸右衛門
鶴田胞吉
早坂長右衛門
熊谷耕太郎
相澤清右衛門
赤間惣太郎
相澤新三郎
早坂喜藏
庄司胞治
庄司忠吉
樋渡善治

七ヶ

組頭 濱消防

星 遠藤 三郎 佐野 小藤 赤間 伊藤 渡邊 阿部 組 綿浦 餘 内藤 餘 餘 長 餘 組 永 荒 關 鎌 相 守
庄 吉 喜 莫 長 喜 庄 茂 利 藏 助 吉 男 門 松 郎 一 藏 治 昇 作 吉 治 助 郎 造 助 郎 門 藏 吉

多賀城組頭 消防

副組頭 組 伊藤 高橋 相澤 阿部 佐々木 伊藤 宮木 阿城 餘部 餘木 組 餘 佐藤 米 相 渡邊 齋 餘 星 太
口 木 作 右衛門 利 運 長四郎 龜 德 庄 眞太郎 總 久 軍 藤 賀 治 龜 消右衛門 已之松 傳 四郎 勘 宰
英 源一郎 治郎 門 衛 作郎 吉 右衛門 藏 郎 治 衛 藤太郎 藏郎 松 門 七郎 郎

利府組頭 消防

吉岡巡査部長 吉岡巡査部長 吉岡巡査部長

青 餘 三 兒 吉 組 及 砥 木 浦 玉 田 阿 小 宮 武 本 渡 伊 安 伊 今 伊 宮 湯 齋 板 板
庄 保 多 金 淵 平 記郎 川 部 野 澤 田 鄕 邊 藤 熱 藤 野 藤 澤 元 藤 橋 橋
治 一郎 治 藏 兵 雄 三郎 男 藏 助 門 雄 夫 助 助 博 也 壽 治 助 助 三 吉

鶴巢組頭 消防

副組頭 組 佐川 佐藤 高橋 伊藤 矢島 庄司 遠藤 小田 氏藤 文 三 渡 餘 相 熊 渡 大 内 組 小 石 新
雄 右衛門 治 藤 右衛門 藤 久左衛門 島 藤 兵 藤 田 市 司 武 藤 運 孝 源 利 藤 平 右衛門 浦 遠 木 澤 谷 遠 友ヶ崎 原 田 美
治 助 吉 郎 次 郎 子 七 止 治 助 子之吉 志 治 助 藏 郎 藏 昇 四郎 助 平

富谷組頭 消防

浦戸組頭 消防

廣瀬組頭 消防

若 鎌 增 石 若 高 馬 組 佐 櫻 石 庄 早 相 庄 加 庄 高 組 石 庄 早 佐 庄
生 田 千 川 生 橋 場 藤 田 垣 千 坂 澤 司 藤 司 橋 川 司 坂 藤 司
久 熊 吉 泰 茂 今朝太郎 利 義 辰 源 丈 四 源 今朝十郎 藤 久之助 興 運 義 長 榮 德
治 之 運 治 藏 郎 藏 藏 郎 郎 郎 治 藏 郎 一 作 郎 五郎 郎 治

鹽釜支部長 鹽釜支部長補

佐藤 阿部 丸一 小松 佐々木 小松 宮 大野 栗 阿部 伊藤 餘 高 餘 兒 龜 組 千 佐藤 鄕 近 田 佐 齋 若
喜 勘 龜 清 德 利 豐 菊 寅 山 四 善 又 文 葉 湖 江 中喜 佐々木 藤 生
助 吉 吉 要 吉 吉 藏 助 助 治 郎 平 治 吉 平 榮 治郎 平 藤 五郎 藏 門 治 藏 作

砂鳥組頭 消防

上戸 石 千 蜂 菊 三 餘 釣 今 石 千 大宮司 組 門 尾 小 餘 設 組 大 櫻 目々 八
總 田 川 巢 谷 也 浦 木 船 野 川 巢 馬 形 野 木 樂 竹 井 澤 島
龜 福 興 義之進 松 郎 菊 善 忠 文 義之進 郎 作郎 吾 治 八 龜 利 惣 三 榮 留 清 準 龜
治郎 松 兵衛 之進 郎 松郎 郎 郎 治 郎 治 郎 治 郎 郎 郎 治 藏 吉 規 吉

高砂組頭 消防

岩切組頭 消防

大 赤 赤 組 伊 福 村 花 佐 福 花 今 田 平 遠 太 渡 佐 小 安 組 渡 本 赤
友 間 頭 藤 來 上 淵 藤 來 淵 野 勞 山 山 田 野 藤 野 達 邊 間 間
庄 深 佐 重左衛門 金 源 喜 胞 源 長 忠 源 久 忠 市 深 勇 末 萬 四 嘉 儀 久 之
太郎 助 吉 門 藏 夫 郎 治 郎 郎 治 衛 作郎 郎 治 藏 吉 郎 吉 郎 郎 郎 歌

宮床消防組

本多二郎　大松澤多幸次郎　高橋　川田　木下幸次郎　石川敏雄　武田　鈴木七郎　日吉正郎　及川吉郎　佐々木藤次郎　武田　石川　加藤　佐藤　平井　武藤　澁谷　丹野　田口　組島　佐藤　早津　櫻井　坂本　若狭衛門　寅蔵　猛　貞次郎　正治　藏夫　源左衛門　庄　卯十郎　傳之亟　彌惣治　若衛門　一佐

増田消防組

副組頭　山田友次郎　大十嵐惣衛門　丸田　高橋　佐藤　渡辺　大友　鈴木　矢内　渡辺　平井　猪俣　金子　齋藤　森　組　松浦　秋山　安部　宮市　佐藤　佐藤　君ケ袋　和多利

愛島消防組

副組頭　大丹治平　渡辺八郎　板橋　宍戸　大友　布田　佐竹　瀬野尾　齋藤　寺田　菊地　庄司　渡辺　齋藤　櫻田　組　齋藤　小島　渡辺　高橋　小林　高　庄子

館腰消防組

副組頭　渡辺　齋藤　櫻田　組　齋藤　小島　渡辺　高橋　小林　高　庄子

上組消防頭

副組頭　相馬引　澁谷　大丹治　引木　三橋　組　宍戸　高橋　都　佐藤　高橋　都　布田　大村　大村　鎌田　組　郷　庄　本

千貫組消防頭

副組頭　澤地　藤原　友野　地　皿　浦　浦　戸　橋　山　藤　橋　築　田　村　村　田　内　司　郷

寅源　栄長　喪　幸四郎　萬　捨　喪三郎　嘉右衛門　直　庄　夫太郎　龜惣　義　謙穩　喜　敬　義　蔓三郎

松吉　治男　吉郎　平松郎　治郎七郎　治吉郎　治　著　司男郎

大谷消防組

副組頭　村櫻　遠佐　小高　櫻　菅　櫻　櫻　組　大庄　平永　大高　千千　佐藤　高文　佐藤　高

山井　藤藤　林橋　井野　井井　畑司　渡井　塩橋　坂坂　藤橋　治　屋　藤五郎　橋

左源　久信　虎圭　美長十郎　要重　明勇之進　博輔　八治郎　郎　三善之助　善左衛門　樂　吉

誌進　吉次郎　内次郎　作雄　治藏　治郎　郎　助　善之助　治郎　吉

大衛消防組

千吉　千雫　赤櫻　櫻　鈴　兒宮　石佐　熊森　大今　鈴　鄉　千鈴　菊吉

薬坂　田薬　石間　井井　井木　玉本　川藤　谷合　友野　木玉　地作　木

善麟　雄康顯　一政五郎　選久太　善辰　庄英　久　金次　久直　千九　長太衛門　郎

作志　安之助　梧夫郎　進郎　一雄　吉郎　郎　吉郎　吉藏　一郎

落合消防組

副組頭　高細　高齋　田小　高八　山福　關落　小千　泉和　堀阿　小殘　福跡　早

橋川　橋藤　中畑　橋鎌　野田　野合　川薬　泉龍　部川　間田　部坂

庄運　健令　勝辰治郎　榮之助　直福　襲薬　善十郎　宗惣代　嘉藏　久六　庄宗　勘昌　壓

助藏　志史　吉郎　郎　郎　誌藏　吉郎　治郎　郎　助郎　治郎　助郎　吉作　雄雄

吉田消防組

副組頭　阿部　高橋　堀高　佐藤　堀龍　武藤　高三　高高　千福　鈴大　淺文　佐瀬　高武　小

藤　橋藤　藤龍　藤江　平橋　橋平　坂戸　木内　野屋　木戸　平藤　島

由右衛助　敬之助　重　重治郎　政房雄　幸林　清文　藤鐵太郎　鱗三郎　芦雅勇　秀東　選三郎　勘

強　勉榮郎　治郎　治藏　治作　志助郎　郎吉　夫治　治郎

川崎組消防頭

大熊佐佐佐小組渡戸加小及砂平平組鈴永我阿跡山山
宮宮谷藤藤藤原　逸野藤林川金井井　木澤妻部部家家
辨慶米福長辰右衛門　林運翌　興軍寶孝三　長右衛門利文幸之傳宗幸
吉見吉治藏藏門　藏平郎貞作郎藏郎　平藏砥吉衛內

富岡組消防頭

小太植永淺眞佐組佐小吉鈴佐植澤大尾高森菅今住佐福
林田村澤野壁藤　藤山田木藤野野沼崎橋　原野藤藤島
勝林右衛門之吉郎吉　卯長安茂左衛門幸　宇萬當武文之亥子之　中治七運之一熊善榮五郎忠兵衛
衛門吉郎吉　八吉吉郎助吉豐郎衛七助見治七郎

主任理事部長
理事部長
消防頭

沼邊組消防頭

菊上井太阿山渡永組鎌　田　大小柴遠村我組眞阿佐佐渡
地田筒細部田邊田　及川　槻關崎藤上妻　壁部藤藤藤邊
保孫幸四三郎　榮周源次郎藏　謙治郎男郎　周源今朝卯　大　喜三治郎吉郎誠七內郎吉　喜三郎　軍吉郎東平郎

副組頭

坂元消防頭

山門清齋島作佐佐庄菊大組高加伊草玉佐佐玉組丹鈴
內間野藤田間藤藤子地槻　橋藤藤野田藤伯藤田　野木
　東菊次郎三郎雄雄雄助平郎　榮鳳經宗虎仁榮十郎　櫻若衛門七助七郎治作清　眞一郎治
誠藏郎

逢隈組消防頭

玉浦組消防頭

飯平高星庄後吉櫻平八安久津　司原地木藤井井邊村浦　畑
塚塚橋　司藤田井井卷　榮傳幸庄茂衛門藏吉吉衛門藏治市　興太郎
幸作長忠新饗龜清甚正庄二郎助治郎　吉衛藏藏吉治郎

副組頭

高館組消防頭

小安吉大畑駒組大友興惣右衛門清術一郎清藏　大高菊石高大大
野倍田久保中板　友　安　兵　鑑　佐勝政傳雄義右衛門　丙村彌深衛門
伊吉次郎四郎郎治　芳一幸三王　　　　　平郎司平藏六　村彌左衛門吉郎
祐

副組頭

村田消防頭

柴山佐後大組山高島日菊笹遠惠森鈴加佐　大河原支部長警　走任警河原部補　大河原支部長警
崎家藤藤沼　家橋　下地谷藤　比志　木藤藤　佐組　谷藤　佐部
惣蹴六三郎仁萬郎衛　八熊傳惣萬源榮宗朋太長源十郎　鑑清次郎　恒右衛門卓
七諸郎郎　郎郎藏郎郎治吉吉藏郎　郎人　郎二

金ヶ瀬消防組

高星大伊平關高平青平佐曳菊伊井大組佐大二田武佐
橋　宮藤間　橋間柳間木地地藤上沼　山平瓶山田藤
定丈　芳之總喜太定郎治門郎利郎郎吉門八藏郎　今朝兵義寅義之松之盛
平吉助治郎治郎郎郎

山下組消頭防

渡渡寺渡加日岩渡加齋渡齋組菊森阿木小機澁組森菊柴
邊邊島邊邊藤下佐邊藤藤邊藤　地　部村卷田谷　地田
庄新良長三孝賢三六之渡助助幸之進慎　喜一郎　喜若四平十一毅重萬嘉　常孝
平助吉郎治郎助　　郎　　郎若衛門郎吉吉七　治一櫻

角田主作藤蔵部
田主殿蔵部
組消補頭防

西上大藤大吉手石高組牛加木地山野木藤柳邊藤木　藤
牧決木川平野塚黒稲　澤藤　今久英俊一　清三十兄吉太　鶴
良久文　信武理長栄輝　幸　勘治治郎郎誠哲郎郎　吉
蔵作男直造雄吉郎喜　男保

北郷消頭防

藤尾組消頭防

森黒組日遠柴遠菅佐後莊渡組長谷部藤稲口野槻崎　江島手
澤　下藤崎藤野藤藤司邊　坂田郷黒井司片地黒　友藤品槻藤
梶初　善義守正　武勝幸松　武保儀吾善惠祐　保善晋之蔵
之助馬　蔵雄治雄鎌夫義治吉　一次助一助治吾　郎郎郎

大原 組 消 頭防
須高亀安久組沼奈阿宮伊田石武清阿高菱木梅伊相中清
田橋山藤道倉須部本勢邊田内水部福谷村己藤澤澤野
庄幸之七郎源武運勝忠生太郎長三郎源清榮熊石安兵衛寅治郎喜貞代之助庄太郎源源

稲井 組 消 頭防
阿日亀千齋日組阿梶菊阿色内藤松木松組須阿須石小目
部野山巽藤下部田地部川海田村田田部田森池黒
庄清兵衛豊太郎傳忠之助鷹治重太郎德仲竹泰庄亀友喜義武忠音之助久己代吉
平

渡 組 消 頭防
藤渡佐四野杉組遠牛遠木遠若遠木勝組杉丹阿阿日阿宮阿
原邊瀬見浦藤澤藤村藤田藤村又山野部部野部澤部
春兵孝太郎一清喜忠菊龍義寅治平兵衛武之治幸昌吉昌久周米
吉治郎藏雄祝市明雄治藏雄郎衛

荻 組 消 頭防
藤佐三左小村組伊古吉古柏菊古二秋境足高渡佐小
内間藤崎浦藤島上藤川田川長地山關巽利橋邊藤川
今朝之助省善安吉勇之助勇興利寿富治右衛門幸郁重榮榮太郎谷松勇文
一三六平治吉三郎弘治郎門榮郎榮作郎吉健爾雄肇

石巻麦部消防組 主任巻部長巻部補 若若千巽興吉左衛門藏吉志祥郎

副組頭 組 消 頭防
阿阿八後齋木阿遠鈴鈴和遠阿松後阿八齋阿鈴組藤佐保
部部木久左衛門藤藤村部藤木木泉藤部原藤部木藤部木原藤原
松亀治郎喜嘉新市重榮仁喜哲代之助清一榮幸福松平文涯隼熊
太郎郎門郎吉助郎治治治助藏郎郎吉藏治治平吉太郎明太

副組頭 組 消 頭防
須高亀安久組沼奈阿宮伊田石武清阿高菱木梅伊相中清
田橋山藤道倉須部本勢邊田内水部福谷村己藤澤澤野
庄幸之七郎源武運勝忠生太郎長三郎源清榮熊石安兵衛寅治郎喜貞代之助庄太郎源源
七郎助郎一治吾郎郎藏助吉吉治郎助三治助郎藏助

渡 組 消 頭防
阿日亀千齋日組阿梶菊阿色内藤松木松組須阿須石小目
部野山巽藤下部田地部川海田村田田部田森池黒
庄清兵衛豊太郎傳忠之助鷹治重太郎德仲竹泰庄亀友喜義武忠音之助久己代吉
平

女川 組 消 頭防
藤渡佐四野杉組遠牛遠木遠若遠木勝組杉丹阿阿日阿宮阿
原邊瀬見浦藤澤藤村藤田藤村又山野部部野部澤部
春兵孝太郎一清喜忠菊龍義寅治平兵衛武之治幸昌吉昌久周米
吉治郎藏雄祝市明雄治藏雄郎衛郎雄治治治藏

鮎川 組 消 頭防
阿阿八後齋木阿遠鈴鈴和遠阿松後阿八齋阿鈴組藤佐保
部部木久左衛門藤藤村部藤木木泉藤部原藤部木藤部木原藤原
松亀治郎喜嘉新市重榮仁喜哲代之助清一榮幸福松平文涯隼熊
太郎郎門郎吉助郎治治治助藏郎郎吉藏治治平吉太郎明太

副組頭 組 消 頭防
白川 佐松佐平組菊一谷山佐久間山佐古組八久佐佐制佐佐組齋佐武高
藤野藤間地條家間兵衛島間藤野藤藤田橋
鎧俊健三林義傳貞金榮喜左衛門磯幸傳庄麗長十仁庄喜三俊
五郎吉郎治雄七吉藏藏一吉臣吉郎治郎郎三郎八郎厳

副組頭 組 消 頭防
七ヶ宿 齊川 古組遠村知古八小組齋高齋齋高大高新大熊組平大佐黒
山藤上中山卷室藤橋藤藤藤藤藤藤浦谷間庭藤田
吉佐市三郎敏寛文健秀厳庄長一林啓業喜
郎郎一三助忠三作治力八智謙市忠郎誠助郎喜藏

副組頭 組 消 頭防
圓田川 堀平佐松三佐小村組伊古吉古柏菊古二秋境足高渡佐小
内間藤崎浦藤島上藤川田川長地山關巽利橋邊藤川
今朝之助省善安吉勇之助勇興利寿富治右衛門幸郁重榮榮太郎谷松勇文
一三六平治吉三郎弘治郎門榮郎榮作郎吉健爾雄肇

副組頭 組 消 頭防
大隈澤 石巻麦部消防組 主任巻部長巻部補 若若千巽興吉左衛門藏吉志祥郎谷谷谷組庄阿大菊齋佐大島組佐佐佐
原原千津條槻戸津津司部野地藤藤野貫藤藤藤藤
作右衛門勇郎貞衛清喜一三藏郎作
進定

中津山消防組頭　二俣

橋浦消防組頭　副組

横山惣　梶横千　横鈴　佐藤鈴　佐々木山　武大　小組　柳星　千三　佐々木原　江葉　山木　佐々木山　丙指　田葉　浦藤　山口山　原江葉　山木　佐々木原　木久　長民　久智　左衛門　藤善　之千　良政　庄忠　兵平　富　良長　民久　久義　左衛　藤新　藤善　之千　篤彌　助六　八英　藏治　雄吉　哉雄　茂門　平筱　吾藤　吉雄　富

十五貫消防組頭　細

木高　鈴千　千西　佐々木　村橋　木葉　葉城　木葉　長俊　平源　陽運　利寛　治七　郎作　作郎　治平

大川消防組頭　細

平三　郎治　金治　代治　藏助　藏郎　盛郎　吉清　金佐　来太　重之　亟正　郎治　八郎　太四　東庄　貞吉　已代　治藏　助藏　郎盛　郎亟　正郎　治郎

氣仙沼消防組頭　細

氣仙沼郡長欅　氣仙沼郡補　圭任欅

永神　永武　永組　岩武　横藤　阿武　久山　坂神　永武　永組　岩武　横藤　川永　神鈴　阿武　久山　坂神　永武　永組　岩武　横藤　野田野　佐　木部山　道田　下山　沼山　沼　澤内　江野　地坂　金幸三　傳太　清明　政忠　清惣三　孝幸　治五　市四　荷門　夫助　平兵衛　●寛登　兵衛郎　助郎　松助　磨雄　藏郎　郎治　郎郎　郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎

大谷消防組頭　副組

菊木　酒齋　菊木　酒齋　菊木　酒齋　

組頭　千葉榮松
副組頭　佐藤健夫
熊谷市平
島山太治郎
芳賀秀治郎
佐藤多右衛門
三浦金右衛門
發田謙吉
菅原清太郎
皆川貞雄

小泉消防組
組頭　及川富男
副組頭　及川梅吉
山内善三郎
三浦榮作
菅原清之進
及川安左衛門

鹿折消防組
組頭　小野寺良助
副組頭　横山九助
村上捨五郎
菅原繁政
島山幸平
村上萬四郎

小野元
藤野章平
後藤久之助

新月消防組
組頭　西城秀雄
副組頭　昆野末之進
小山田右衛門
菅原長一
吉田辰五郎
吉田輝繁
吉田金次郎
小山義茂

唐桑消防組
組頭　島山政市
小松儆平
龜山孝治郎
虎岩俊英
鈴木市之進
千葉清

松岩消防組
組頭　小野寺忠平
副組頭　小野寺治太郎
小野寺庄八
内海喜一

小野寺松治
松本義雄
小野寺直治郎
及川繁雄
小野寺富雄
鈴木寅三郎

大島消防組
組頭　菅原彦太郎
伊藤佐内
小野寺留右衛門
村上吉左衛門
小野寺憲吉
小山武吉

階上消防組
組頭　小野寺菊治
副組頭　菊田文男
菊田榮一
小野寺千代治
島山仁
小野寺捨五郎
三浦武雄
三浦寛治郎
大柳繁治

志津川消防組
組頭　佐藤彌代二
副組頭　工藤健夫
佐藤利兵衛
渡邊德治
西條幸平
佐藤三雄
佐藤薫
渡邊卯太郎
高橋正治郎
高橋長九郎
阿部逸郎

歌津消防組
組頭　阿部勇榮
及川新六
内海利作
高橋森治
牧野熊男
千葉雄一
三浦庄治郎

戸倉消防組
組頭　小澤郁
副組頭　佐藤十内
高橋卯左衛門

志津川支部長警部　大柳繁治
主任巡査部長　日下紐五郎

佐々木善三郎
松岡喜代志
小山德藏
佐藤清

入谷消防組
組頭　首藤内藏治
西城倉之進
小野寺佐治右衛門
菅原新治郎
阿部定見
佐藤源吾

横山消防組
組頭　阿部泰一
副組頭　菊地兵二
佐藤安一郎
西條太喜治
伊藤博
後藤金之進
堀田安之亟

須藤研
菅野正兵衛
山田正十郎
佐藤三武郎
菅野金兵衛

豐里消防組
組頭　加藤良右衛門
高橋駒治
佐藤壽
千葉三郎
高橋幸之進
佐々木文右衛門
伊藤泉
後藤英記
佐々木照夫

米川消防組
組頭　丸森仲五郎
秋山忠一
後藤吉治
千葉長六
及川論
千葉涉
佐沼消防組
組頭　佐藤鐵郎
木村善助
佐々木才吉

菅原安治
阿部實治
後藤安治
千葉謙治

菅原圓平
後藤宗千嘉
小野寺治三郎
吉野長藏
千葉源十郎

清水消防組
組頭　渡邊硬
木村執
佐々木正太夫
羽生長藏
須藤新吾
白石正治
高清水吉太夫
千葉一郎
及川昇

佐沼支部長警部　鈴木儀助
主任警部補　我妻菊治

及川善行
吉野長松
島山勝衛

登米支部長警部　鬼怒川世履
主任警部補　大浪藤治郎
登米消防組
組頭　福島重兵衛
佐藤信吉

米谷消防組
組頭　木村治左衛門
阿部郁治郎
石塚秀光
本田卓治

錦織消防組
組頭　及川榮

南郷
副組頭　組消防
櫻井　佐藤　川田　相馬　小名浜　三浦　小川　南部　板倉　岩城　組合　川崎　山田　小野寺　木村　井澤　瀬川　瀬谷　三浦　大久保
庄之進　丹司　義雄　義才　駒良　松三郎　秀泰　清治　恒幸　繁雄　庄五郎　野三郎

渡邊　岡崎　大槻　小野寺　佐々木　渡邊　三浦　菊地　岡崎　講武　青島　松本　上野　大武　盛岡　赤坂　野口　成田　佐々木　伊藤　野口　渡邊　小野寺
逢春　武雄　好雄　武雄　宇吉　健助　善治　喜代治　千代治　正一　純一　卯吉　利雄　榮治　四郎　千代五郎　信治　俊雄　源治　孫郎　勝郎　伍郎
雄胖　雄胖　雄吉　雄助　治郎　幸雄　雄郎　吉雄　藏郎　藏泰　吉郎　治郎　治郎　衛門　鷹郎　郎藏

中埰
副組頭　組消防
荒川　岡野　新野　飯野　組合　佐藤　久保　佐々木　佐々木　佐々木　伊藤　大藤　武田　佐藤　武田　伊藤　大藤　組合　安藤　門馬　横山　黑田　大野　赤江
癸一郎　泰助　只一郎　文五郎　吉治　志郎　吉郎　藏一　一郎　吉助　基衛　仁吾　男助　男助　勝郎

田尻
副組頭　組消防
小牛田
副組頭　組消防
相馬　伊澤　佐藤　大藤　門馬　菊地　加藤　浅野　石川　齋藤　組合　伊藤　相馬　川崎　遠藤　組合　松本　佐々木　三浦　高橋　横山　今野　澤野
西郷　敏雄　鶴藤　重郎　茂雄　憤　雄三　零郎　七之助　寛治　傳郎　秀雄　午郎　亜郎　左衛門　文四郎
吉郎　治郎　登郎　勝郎　吉郎　重郎　東郎　七郎　治郎　治郎　敬郎　郎郎　郎郎　郎郎　見郎　一郎　治郎　門郎

元浦谷
組消防
寶江
組消防
熊谷　北條　組合　小野寺　猪股　大澤　阿部　皆川　千葉　神谷　菅原　畠山　佐藤　畠山　組合　星野　泉田　三浦　北條　高橋　太田　相馬
内谷　川武　繼雄　癸之助　芳雄　魯治郎　正一郎　長太郎　嚴雄　鑑治郎　蔦之助　清治郎　進郎　忠治　松治　浦利　浦久　浦兵衛　森喜　田澤
平之助　寛夫　治郎　進郎　進郎　夫郎　儒郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎　郎郎

吉田
組消防
鈴木　仙台　及川　大槻　主藤　鈴木　組合　小野寺　佐藤　佐々木　熊谷　清水　千葉　千葉　菅原　二本木　熊谷　組合　芳賀　佐々木　沼倉　山内　及川
木村　川崎　槻藤　藤木　寺藤　谷木　水藤　藤原　木谷　賀健　傳左衛門　政吉
珍郎　已之助　房雄　茂郎　正太郎　和藏　國治　政助　清之助　竹治　熊郎　幸治郎　力助　誠一　武三郎　健吉郎　政郎　青治郎

南方
副組頭　組消防
後藤　伊藤　阿部　菅原　田口　高橋　千葉　大槻　遠藤　星藤　鎌田　伊藤　組合　上野　佐々木　三條　佐々木　富士原　佐藤　野口　佐々木　名生　佐藤　組合
米治郎　榮一郎　唯一郎　政吉　利助　清之助　大藏　東太郎　初吉　彥四郎　保治　惣兵衛　清治　作郎　龜市郎　榮一郎　定志　仲平郎　德市郎

北方
副組頭　組消防
主任警部補　警部　警部長　新谷部　新田
伊藤　島山　渡藤　渡藤　千葉　星藤　星藤　小藤　星藤　三浦　高橋　組合　瀨ヶ沼　千葉　阿部　小松　大澤　長谷　後藤　千葉　組合　高橋　可野　淺野　菅原
醍醐　榮之助　三郎　亀治郎　王之助　正一郎　市郎　清郎　林郎　三郎　萬太郎　浦郎　繼郎　孫治郎　武郎　彥郎　清郎　峯郎　左衛門　市郎　太郎　林郎　市郎　三郎　菅郎　正郎　英郎　大郎

下伊場野
組
消防
頭

今佐今倉鈴高保高小高遠大遠佐早柏平高組阿沼本阿
藤藤野本木橋科稀園稀藤場藤木坂倉山橋部崎間部
栄信逸齊勇源右衛門喜信傳惣武肥忠鑒軍元源新武運野
七良令記彌一智次藏一男後七郎吾亨亮吉雄運雄

志田
組
消防
頭

伊相佐々木菁福佐福西森千佐加組菁鹿佐菁加鈴矢組伊熊石
藤澤原原木原村谷巽藤藤沼野木々木巽藤越藤谷山
鑑豊末良彦鑑喜良忠良久之平吉之右衛門此富三正
穆助治吉作郎郎助治助助治郎郎助吉郎面郎長

長岡
組
消防
頭

宮澤
組
消防
頭

東大崎
組
消防
頭

石三組大平章菊土柴佐組加門佐々木鈴尖熊大組木伊菁渡紺野
堂塚槻地坂地井倉藤藤脇木木戸谷塙村藤原遠忠右衛
丑孫惣厩幾春武良利永貞斎右衛之兵治郎長豊熊
六之亟弘助治吉志亟治治三郎郎吉郎門雄郎靜七吉治門

北浦
組
消防
頭

富永
組
消防
頭

岡組
組頭

高今寺酒岩加佐千組氏佐佐渡千組佐三平高鹿佐高三村
橋野尾井住藤木々葉家木々木邊葉藤浦野野直々木橋浦田
鹽武紳之二賢勝多利一源榮治儀久四郎郎正二郎門吉吉志夫
治男郎運郎也衛司郎界助

高倉
組
消防
頭

沼
部
組
消防
頭

佐廣古高柴石只柳木村蕪佐伊今神山加加富伊組伊鈴
々木藤鶴山橋根垣野原幡上木藤藤川子田崎藤藤田藤夢木
源豊常皆千龍直藤之勇三郎強亮郎稔郎人雄秀
五郎治治枝治治裟助男郎研悟一郎

古川
組
消防
頭

篤
獄
組
消防
頭

不動堂
組
消防
頭

金早武金千大佐々木福大大組加佐々木村佐伊加組
原坂田原巽泉木々井倉部木田川森藤上木夢藤
物丹廣野金運稜教耕文喜七直清一政武勝秀政豹五
扶四郎吉藏見作藏治市司思郎寶衛郎男夫衛藏亮郎

松山
組
消防
頭

三木木
組
消防
頭

相常佐齋安只組早及藤白千阿鈴葛菁鈴鈴千高三高飯
澤鑑々木藤部野坂川門幡巽部木西原木木巽田泰橋島
匡幸清義雄源政太四七傳億欣文雄安佐彦左衛繁健
吉男亟之亟行治善吉郎助平衛助郎司一治郎治吉門治夫

副組
組頭

匹島
組
消防
頭

岩千庄星鈴栗佐佐佐栗茂佐知佐小日小加櫂阿鎌組今佐々
淵巽司木田藤藤藤田泉木中木川野川藤井部田野木
文長重藤盛達綾雄好勝鑑盛秀鑑軍哲運芙長三辰哲
吾郎亟七幸男雄吉誠雄郎鍛治雄郎平治郎作助治雄

中新田支部長藤
新田
組
消防
頭

佐藤
及加藤義次右衛門
佐々木川

新鈴木
田玄
伴二郎

中千畠
川
久
吾五郎

千葉山
木
右衛門

早高
坂
善吉

高中
橋村
重四郎

主任巡査部長
千葉地
今朝見功

横田
江
一太郎

千田
村
喜一郎

横内
山
盛

佐々木
川
藤義次右衛門

佐田
村
傳見

渡鈴
木
田

主任巡査部
千葉地
今朝見功

小野田
組
消防
頭

早檜
坂野
浦

檜三
野
野

佐土
浦
藤

山鎌
田
本

組
藤
田

宮崎
組
消防
頭

伊
藤
太

伊渡
新
吉三郎

伊板
藤野
澤

工藤
川
善
治

早板
橋
五
郎

早佐々木
坂
藤
新

早伊
坂藤
信
喜

早藤
坂原
雷
雄

加藤
藤和田
右衛門
榮
藏

佐
藤
吉

正
精
覺

新榮
藤
吉三郎

藤野
澤
藏

垣
榮
次郎

加美
組
消防
頭

早
板
千
治

祐
藤
一

三
作

組
雄
郎

早
祐
平

松
吉

永
川
地

小
藤
木

鈴
地
内

佐
内
野

組
村
野

色麻
組
消防
頭

佐
藤
伊

屋
藤
三

佐
谷
藏

佐藤
藏
喜

福
藤
吉三郎

大
河
藏

今
野
喜

北
村
郎

組
野
郎

浅
野
郎

板
谷
興
左衛門

板
垣
長
藏

千
垣
猛
雄

三
葉
孫
藏

組
浦
市
郎

雄
井
賢
治

早
坂
力
郎

祐
倉
傳
治

松
山
長
吉

永
川
市
郎

小
地
宗
藏

殉
藤
定
郎

佐
木
兵
作

鈴
田
之
助

組
屋
七

佐
橋
志

藤
谷
郎

藤
地
郎

藤
内
郎

藤
谷
郎

藤
内
郎

藤
村
郎

藤
野
郎

藤
村
郎

藤
野
郎

藤
野
郎

藤
野

若柳文蔵　主任書記長　書記補

副組頭　組頭　柳消防　部補

小野寺　阿部　松浦　小野寺　高橋　稲邊　千田　木川　田中　稲田　齋藤　伊藤　菅原　中島　千葉　伊藤　熊谷　中島　組頭　服部　佐々木　小山　佐藤

諸兵衛　悦治　渉八　右衛門　甚治　泰藏　勇作　長治　市郎　一郎　良作　哲治　爲治　寅平　久郎　軍藏　孝治　衛五郎　浦夫　忠吾　三郎　梅郎

有賀組頭　有賀消防　千葉組頭　千葉消防　金谷組頭　金谷消防　近野組頭　近野消防　小野寺組頭　小野寺消防　金野組頭　金野消防　松井組頭　松井消防　多田組頭　多田消防　後藤組頭　後藤消防　菅原組頭　菅原消防　千葉組頭　千葉消防　金成組頭　金成消防　佐々木組頭　佐々木消防　小野寺組頭　小野寺消防　加藤組頭　加藤消防　氏家組頭　氏家消防　千葉組頭　千葉消防　熊谷組頭　熊谷消防　佐藤組頭　佐藤消防　三浦組頭　三浦消防　加藤組頭　加藤消防　千葉組頭　千葉消防

恒一郎　新藏吉　澤左衛門　源治郎　雄三　吾一郎　春吉　久極一郎　吉　庄兵衛　國治郎　澤之助　武作　太郎　茶雄　光平　永治　敬保　吉一

澤邊組頭　澤邊消防

阿部平　曾根平　藤原武　中村治　加藤和　大寺郎　小野寺郎　鈴木郎　佐藤郎　佐藤郎　渡邊郎　岩淵治　高橋郎　菅原郎　平野郎　千葉郎　高橋郎　川崎郎　三野郎　小野寺郎　小野寺郎　沼倉郎

鹽竈四郎　嘉平治　源善治　龍三郎　充一郎　信一郎　仙治郎　忠四郎　寅治郎　三慶郎　歌藏治　義郎　官左衛門　新藏作　良雄郎　稲雄郎　榮誠　三郎　夫郎

荻野組頭　荻野消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防　佐藤組頭　佐藤消防

千後　千葉　佐藤　小野寺　佐藤　田藤　佐藤　原藤　佐藤　原藤　佐藤　藤藤　佐藤　藤藤　佐藤　藤

右越消防組
組頭八島德朗
高橋喜藏
三浦泰三郎
門脇直之進
三浦誠一
佐藤作右衛門
工藤兵太右衛門
菅原駒三郎
佐藤養治郎
菅原　絲
阿部寅六
佐藤　清
三浦勝治郎
佐藤水哉
猪股順養
阿部慶治附
佐藤宗治

岩ヶ崎消防組
組頭沼倉泰治郎
副組頭板本良助
齋藤　實
佐々木竹壽郎
高橋儀右衛門
佐藤與十郎
淺野久市
菅原清助
佐藤　寛
高橋松三郎

栗駒消防組
組頭菅原村治
武田　信
菅原兵太郎
菅原清兵衛
濁沼丈之進
蘇武男二郎

鳥矢崎消防組
組頭菅原久右衛門
副組頭菅原養三郎
千葉　正
阿部千壽
佐竹甚之助
佐藤信次
鈴木新作
佐藤久助
佐竹精一郎
佐藤喜代治
尾松消防組
組頭千葉平吉
氏家金四郎
遠藤東
長井養八
阿部正
菅原清助

文字消防組
組頭只野新五郎
只野　靜
四ノ宮勇司
千葉吉雄
菅原政雄
千葉周藏
三浦圓藏
岩淵賢吉
阿部久吉
近藤平内
相馬力夫

鷲澤消防組
組頭鈴木柳太郎
三村金治
玉井清藏
佐藤善藏
加藤綾人
鈴木　誠
市川正右衛門
小野寺重右衛門
高橋直一郎
津久毛消防頭
組頭鈴木　清
菅原正治
藤原兵三郎

（附　錄）

仙臺市勢

イ、仙臺市沿革

我等消防組の戍る仙臺市の往古は文獻の徵すべきものなく精細なる事蹟を叙するを得ざるも、文治五年源頼朝千葉五郎胤道を國分莊に封ずるや地を千代と稱し、國分氏この地に居ること四百年、後伊達政宗公の東奥二十一郡を領するや治府を此の地に相し仙臺と改め、大に土木を起し城を青葉山に築き市街を經營し慶長八年岩手山より移り、爾來二百六十有餘年代に伊達氏の城下として明治維新に及べり明治四年七月廢藩置縣の際宮城縣を置かれ、同五年區制を布かれ、同十一年七月仙臺區と稱せらる。

明治二十二年市制實施せられ、四月一日より仙臺市と稱す、時に戶數一萬六千八百、人口八萬六千三百五十三人を算せり、

明治維新に疲弊せる大藩の後を受け繼ぎたる仙臺市は、爾來次第に官衙學校の町として知られ、又杜の都と稱せらる程市中樹木多し。

近年主なる道路は舗裝せられ、市街電車は第一期線を完成して今や第二期線に着手し、建物等は從つて舊觀を改め近代都市として形態を整ふるに至れり。本市の誇りは學都たる點にあり、教育機關殆ど完備し、官衙には縣廳、市役所を始め稅務監督局、鐵道局、遞信局、煙草專賣局、國立工藝指導所、控訴院、地方裁判所及師團司令部等を網羅し、産業方面に於ては織物、染物、木工品、漆器、竹製品等歷史あり特色ある製品を出して逐年産額を增加し、又麥酒、

製糸、紡績等の諸工業も起り、商工都市として發展の趨勢を示せり。

昭和三年四月隣接名取郡長町、宮城郡原町及七郷村の一部南小泉を、同六年四月宮城郡七北田村の一部荒巻北根を同七年十月名取郡西多賀村を併合し、今や面積五方里六三餘、人口二十萬に達するに至り、頓に都市計畫事業遂行の曉は鹽釜築港、仙山鐵道の完成と相俟ちて更に面目を一新すること遠き將來に非ざるを信ず。

ロ、面積及高低

△計表ハ昭和八年度ノ數字ヲ基準トシテ計算ス

廣				面積	高			低	
東西		南北	周圍		最高	響所	最低	物所	
一三粁		一一、七五粁	五三粁	八六、九七粁	三三五五米	國見峠	五米	東龍ノ渕	

ハ、土地

昭和八年度

	宅地	田	畑	山林其他	計
有租地反別	一、〇四四、七丁	一、一六九、七丁	一、〇七一、四丁	二、一四五、二丁	五、三五〇、九丁
賃貨價格	三、〇一五、七九一円	三三一四八円	一四三四九五円	一六八六六円	三、五一八、六五〇円

ニ、戸口

區分	戸數	男	女	計	一戸當	一戸當
昭和八年末	三八、〇六六	一〇六、六〇一	一〇六、六〇九	二一三、二一〇		五、六〇
昭和五年國勢調査	三六、一二八（世帶）	九四七六	九六、三八四	一九八六〇		五、四二

ホ、職業

區分	農業	鑛業	工業	商業	交通業	公務自由業	其他諸業	收入生計	無職	計
戸數	一、九五八	二〇五	六、六五九	九、七四	二、八七七	八、〇七四	四五七九	二、三五九	一、五六一	三八、〇六六
歩合	四、〇五	〇、一	一、八	一、六	〇、七	〇、二一	一、二	〇、六	〇、四	

ヘ、教育

昭和八年度

| 市立 | | | |

宇、社寺教會

昭和八年度

各教教會	神道	佛教	基督教會	同講義所
	一二	九	一八	四

寺院	淨土	曹洞	臨濟	真宗	臨濟	天臺	華嚴	日蓮	時宗	計
	二二	四〇	一七	一一	一〇	一二	三	七	二	一二四

神社	縣社	鄉社	村社	無格社	計
	三	一	一五	三八	五七

財政

昭和八年度

入出歳	一般會計	特別會計
出	二、二〇〇、四九円	三、六八七、五六

擔負稅額	直接國稅	縣稅	市稅
金額	五六、五七円	八七六、二八三	六七〇、七五〇
納稅者總數ニ對スル平均一人當	四三一五人	二六、二八三	一九、六二一
平總人口ニ對スル均一人當	二、七六人	四、〇三七	三、一九八
平總戶數ニ對スル均一戶當	一四九二戶	二三、五九〇	一八、〇五七
納稅者總數	一二、九五人	三三、三九	三四、〇九八

入出歳	歳入	歳出 經常	歳出 臨時	歳出 計
一般會計	二、二〇〇、四九円	一、〇八七、五六円	一、一二二、九二円	二、二〇〇、四九円
特別會計	三、六八七、五六		三、六八七、五六	三、六八七、五六

又ノ一 氣象

(一)

月分	平均氣壓	平均溫度	平均濕度	平均風速	最强風速	最强方向	最多方向
一月	七六二・一粍	〇・九	七二・〇	一・五	七・三	北	北
二月	七五七・九	一・四	七六・四	一・七	二・三	同	同
三月	七六一・一	三・五	七二・四	二・〇	二・三	同	同
四月	七九九・四	八・七	七四・七	一・七	一一・七	北	北
五月	七九九・二	一三・五	七九・六	一・三	五・四	西	西
六月	七九七・九	一九・五	八五・五	一・二	四・六	北	北
七月	七九五・五	二三・三	八七・八	一・三	八・五	南	南
八月	七九三・九	二二・二	八六・六	一・二	五・八	西	西
九月	七九七・三	一九・五	八六・五	一・二	五・四	南	南
十月	七九五・五	一三・六	七九・六	一・二	五・四	西	西
十一月	七九九・四	八・七	七四・七	一・七	一一・七	北	北
十二月	七六一・一	三・五	七二・四	二・〇	二・三	同	同
平均	七五七・九	一一・四	七六・四	一・七	二・三	同	同

又ノ二 氣象

(昭和八年)

月分	平均氣壓	平均溫度	平均濕度	平均風速	最强風速	最强方向	最多方向
一月	七六二・一粍	〇・九	七二・〇	一・五	七・三	北	北
二月	七五七・九	一・四	七六・四	一・七	二・三	同	同
三月	七六一・一	三・五	七二・四	二・〇	二・三	同	同
四月	七九九・四	八・七	七四・七	一・七	一一・七	北	北
五月	七九九・二	一三・五	七九・六	一・三	五・四	西	西
六月	七九七・九	一九・五	八五・五	一・二	四・六	北	北
七月	七九五・五	二三・三	八七・八	一・三	八・五	南	南
八月	七九三・九	二二・二	八六・六	一・二	五・八	西	西
九月	七九七・三	一九・五	八六・五	一・二	五・四	南	南
十月	七九五・五	一三・六	七九・六	一・二	五・四	西	西
十一月	七九九・四	八・七	七四・七	一・七	一一・七	北	北
十二月	七六一・一	三・五	七二・四	二・〇	二・三	同	同
平均	七五七・九	一一・四	七六・四	一・七	二・三	同	同

備考

又ノ三　氣象

（昭和九年）

区分	平均氣壓	平均溫度	平均濕度	平均風速	最强風速	最强方向	最多方向	備考
平均	七五六・九四	〇・五	七二・一	一・八	九・五	西	西	
一月	七五五・七七	〇・〇	七〇・三	一・八	一〇・五	同	同	
二月	七五六・〇	二・二	六六・九	二・一	一五・六	北	北	
三月	七五九・四	七・五	六八・六	二・三	二四・四	西	西	
四月	七五七・二	一四・〇	七六・三	一・四	七・七	南	南	
五月	七五四・四	一八・九	八一・〇	一・四	五・一	北	北	
六月	七五四・四	二〇・〇	八八・九	一・一	四・四	同	同	
七月	七五五・六	二二・一	八七・一	〇・九	五・四	南	南	
八月	七五八・〇	二一・一	七五・六	一・六	四・四	同	同	
九月	七五八・八	一〇・五	七六・六	一・六	一〇・五	北	北	
十月	七五九・一	七・七	七六・六	一・八	一・五	同	同	
十一月	七五九・八	一一・七	七一・一	一・七	一・四	同	同	
十二月	七五七・六	一三・九	七六・八	一・五	一三・五	同	同	
平均	七五七・一	一四・七	七七・一	一・七	一一・五	北	北	
一月	七五六・三	一一・三	七六・六	一・五	一一・五	同	同	
二月	七五九・一	一〇・〇	八五・三	一・四	一一・四	同	同	
三月	七五六・〇	一一・一	七七・三	一・四	一〇・二	同	同	
四月	七五四・七	一四・七	七七・一	一・一	一一・七	同	同	
五月	七五四・四	一八・九	七七・七	一・一	一一・七	同	同	
六月	七五五・六	二一・一	七七・七	一・一	一一・五	同	同	
七月	七五六・一	二四・一	七七・七	一・一	一二・八	北	北	
八月	七五六・八	二四・一	七七・七	一・一	一四・一	同	同	
九月	七五七・一	二一・一	七六・一	一・一	一四・一	同	同	
十月	七五八・八	一一・八	七六・八	一・六	一一・五	北	北	
十一月	七五九・一	一二・五	七六・六	一・六	一四・一	西	西	
十二月	七五八・八	一一・八	七六・六	一・六	一四・一	西	西	

ル、風速

年	平均風速	最强風速	最强方向	最多方向	備考
同昭和二年	一・六	一四・八	西	西	
同三年	一・五	一四・一	北	北	
同四年	一・四	一二・八	同	同	
同五年	一・四	一〇・二	同	同	
同六年	一・七	一七・二	同	同	
同七年	一・七	一二・三	同	同	
同八年	一・五	一三・五	同	同	
同九年	一・六	一五・六	西	西	
平均	一・六	一四・八	西	西	
一月	一・五	一四・一	北	北	
二月	一・四	一二・八	西	西	
三月	一・四	一〇・二	同	同	
四月	一・七	一七・二	同	同	
五月	一・七	一二・三	同	同	
六月	一・五	一三・五	同	同	
七月	一・六	一四・一	西	西	
八月	一・六	一四・一	西	西	
九月	一・三	一四・一	北	北	
十月	一・八	一四・一	西	西	
十一月	一・八	一四・一	西	西	
十二月	一・九	一九・〇	北	北	
平均	一・八	一四・三	北	北	
一月	一・八	一〇・五	同	同	
二月	一・五	一一・六	北	北	
三月	二・一	一二・四	西	西	
四月	二・三	一四・七	西	西	
五月	一・七	一一・七	南	南	
六月	一・四	一四・四	同	同	
七月	一・四	一四・四	同	同	
八月	一・一	一四・九	同	同	
九月	〇・九	一〇・五	北	北	
十月	一・八	一五・六	西	西	
十一月	一・八	一〇・五	同	同	
十二月	一・五	一一・五	北	北	
平均	一・一	一四・九	西	西	
一月	一・二	一三・五	西	西	
二月	一・一	一一・八	北	北	
三月	一・一	一一・八	北	北	
四月	一・七	一四・二	南	南	
五月	一・七	一二・三	北	北	
六月	一・七	一七・〇	西	西	
七月	一・六	一四・一	西	西	
八月	一・六	一四・一	西	西	
九月	一・三	一四・一	北	北	
十月	一・八	一四・一	西	西	
十一月	一・八	一四・一	西	西	
十二月	一・九	一九・〇	北	北	

昭和十年四月二十日 印刷
昭和十年四月二十五日 發行

〔非賣品〕

編輯兼發行者　仙臺市東三番丁七十九番地　仙臺消防組

印刷人　東京市日本橋區蠣殼町一丁目十番地　中津川虎之進

印刷所　東京市日本橋區蠣殼町一丁目十番地　明文社
電話茅場町(66)〔三五七六番〕〔二五九一番〕

河北新報

月掛火災保險の元祖

大正三年一月開業

資本金壹百萬圓
諸積立金四百六拾萬圓

(本社) 大阪市東區北濱一丁目六番地

日本動産火災保險株式會社

電話本局(23) 六二一番・三八八番
六二二番・五九四六番
振替口座大阪 二五七七七番

社長 法學博士 粟津清亮
取締役 宮本利右衛門
取締役 吉田猪太郎
取締役 井上市次郎
監査役 樋口六左衛門
監査役 鷲池平九郎

仙臺市多門通三番地
仙臺支部
電話三九八番
振替仙臺 六三三〇番

仙臺ホテル
(仙臺驛前)

多年御贔負を蒙り難有御禮申上げます
時勢の進運に伴ひ目下建物全部新築中
の處竣工の上は尚ほ一層の御愛顧を
御願ひ致します

帝麻製布ホース

金牌印　錨印　地球印

專賣特許丸耳織　登錄商標黑筋入

株式會社　赤尾保商店

一手販賣

大阪市西區　堀南通六丁目　賣立　電話新町八四五・五四九
東京營業所　東京市日本橋北詰　日本橋(24)一七七一　電話番九六二三

出張所
名古屋市中區平武町一丁目　電話番四九七中
吳市濱田町八丁目　電話番四五九一
京都府城南大門通三丁目　電話番七三〇三
佐世保市泉町七九　電話番九六二
横須賀・舞鶴　電話番六八五五
福岡市須崎町一八

營業科目

消防用自動車喞筒
消防用ガソリン喞筒
消防用手働喞筒
鑛山用喞筒
船舶用喞筒
井戸用喞筒
灌漑排水喞筒
土工用喞筒
特許町野式按手金具
特許防火噴霧喞筒
各種噴霧器一式
消防用器具一式

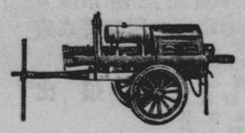
製造發賣元

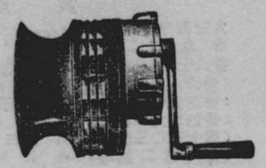
東京喞筒株式會社

東京市神田區旅籠町一丁目
（旅籠町停留所前）

電話下谷長四七九一番
振替東京三四六三六番

工場　東京市本所區龜澤町四ノ十二
分工場　東京市本所區緣町一ノ九





松嶋ホテル
白鷗樓

松嶋海岸